

魔界戦記IS～プリニー イチカの魔界戦記～

ネバル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

織斑一夏は第2回モンド・グロツソで何者かに誘拐されそして殺された。

しかし、死体は行方不明になり織斑一夏は行方不明とされた。

一夏の魂は大天使ラミントンによって地獄に送り出される事になった。

一夏はその地獄でプリニーとなり何を見るのか？

予想外に反響が強かったのでオリジナルの方を消しこちらメインでやらせて頂きます。

今度は気がむいた時に書かせてもらいます、基本的には月曜更新になります。が御了承

ください。

いたらない点がございましたらすみません

あらずじに矛盾が見つかってしまったので変えました。

目次

プロローグ

プロローグ〜事の始まり〜 | 1

第1章〜魔界戦記イチカ!!

天界にて | 6

誕生!!イチカプリニー!! | 14

お調子者の元芸人 | 21

プリニーイチカ的能力 | 29

番外編 篠ノ之束 | 35

異変?擬人化? | 45

思い出の武器 | 49

番外編 亡国企業 | 57

運命 | 69

黒き調教師 | 81

とある修行風景 | 90

番外編 織斑 千冬 | 97

一夏の後悔 | 105

地獄日常編

地獄の日常1 | 111

地獄の日常2 | 121

地獄の日常3 | 128

番外編 織斑 一夏 | 138

地獄の日常4 | 143

地獄の日常5 | 151

地獄の日常6 | 159

ライブ・オブ・フェスティバル前編

入学	270	ライプ・オブフェスティバル後編	167
突然の始まり	259	ライバル宣言のち告白前編	178
番外編 亡国企業の忘年会	250	ライバル宣言のち告白後編	190
プロローグ 亡国での再会	241	番外編 ゼウス(Z―U S)	216
プロローグ 地獄の出馬	232	番外編 織斑 秋斗	223
I S 編		中国からの転校生	313
		二番弟子?	318
		三人目?	323
		鈴音の憂鬱	330
		集結!!伝説の暗殺拳使い!?	335
		V S セシリア	295
		V S 織斑 秋斗	301
		クラス代表決定	307
		前進と対立	278
		篠ノ之 箒との関連性と一騒動	287

プロローグ

プロローグ～事の始まり～

俺の名前は織斑一夏です。

突然ですが今俺は大ピンチだったりしています。

絶賛誘拐中なんですよ奥さん。

誘拐犯 A 「おい本当にこんなんで織斑千冬が来るのか？」

誘拐犯 B 「大丈夫だろ、織斑千冬はブラコンらしいからな。」

誘拐犯 A 「何処情報だよ……」

本当初処情報だよ、千冬姉は誰にでも厳しくて優しいけど……ブラコンなんて初めて

聞いたぞ!!

誘拐犯 A 「だけど弟二人いたやん。」

誘拐犯 B 「うんいたね。」

誘拐犯 A 「そのブラコン話ってどっちよ？」

誘拐犯 B 「え？どっちもじゃね？」

そうだといいな……

千冬姉えがくるかどうなんて分からん!!

誘拐犯C 「大変だー」

誘拐犯A 「どうしたC?」

誘拐犯C 「織斑千冬が出場しているぞ!!」

そうか捨てられちゃったか…:

誘拐犯A 「やっぱりそのブラコン話、デマだったんじゃね?」

誘拐犯B 「うーん信憑性あったんだけどな…:

誘拐犯C 「どうやら政府が隠蔽したらしい、スパイしてるDさんから連絡は入りました。」

誘拐犯A 「まじかよ、結局ブラコンか分からないつーことか。」

俺これからどうなるんだろうか?

世間的には(女性)俺疎まれてるからなあ。

誘拐犯A 「でこの子どうすんの?」

誘拐犯B 「帰すか?」

誘拐犯C 「いや、『殺してあげなさいって』言われました。」

誘拐犯A 「はあ?なんでよ、別にばれてねーじゃんか。」

誘拐犯C 「上の人いわく彼は『蔑まれてきた人間』だそうです。」

A, B 「「?」」

そうかここで終わるのか短い人生だったな。

じゃあなみんな!!

誘拐犯 A 「しようがねえな。」

カチャリと一夏の横で音が鳴る。

誘拐犯 A 「恨むんなら、政府と世間を恨んでいけ。」

そう言うのと引き金が引かれ、俺はそこで意識が途切れた。

誘拐犯 A s i d e

まったく胸くそ悪い仕事だったぜ、やっぱこの世の中腐りきつてら。

誘拐犯 A 「おい、お前等ずらかるぞ。」

B, C 「ハイ!!」

誘拐犯 A 「酒が飲みたいぜ：：ん？」

ふと場の雰囲気が変わった気がした、そう思ってあの子の死体がある所を見た。

誘拐犯 A 「死体がねえ：：だと!!」

B, C 「「え?」」

死体が無かった、最初っから無かったみたいだにそこになかった。

誘拐犯A「狐につままれたみたいだな感覚だぜ。」

誘拐犯B「まるで意味が分からんぞ!!」

誘拐犯C「怖いよおおお!!」

A, B「うるせえ!!」

ボッコ

誘拐犯A「上になんて報告しよつか：：。」

誘拐犯B「バカ正直に書いたって信じないっしょ。」

誘拐犯C「前が見えねえ：：。」

そうして誘拐犯は撤退していった。

数分後

千冬「一夏!!無事か!!居たら返事しろおおお。」

織斑千冬が到着した時にはもう既になにもない倉庫だった。

千冬「一夏あああああああああ。」

誰も居ない倉庫で千冬の叫びが空しく響く……。その後織斑一夏の行方不明通知が言い渡された。

??? 「次に彼がこの世界に現れるのは2年後です。ね面白くなりそうですよ？」

「ねえ神様？」

第1章く魔界戦記イチカ!! 天界にて

イチカ side

??? 「お　さい　お　一　」

誰だろう？

??? 「起き　さい　織斑一　ん」

確か俺は…:

??? 「起きなさい織斑一夏さん」

イチカ 「ハツ!!」

??? 「ふうやつと起きてくれましたね。」

俺は起き上がる？と少し違和感を感じた。

周りを見渡すと何も無い白い空間と俺の前に優しそうな人？がいる。

何故？なのかと言うとその優しそうな人の背中に翼が生えているからだ。

??? 「おやおや、驚かしてしまいましたか、当たり前前の反応ですよね。」

優しそうな人は少し笑いながら言う。

??? 「まずは自己紹介からですかね?、私の名前は『ラミントン』少し前までは大天使を名乗っていました、とある事情により休んでいます。」

イチカ 「ど、どうもつてええええ天使!」

確かに俺は誘拐され殺されたが、まさか目の前に天使がいるとは。

ラミントン 「ふふ、まあ驚きますよね、確かに貴方の肉体は死にました、しかし、これまたとある事情で貴方はここにいます。」

どういう意味だろうか?

ラミントン 「端的には分からないでしょう、少し座って話しましょう。」

ラミントンさんは指をパチンと鳴らすと何処からか椅子とテーブルが出てきた。」

ラミントン 「どうぞ、イチカさん」

そう言う座るようすすめてきた。

俺は座ろうとする、やはり違和感がする、俺はどんな状態なのだろうか?

ラミントン 「座りましたね?では率直に言います織斑一夏さんあなたは第2回モンド・グロツソの時誘拐され、殺されました間違いはありませんね?」

思い切った事を言われた、まあそうなんだがな、俺は縦に首を振った。

ラミントン 「貴方の状態は現世風に呼ぶと魂魄又は魂の状態です。」

違和感の正体は手足が無いからか。

ラミントン「本来閻魔大王の裁判を受けてもらうのですが少し状況が危ういので私が出向いたのです。」

危うい状況？

ラミントン「ええ、この危機的状況の犯人は貴方の世界にあるのです。」

イチカ「え？ どういう事ですか？」

ラミントン「順をおつてお話しします、まずここは天界の大広間と言う所ですがこの大広間には様々な魂が来る様にシステムがなされています。」

システムつて……天界も機械化してるんだな。

ラミントン「実は言うと貴方はここの世界の住人にされてないのです。」

イチカ「え？」

ラミントン「正確には私達の世界なのです。」

どういふことだ？ うん、そういえば貴方の世界つていつてたな？……まさか。

イチカ「俺の世界では無いって事は別次元の世界に位置にある天界つて事なんですか？」

そう言うラミントンさんは笑顔になり。

ラミントン「そうですここは貴方の世界と違ったまさに『別次元の世界』なのです。」

別次元の世界……そんなのが本当にあるなんて……。

ラミントン「それでは本題です。何故別次元の住人である私が他の次元の住人である貴方を呼んだかをお話いたしましょう。」

おう、やつと本題か。

ラミントン「これは、私達のミスですが近頃ここに住み始めた神が面白半分て人を殺し違う次元に転生させる事件が発生しまして。もちろんその神は殺されました、しかしその時、殺され転生した人間はその別次元の世界で大暴れ、その別次元の住人はもちろん世界そのものまで破壊尽くされました、私達は最善を尽くしましたがほとんどの世界は破滅又は転生者の侵略で終わってしまいました。」

ふうとラミントンは息を吐いて続きを話す。

ラミントン「この事件はもう終わったかに見えました、しかしまた同じ様な事件が今、発生しているのです。」

本題の本筋が見えて来たな。

ラミントン「今回は神様ではなく一人の人間なんですが……。」

ラミントンの言葉が途中で消えたどうやら悩んでいるようだ。

イチカ「話してくださいラミントンさん、俺に出来る事ならやります!!」

これは俺の本心だ。困っている人がいれば助けるいつだってそうして来た。

ラミントン「ありがとうございますイチカ君、やはり君は天性の善人だね。」

ラミントン は笑顔になる、そして真面目な顔になる。

ラミントン 「イチカ君キミには一度地獄に行つてもらおう。」

イチカ 「地獄つてあの地獄ですか？」

ラミントン 「ええ、その地獄です。」

いきなりでビックリしてけど何故地獄？さっきの人間の話は？

ラミントン 「先ほど言いかけた人間のことはキミがよく知っている人物に転生しているんだ。」

え？誰だ？

ラミントン 「キミの天敵と言つた方がいいかな。」

イチカ 「え？秋斗なの？その転生者つて。」

まさかだつた確かに分け分らんこと言つていたが……。

イチカ 「そういうことなら俺受けます!!」

ラミントン 「ありがとうございます!!、とりあえず話す事は終わりました、ちよつとついで来てくれますか？」

イチカ 「あ、はい。」

とりあえずついていく事にした。

数分後

ラミントン「さあ、つきましたよ。」

これまた真つ白の背景になんじやこの扉の数は!!!

イチカ「なんですかこの扉の数は!!」

数えきれないほどの扉が道を囲んでいる。

ラミントン「目的の扉はこの奥です。」

奥が見えないんですが……

ラミントン「大丈夫です、ほら。」

シュン

イチカ「うわ!？」

急に奥の扉がここにやって来たどういう仕組みなのだろうか？

ラミントン「この扉はただの飾りです、見分けやすい様、扉をつけたのです、実際は時空ゲートなので簡単に運べるのです。」

時空ゲートで移動出来る物なのか；

ラミントン「それではイチカ君この手紙を持っていつてください。そう言うラミントンさんは手紙を俺に渡した。

イチカ「なんですかこれ？」

ラミントン「中身は秘密ですが、すでに向こうには連絡は行っています、その手紙を時空の渡し人に渡してください、きっと案内してくれますよ。」

そうして手紙を渡された。

ラミントン「こんな願いを申しすすみません、ですが私達天使は人間達に簡保出きないので、それをお詫びいたします。」

そういうラミントンさんは頭を下げた。

イチカ「頭をあげてください、ここまでついてきたのは自分の意志です、後悔はしたくないので俺はこの話を受けたくんです。だから謝らないでください。」

ラミントン「本当にありがとう、一樣期限があるからそれまでに修行を終わらしてくれ。」

イチカ「あ、期限付きなんですな。」

ラミントン「ごめん、言い忘れてたよ、ちなみに2年ね。」

あ、結構余裕あるのね。

イチカ「脱線しましたけど俺行きますね。」

ラミントン「ごめん、ごめんじゃあいつてらっしやい。」
イチカ「イチカ、いきまーす。」
そうして俺はゲートへ突入した。

ラミントン「がんばってねイチカ君。」

誕生!!イチカプリニー!!

イチカ side

一夏が時空の扉に入ってから数分後。

シユポン

イチカ「ここが地獄?」

一夏は周りを見渡してみた、周りは溶岩とか鉄格子が張っていたり、お店らしき物まである。

一夏の位置は時空の扉前にいる。

??? 「織斑一夏様ですね?」

ふいに横から声が聞こえた。

??? 「私の名前はメーヴェルよこの時空の渡し人をやっております。」

彼女が時空の渡し人の人か…族に言うエルフって種族なのかな? 耳が尖ってるし、それっぽいしね。

メーヴェル「ラミントン様の通達は受けております。準備もすでに整っているということなのでそこまで案内しますね。」

そうメーヴェルさんが言う。先ほど俺が通った時空の扉へ入っていった……
イチカ「すでに目的地へ行けるようになっていたのか。」
再び時空の扉へ俺は入った。

そしてその先には……

プリニー工場

イチカ「え？」

もう一度看板を見てみる。

プリニー工場

プリニーってなんやねん……

つい、そう思ってしまった。

メーヴェル「一夏様こちらが目的地の『プリニー工場』です。」

なんか相当大きい施設みたいだてっぺんは青いペンギンを模した頭が屋根になって
いる、あれがプリニー？

メーヴェル「一夏様が思っている通りあの青いのが『プリニー』です。」

あ、やっぱりそうなんだ、というカラミントンさんと同じくメーヴェルさんも俺の心
よんでるし。

メーヴェル「それは、一夏様が魂の姿をしているからです。」

イチカ「それはどういう事ですか？」

メーヴェル「今の一夏様は肉体という壁が無い状態ですので心の声が丸聞こえなんで
すよ、しかも厄介な事に自分では自覚出来ないのです。」

うわ、まじかよ!?

メーヴェル「ですので、一夏様には特別な肉体が用意されています。」

え？このプリニーになるの？

メーヴェル「いえいえ見た目はプリニーにはなりますけどその中でも特別なプリニー
と聞いております。」

結局プリニーなんですね。

メーヴェル「アホのあの人を誤摩化するために仕方が無いのですよ。」
アホって誰の事だろう。

メーヴェル「大丈夫です、嫌でも分かりますから……」
ホホホホと笑っているけど目が……

そうしている内に受付に到着した。

受付には頭に赤いバンダナと上半身裸の男がいた。

メーヴェル「ターメリック様、例の魂を連れてきました。」

ターメリックと呼ばれた男はこちらを見た。

ターメリック「おう！お前が新しく入るプリニーだな!!」

ものすごくあつそうだ。

ターメリック「地獄は溶岩に囲まれているからな、暑いのは当然だぜ!!」

そう言う意味じゃない……

メーヴェル（彼はターメリックがこの工場長をしているわ、見ての通りちよつとあれ
だけ……）

あ……と俺は相づちを打った。

ターメリック「そんじやあもうそろそろ始めるから一匹用のカプセルにそいつ入れて
くれ。」

そう言うとターメリックさんは奥へきえって行った。

メーヴェル「一夏様こちらです。」

言われるがままについていく。

Pカプセル前

これまた『プリニー』を模したカプセルがあった。

今度のでっぺんには上に俺を入れる入り口らしきものがセットされている。

イチカ「あそこにならばいいんですか？」

メーヴェル「ええ、そこから入ってこのカプセルのスイッチを押せば晴れてプリニーになれます。」

まあ、やるしかないよな。

魂をてっぺんにシユユューート

メーヴェル「超!!エキサイティング!!」

ターメリック「メーヴェル：：なんだそれ？」

メーヴェル「つい、ノリで言っしまいました。」

ゴトゴトチーン

そんなこんなでカプセルが開いた。

イチカ? 「成功したのか?」

一見普通のプリニーに見えたが…

ピカーーーー

急にイチカの魂が入っているプリニーが光りだして…

ターメリック「うお!まぶし!」

プリニー工場が光に包まれた。

???
side

あーあ暇だープリニー教育係もどっか行っちゃまって平和だと思っただのによー。

ターメリックのヤツが工場長だからほとんど仕事が無くちまったぜ。

ピカーーーー

あん?

??? 「うお!!目がああああああ」

バタリ。

??? 『『アクター様』ープリニー工場で何かあった見たいですよー? 『アクター様』
?』
」

アクターレ 「おうふ。」

お調子者の元芸人

アクターレ side

うう酷い目にあつたぜ。

なんだつたんださっきの光は？バ〇スなのか？バ〇スなのか？

バ〇スならラピ〇タだよね。

そうじゃねえよさっきの光はプリニー工場からだつたな。

アクターレ「よし!!プリニー工場へ行くぞピンク!!」

ピンク「はい!アクターレ様♡」

ピンクと呼ばれたピンク色の邪猫族はアクターレと一緒にプリニー工場へと向かつて行った。

ちよつと時が遡りますよ。

イチカ side

うーんプリニーに入ったはいけどうーん

なんか居心地が悪いと言うかもすごいぶかぶかの服を着ているみたいで気持ち悪いな……

でもせっかく用意してもらったんだから贅沢出来ないな……

そんな風に思っていると自分の体の異変に気づいた。

あれ？俺光ってね？

光は大きくなり最終的には工場全体を包み込んでしまう光になった。

数分後なんとか光は治まり……

イチカ「……治まったのか？」

恐る恐るイチカはあたりを見回す。

イチカ「特に変った事はないな？」

そう思っていると

ターメリック「まだ目がチカチカするぞ」

メーヴェル「ターメリックさんどうしたのd」

メーヴェルさんとターメリックさんが言葉を詰まらせる。」

イチカ「どうしたんですか？二人とも？」

ターメリック「とりあえずイチカ、鏡見てみる！」

鏡？

ターメリック「いいから!!」

分けも分からず鏡を見てみた。

そこには普通のプリニーと違った色をしたプリニーがいた。

イチカにはしばらく何の事かがさっぱりだったがぶかぶかだった時自分の手に当たる部分が青い色だった事を思い出した。

イチカ「あれプリニーって普通の色って青じゃないんですか？」

イチカはそう二人に問いかけた。

今のイチカのプリニー姿は真っ白全体的に白くポーチまで白である。

ターメリック「あ、ああ普段のプリニーはみんな青だその後ランクづけされだんだんに色分けされるわけなんだが……」

ターメリックさんはまじまじと俺を見る。

ターメリック「確かに天使長様からもらったプリニーの皮だが色まで変ってしまうの

か。」

ふしぎだなとターメリックさんはつぶやく

メーヴェルさんもやつと正気に戻ったみたいだ

メーヴェル「なかなか貴重な体験をしたみたいです。」

どうやら結構珍しい光景らしい

ターメリック「ランク付けされたプリニーの他にも自分のテーマカラーで生まれてくるプリニーもいるらしいからな、実際に立ち会ったのはこれが初めてだ。」

ふーんものすごいのは分かったな。

メーヴェル「これからどうしましょうか？」

ターメリック「あん？これから閣下の所行くんじゃないかねえの？」

メーヴェル「その事なのですが……」

メーヴェルさんがターメリックさんとなんやら話している。

長引くかなーと思っただその時。

あクターレ「まてまてまてまてー……い」

「!?!?!」

何処からともなく声が聞こえた。

ターメリック「あん？アクターレじゃねえか？どうしたこんなところまで。」

ターメリックが呆れた感じにアクターレというひとに言う。

アクターレ「この魔界大統領になって口の聞き方だ!!」

メーヴェルさんも苦笑いしてるし。

イチカ（あの人誰ですか?）

メーヴェル（一応魔界大統領、地獄で一番偉い人よ。）

イチカ（え?あの人?）

メーヴェル（『一応』よ）

イチカ（へ?）

メーヴェル（ある意味大物ではあるけどね。）

どうやら色んな意味ですごい人みたいだな。

ターメリック「で、用件はなんだ?」

軽くアクターレと言う人をあしらって質問する。

アクターレ「ぐぬぬ、さっきの光に対して抗議しに来たんだ!!」

ターメリック「騒いで来たと思っただけかよ!!」

アクターレ「なんだと!!」

ものすごくもめ合いし始めた。

ピンク「アクターレ様、あそこに奇妙なプリニーがいます。」

どこからともなく声が聞こえた。

アクターレ「なんだこのプリニーは!!」

アクターレは必要に俺を触ってくる。

アクターレ「真っ白だな。」

ピンク「真っ白ですね。」

微妙に沈黙が走る。

アクターレ「なんだこれわあああああああああああああああああ」

メー、ターメ「黙ってる(なさい)」

アクターレ「ぎやあああああああああああああ」

アクターレ再び沈黙!!

メーヴェル「落ち着きましたか?アクターレ様。」

メーヴェルさんはアクターレを正座させながら言う

さりげなく酷いなこれ。

ターメリック「なあ、メーヴェルこれはある意味都合がいいんじゃないか？」

ターメリックの言葉にメーヴェルさんは。

メーヴェル「確かにそうですね。」

メーヴェルさんは再びアクターレの方を向き。

メーヴェル「アクターレ様ちようど新しいプリニーが出来ましたのでヴァルバトーゼ

閣下がお帰りになるまでに教育してもらえませんか？」

アクターレはきよんとした顔になる。

アクターレ「な、なんで俺様が：：」

メーヴェル「閣下がない事をいい事に職務怠慢が度がすぎてきていますので、ちよ

うどこの子に手伝いをさせてみては？」

アクターレ「し、しかたがないなーひ、引き受け手もいいぞー。」

メーヴェルのお説得によってイチカはアクターレの所で仕事する事になった。

イチカ（メーヴェルさん）

メーヴェル（どうしましたイチカ様）

イチカ（修行はどうなるのでしょうか？）

メーヴェル（閣下が帰って来なければ始まらないので今はアクターレ様の元で働いて

ください。）

イチカ（その人が俺の修行相手ですか？）

メーヴェル（いえ、誇り高き悪魔です。）

まだ地獄での生活は始まったばかりだ!!がんばろう。

プリニーイチカ的能力

アクターレ side

はあなんでこんなことになちまつたんだあ
まあ暇だったからいいんだが……

しかし、このプリニー本当に真つ白だなあ
アクターレ「おい、プリニー。」

イチカ「？」

アクターレ「お前の事だよ白いプリニー。」
自分のこと分かってんのか？こいつ

イチカ「ああ俺の事ですか。」

アクターレ「お前以外誰が居るんだよ。」

イチカ「……それもそうですね。」

………

話が続かねえええええ

なんなのこのプリニー、淡泊すぎる。

プリニーは元々罪人の魂、結構欲望に忠実な奴らばかりだ。だけど、こいつは何かが違う。

興味がないみたいな感じでつかみにくいぜ。

イチカ「あー。」

アクターレ「ウアツチ!!」

いきなり話しかけられ変な声が出た。

アクターレ「驚かせるんじゃないやねえよ!!」

イチカ「あ、すみません。」

あー、ビックリした

アクターレ「で、なんだ？」

イチカ「プリニーの仕事って何をしたらいいんですかね？」

あー、そうかこいつプリニーになりたてだからわからねえんだったな、適当に指示するか。

アクターレ「とりあえず掃除や雑務その他もろもろのことをやっているんだぜ。」

イチカ「へー掃除ですか。」

ん？なんか楽しそうな感じだな？

アクターレ「お前掃除とか得意だったりするの？」

イチカ「ええ、生前の頃は家のことを任されていたので、大体の事は出来ます。」
へー家の事任されてたのかー、あーあいつ等元気かなー無理してねえかなー。

イチカ「アクターレさん？」

アクターレ「おわ!!」

またビツクリしてしまった、家族の事を思い出してしまった自分が悔しいなこの野郎

!!

アクターレ「なんでもないやい!!」

イチカ「なんでそこで子供語!?!」

そんなこんなでアクターレの部屋元魔界大統領の部屋へ到着しました。

Pイチカ side

なんだかんだ言つて目的の部屋へつきました。

なんというか色んな意味ですごいです。

机には色んな書類やなんやら散漫している。

部屋自体もえらく汚い。

プリニー工場へ行く時メーヴェルさんが教えてくれたが基本悪魔は自由主義らしい、自分の欲望を叶えるためならばどんな事もすると言う。

に、したつてこれは……

一応ゴミはまとめてるっぽいけど

イチカ「アクターレ様これでよく生活出来ますね。」

俺が今アクターレさんのことをアクターレ様と言ったのはアクターレさんに『俺様のプリニーになるんだから一応『様』はつける!!』と言われました。

アクターレ「え？これが普通だろ？」

軽くカルチャーショックです、後で地獄の掃除事情聞いてみるのもいいかも……

イチカ「とりあえず、ここ掃除しますね。」

アクターレ「え？いいの？」

イチカ「掃除や雑務が仕事なんですよね？」

アクターレ「お、おう。」

さて始めようか!!

数分後

これぐらいかな？

ふとアクターレさんを見る。

何故か開いた口が塞がらないような古典的な顔をしている。

イチカ「アクターレ様？」

いったいどうしたんだろう

ちなみに今の元魔界大統領の部屋の状況はと言うと

きれいさっぱり入らない物はアクターレさんに聞いてゴミに出しました。

書類やは机の中に、大事な物らしき物はダンボールにしまつて見つからない場所にしまいました。

部屋自体も埃とかなにかよく分からない物とかも片付けた結果もののみごとに奇麗

な部屋に早変わり!!

アクターレ「なんじやこりやあああああ!!」

ビツクリした、驚きすぎですよアクターレさん。

アクターレ「お前まじで何者だよ!!数分でこれって化け物じゃねえか!!」
化け物とは失礼な。

イチカ「これぐらいいいつもより早いですけど、毎日これですよ?」

この言葉にもっと驚くアクターレさん

アクターレ「まじかよ:::」

イチカの能力の一つを垣間みた瞬間であった。

いやー久々に掃除したなあ。

番外編 篠ノ之束

東side

東の秘密ラボ内部

ここは天災篠ノ之束の秘密ラボである

ISが世に出て女尊男卑になってから束は政府に追われる立場になった。
今は絶対に見つからない秘密のラボに身を隠している。

しかし今の彼女は焦っていた。

「見つからない……」

理由は、昔友人の織斑千冬の弟の織斑一夏のことだった。

「なんで見つからないの？」

「東様……」

ふと束を心配する声が聞こえる。

彼女の名前はクロエ・クロニクル、彼女は束が転々旅をしていた時に拾った少女である。

『そうかな?』

『そうだよ。』

『そう。』

その時の彼の表情はまったく持つての無関心だった。

だけど私はもつと彼に引かれていった……

それから毎日つてくらしい合った。

まさかちーちゃんの弟とは思わなかった、もう一人の弟、織斑秋斗と言う弟がいたが

私はアイツは嫌いだ、ただそれだけは分かった。

ちーちゃんの弟だったからそんなに表に嫌いと言う感情は出さなかった。

そんなある日

私は家にあるラボにこもっていた。

その時私はいっくんをラボに招いていた。

『東さん僕に見せたいものつてなんですか?』

『ふふーん見てみればわかるよー。』

彼は最初にあつた時よりは明るくなった。

理由はよく分からなかったけど少し嬉しかった。

『ジャジャーンこれをみてくれたまえ!!』

私はラボにあった布をかぶせたそれをとった
それを見た彼は。

『うわー、ロボットだー。』

それは私が最初に作ったプロトタイプのISS00ダブルゼロだった。
彼も00には興味心身だった。

私も見ていて鼻高々だった。

『さわっていい?』

『オーケーOK牧場だよ!!』

少しボケながら触るのを承諾した。

『いっくんはロボット好き?』

『うん、大好きだよ!!』

『それなら私の手伝いをしてくれないかな?』

『東さんの?』

『そう、私のお手伝いだよ。』

『うん、邪魔にならない程度にがんばるよ。』

それから数ヶ月間いっくんには私の手伝いをしてもらった。

私が行き詰まってもいっくん自信が原因を見つけて助言してもらったり。

外装のアイディアもいっくんが考えてくれた。

そうしてちやくちやくと00は完成が見えてきたんだけどアイツがそんな日常を壊した。

『いっくんまたせー』

『どうも。』

そこにいたのは他でもない織斑秋斗だった。

私はよくはわからなかったけどなんでこいつがいるんだと内心思った。

『いやー俺の兄貴が束さんの手伝いしてるって言ってたから俺も手伝いに来ました』

いっくんにはお手伝いのことは内緒だよと言ってているはず、今おもえばアイツはいっくんの後をつけて来たのだと思った。

そのまま帰すのもあれだったのでアイツをラボ内に入れた、00はいっくんとあつた時に完成させたいから他の機体の手伝いをさせた。

アイツはまったく持って手伝いにもならなかった、噂に聞いているほど物わかりが言い訳でもないし、まったく理解もしていなかった。

なぜこんなやつがいっくんより上なのだろうかと疑問に思った。

その後色々あつた、あの後いっくんは現れなかったいや合つたけどラボには来なかつ

た。

遠くから見るとだんだん最初に合った時に戻っている気がした、でも私と合ってしまったときは嬉しそうに笑いかける時もあった。

それから数ヶ月も時間が経ってあの事件に意向してしまった、ちーちゃんがなんとかがんばってミサイル撃破はしたけど取りこぼしが出ってしまった、ヤバいと思ったその時、私はあり得ないものを見た。

あの未完成だった00が取りこぼしのミサイルを撃破した、その後00は彼方へ消え行方が分からないあの時の00は何だったんだろうか？

今も未完成の00は私のラボにある、いつくんが生きていたら本当の意味で完成させたいから。

「やっぱりどこかに実験台にされているのかな？」

もしそうなら力づくで施設破壊しなくては……

そんなことを考えていたら。

ドッカーン

「?!?!」

侵入者!!こんな時に!!

とりあえずセキュリティを……

ドッカーン

近くの扉が吹っ飛んだ。

はやっ!!もうきたのお!!

「いやはやセキュリティがすごいのおこは」

なんか変なおじさんが出て来た。

「ものすごい早さでここに来た人がよく言うねえ。」

私は変なおじさんに言う

「ほほうあんたが篠ノ之束博士かの?」

「なんで私の名前を?」

私結構な有名人だけどもあまりテレビとか出てないんだよねえ。

「はっはっははー、ある人物から頼まれて来たんだ。」

「はあ?そんな言葉じゃあ信じられないんだけど。」

ようやく煙がはれるそのおじさんの顔も特徴も見え始める。

「うわはっはっははは、いいよるわ、まあわしもそんな時期があつたわい。」

おじさんは愉快そうに笑う。

おじさんの服装は白衣を身にまとい、他はもう40代くらいのおっさんである。

後ろにはペンギン？を模したロボットが4、5体浮いている。

「で？用件は何？」

しかし油断はしない、あのセキュリティを突破したのだ強いのだろう。

「まあ一言で言うかわしは『織斑一夏』について知っていると云ったほうがいいだろ？」

!!??

「いっくんのこと知っているの!？」

「おおう、早速くいついたのお。」

「言え!!さっさと言え!!」

「まあ、焦るな。こちらとしても条件があるんだ。」

「条件？」

「おぬしは今の世界に不満だらけだろ？」

「!?なんでそれを。」

いっくんを死に追いやった世界を確かに私は許さないそしてこんな世界にした私も

：

「その話もある人物からだ。」

「その人物には合えないの？」

「科学組からの人間だと信じられない相手だから無理だな。」

「どうゆうこと?」

「まあ分からない事はいいや。」

「ぎっくりしているのおおまいさん。」

「こういう性格なおじさん。」

「おじさんかー、それでもいいかな?」

「で?その条件つてのは?」

「いたつてシンプルだわしと会社を立てないか?」

「はあ?」

意味が分からないどうしてそうなったんだと思った。

「おまいさん世界を変えるには相当時間が掛かるんだ、だから一番近くなるには企業し
かないんだ。」

おじさんが言う理屈は分かるしかし、いきなり会社設立って…

「わしとおまいさんの頭脳ならこんな世界の企業なんてぶっちぎりだわい!!」

なんかさらつとすごい事言っているけどまさか…

「まさかおじさんの後ろにあるペンギン?もおじさんが?」

「おおうさすが天才だな、そう、こいつらはわしが発明した『プリニーガX轟』じゃ!!」

「おおう。」

だめだ東さんのテンションじゃついてけないや。

「で？どうする？」

会社かー隠れ蓑として役にたつかな？

「会社を設立するのはいいよ？でも私は今追われている身なんだよ。」

「その事なら無問題!!ちゃんとセキユリテイは万全だ!!」

「それならいいけど東さんもセキユリテイ作るからね？」

「おう！それならいいぞ!!」

「あと、くーちゃんもつれていい？」

くーちゃんそういえばこないなあ

「おう、コイツだな？」

とおじさんが合図するとプリニーガX轟が気絶したくーちゃんをつれて来た。

気絶してたのか。

「そいじゃあいくぞい。」

「あ、待つてよ。」

急いで簡易倉庫を使って必要な機材と00を持っていく

この後本当に会社を作って企業を立て2年後には大企業に発展していった。

いつくんと再会するのはまだ先だ。

異変?・擬人化?

イチカ side

この地獄に来てからだいぶ時間がたったな。

感覚で言うとも3日くらいか?

アクターレさんの部屋兼大統領室を片付けたと思っただらあの人一晩で汚くしちゃったよ……

アクターレさん曰く『落ち着かん!!』のこと。

この3日掃除ばかりです。

やっぱり俺以外にもプリニーがいるみたいだが、働いている様子がないので、リーダーっぽいプリニーにお話（お説教）したら。

『悪かったツス、だから説教しないで欲しいツス。』

よほど応えたみたいだが、あまりにも雑に掃除するからとうとう俺の怒りが飛び越えてそのリーダープリニーをボコりました。

その過程でポーチから武器が出せる事を知りました。

「しかしこの武器どっかで見た事あるんだよな」

「そうこの短剣はどこかで見つけたことがあるのだ。」

「千冬姉の雪片の形状にそっくりだけど違うものだなあ。」

「メーヴェルさんにこの事を言ってみると。」

『プリニーの武器は思い出に残っているものを具現化しているだけでイチカ様のそれも、もしかしたら思いでの品としての機能があるかもしれないね。』

と言っていた。

「まあ思い入れがあるといったらあるんだがなあ。」

ふとそんなことを言っているとき……

「プリニー長お掃除終わったツス!!」

一匹のプリニーが俺に報告する。

ちなみにプリニー長とは俺の事だ。

あのリーダープリニーはこのプリニーの中でも強かったらしい。

それを倒した俺がこのリーダーになったのだ。

「おう、ごくろうさん休憩は俺が作るからプリニー部屋で待機してくれ。」

「マジツスか!!それじゃあみんなに報告するツス!!」

とご機嫌でプリニー部屋へ向かっていく。

「ふう、まさか俺がこのプリニーのリーダーになるとは思わなかった、何気に前リ―

「ダーもいるしな。」

「ちなみに何回か前プリニーリーダーがけしかかって来たけど全部撃退して、今では言うこと聞いているもんなあ。」

「んなことかながえてたら厨房へ着きました。」

「さて今日はクッキーを作るか。」

数分後

「おい出来たぞー。」

「「「まってましたッス!!」」」

「おうおうわらわらとまあ」

「慌てんな順番守れー。」

「「「はいッス」」」

「統一制ありすぎだろこいつら。」

とまあ3日こんな感じだった。

以外とこの生活も慣れてくるもので、人間だったところと比べると優遇されてんのか？分かん。

しかし、人間だった時のとプリニーの時とはまったく目線が違うのでそこはそこで不便だ。

たまにでいいから人間に戻ってみたいなみたいなことも思う。

「ん？」

気のせいか？なんか目線がいつもより高い？

手を見てみた……

「……………」

人間の手だ……。

「は？」

俺は急いで鏡のある部屋へ行った。

「なんじゃこりゃああああああ」

鏡を見てみるとそこには、ジャージとプリニーの帽子（白）をかぶった生前の俺が立っていた……

思い出の武器

イチカ side

はあ驚いたまさか人間の姿に戻る事が出来るとは……

でも、またプリニーに戻るんだろうなこの感じだと。

もう一度自分がどうなっているのか調べてみる。

頭 プリニー帽子 何故か外れない。

服 ジャージ (フーカが着ているジャージの白版) これも外れない

ジャージの下は誘拐された時に着ていた服だ。

どうやらこの帽子とジャージはプリニーの皮膚みたいな役割を果たしているみたい

だ。

あと背中に何故か背負っているこれ、これは何故か外せるみたいだけど……

あ、これはプリニーのポーチと同じ役割のものだな。

手探りでリュックサックをまさぐってたら武器らしきものが当たった、とりあえず出してみよう

おいおいこれは……

「なんでこの武器が……」

出してみると見覚えのある武器が出てきた

「雪片零式^{ゼロしき}」

これは俺と束さんで作った思いでの武器。

雪片のプロトタイプというかこの零式が雪片の始まりだろうか。

『うーん隕石を壊すほどの威力はどの程度にしたらいんだらうか？』

あのとき束さんが作ろうとしていたのは対隕石用の武器だった。

気無しにはなった俺の言葉でこの零式は作られたのだ

『ものすごい威力だったらいんじゃない？』

『それもそっかー。』

零式の攻撃力は凄まじいものだった。

『えい』

スパッ

岩を真つ二つにしたり。

『ハイ、ハイッ、ハイイ。』

なんか地面をも抉るほどの衝撃はが出せたりと。

『やりすぎちゃったかな?』

『やりすぎたね。』

おかげで実験に使った地形が変な形に変形する始末。

「思い出深いちゃー深いな。」

ちよつとした過去を振り返ってみた直後に。

ポン。

元に戻りました。

「うーんざつと15分くらいか?」

考えながらもちやんとタイムを測ってみました。

もう一度人間になれるか試してみる。

――1時間後――

「なれないな。」

「いったいどういうことだ？」

「先ほどの違いは――：：：。」

「うーん分からないな。」

「そう俺が考えていると。」

「なんか叫び声が聞こえたが、お前大丈夫か？」

「あ、アクターレ様。」

「アクターレさんが俺の叫び声を聞きつけて来たのかえらくのんびりとやって来た。」

「野次馬根性でやってきたんですか？」

「失礼な、俺様はお前がどんな罠にかかったかみに来たんだ!!」

「意味分からん、っていうか」

「罠はついていたんですか？」

「あ」

このあとイチカの説教が始まった。

「だいたい……ん？こんな時間か、それじゃあアクターレ様お休みなさい。」
「うう、足がまだ痺れてるぜ……お休みー。」

???
side

「ふむ、あともう少しだな『地獄統一計画』も」

黒いマントをまとった男が言う

「ご苦労様です、ヴァルバトーゼさん。」

それにそって敬いの言葉をかける大天使ラミントン

「よもやこのような計画を出されるとは思わなかったぞ。」

『地獄統一計画』とはその文字の通りその他の次元の地獄を統一化させる計画の事である。

この『地獄統一計画』の発案者こそ今ここにいる『大天使ラミントン』である。

ヴァルバトーゼは、この計画のため別次元の地獄へと出張していたのだ。

(番外編でその内容を出すかもね)

「私もまさかあなたがこの役を買って出るとは思いませんでした。」

ラミントンはこの計画でもっとも要になる人物を探していた、中々そういった人物が居なかった中たまたま天界へ帰省していた『天使アルティナ』がヴァルバトーゼを紹介

してくれただということだ。

「ふん、アルティナの紹介ではなかったら断っていた所だが……」（ちなみにヴァルバトーゼとアルティナは付き合っています。）

「それでもこの計画に参加していただきありがとうございます。」

「確かに悪い計画ではなかったな、しかしこれで他の地獄で慢心化はないんだろうな？」
ヴァルバトーゼの不安はこの統一化でその他の地獄で脱獄者が出ないかが不安だった。

「そこは私達の天界のシステムでどうかします。」

「フム。」

この『地獄統一化計画』はつい最近に始動したばかりで、最近の脱獄者があまりにも多すぎた為ラミントン氏が考案した計画でもある。

「おっと忘れていました。」

ラミントンがふと思いついたかの様に言う。

「つい最近貴方の所に一匹プリニーを派遣したのを忘れていました。」

と緩やかに微笑みながら言う。

「なに!?それを早く言わんか!!」

ヴァルバトーゼは一目散に天界を去っていった。

「ヴァルバトーゼさんが出張していたのを忘れてました……まあ、どうにかなるでしょう。」

ラミントンよそれでいいのか？

番外編 亡国企業

???
side

「あー始末書かったりーなー。」

おつす俺の名前はアツシユあん時の誘拐犯Aだよ。

A って言うのは一種のコードネームだな。

今俺はあん時誘拐した少年『織斑一夏』についてだな。

あの時の伝言は「殺せ!!」じゃなくて「つれてこい」だったとはな。

「S^{スコール}のやつも変な伝言伝えやがって。」

俺がとある上司に愚痴つっていると。

「よう!!まだ始末書書いていんのか?」

「O^{オータム}か。」

この女はオータムコードネームはO、俺とBCの同僚でありSの部下でもある。

「にしてもスコールも人が悪いぜ。」

オータムもスコールの伝言に不満があったみたいだな。

「ほう、お前がめずらしいな。スコールにぞっこんラブじゃなかったのか?」

俺がちやかす。

「ばつ馬鹿言うんじやねえよ!!ちげえよ!!俺がいいたいのはもつと分かりやすい言葉があつただろつて意味だよ。」

オータムが言うのも無理は無いな、あの時誘拐した瞬間からそうだ。

『こんな作戦でいいの?』

『多分いけるだろ。』

『Bの作戦だからいいけどね。』

『A本当にこの誘拐で『織斑千冬』は動くと思う?』

『……どうしたS?お前らしくもない。』

あの時のスコールの顔は忘れない、何かに「怯えている」ようだった。

今にして思えば伝言を伝えたスコールは安堵していたかもな。

『織斑一夏』に怯えていたかはたまた『織斑秋斗』に怯えていたか……。

「どうしたんだ、アツシユ?」

オータムが不思議そうに俺の顔に近づいた。

「いや、なにも。」

オータムは「あつそ」と言つてある事を聞いてきた。

「そう言えばBとCは?」

「あいつらは適当に報告書書いてどっか行っちゃったよ。」

そう言うとオータムは呆れた顔で。

「うわあ流石自由人の二人だな……。」

アイツらとは幼馴染みだがついていくとなると半端なくつかれる。

だって急に「お笑いやろうぜ!!」だぞ!!

「はあ。」

「心情察するぜ。」

気楽でいいよなー。

???
side

まったくせつかくい人材が得られると思ったら、死んでいて死体まで消えるとは

…

「しかし、『死体が消える』か、なにか感慨深い事でもあるのかねえ。」
 あたしの名前はZ/X^{ゼックス}ここ亡国企業^{ファンタムタックス}の創始者だよ。

見た目は若く見えるけどナノマシン療法で若く見えるだけさね。
 今あたしは『織斑一夏』について調べてる所さね。

『織斑一夏』

享年? 12歳 勉学??? 人脈そこそこ

小学校6年生からやたらと難しい本を読んでいる(空想学やら電磁学など)
 結構頭いいのかと思えばテストは白紙だったりまちまちとしか回答欄は埋まってい
 ない。

その所為で一部の先生からは『織斑の出来損ない』と言われていた。

中学に入ると小学校の時の担任からなにか言われたのか『一夏』にたいしてだけやたらと冷遇だった。

その後その教師は女尊男卑だったのが分かった。

その中彼は親友と思える人物に出会う事が出来る。

五反田弾、御手洗 数馬、凰鈴音

この3名である。

他にも情報はあるが6年生より前の情報が途切れている、いや消されている。

「うーむ分からないねえ。」

そうゼクスが悩んでいると……

『エマーゼンシーコール!!エマーゼンシーコール!!』

突如警報が鳴り響く。

「いったい何の騒ぎだい!!」

ゼクスが邪魔されたと言わんばかりに警報の示す所に急ぐ。

亡国企業エントランス。

「貴様等そこを止まれー」

ガスマスクをかぶった兵士がある2人に警告する。

「止まらんと打つぞ!!」

もう一人のガスマスクが言う。

「いやー止まるわけにはいかんのー。」

「そうそう、私達はここのえらい人に合いに来たんだからさー。」

ゆるーく侵入者の二人は言う。

「ここに入るには厳重な審査が必要なはずだが？」

兵士は侵入者に問う。

「聞き分けがないから殴った。」

「だって女の子にタツチする方が悪いんだよ？」

その返答に全員呆れ返ったあげく。

「何なんだ貴様等は!!」

その言葉を待っていたと言わんばかりにポーズをとる。

「なんだかんだと言われたら。」

「応えてあげるのが世の情け。」

「愛と勇気の悪を司る。」

「ラブリーチャーミーな敵役!!」

「篠ノ之 束」

「風祭 ノーム」

「銀河を掛けるヘルシンボルの二人には」

「ホワイトホール白い明日がまってるかのお」

『にや、にやんてにや?』

ズコードタンドタン!!

「ありやみんなこけちやった。」

「なにがダメだったかのお?」

『全部ですよ東様、ノーム様。』

「だあはははははは。」

「あんた達なにやっつてんだい!!」

奥の方から大急ぎでゼクスがやって来た。

「ババアになにやらせてるんだよ!!」

「くばあああ」

あわれ兵士意味もなく殴られる。

「あなたが『亡国企業』の創始者ですね?」

東がそう問う。

「!?あんたは篠ノ之 東、どうしてこんなところに!!」

ゼクスはビックリする、それもそうだあの『篠ノ之 東』目の前にいるのだから。

「そこの人達にも言ったけどお話をしに来たんだよ。」

あっけからんという

「嘘じゃないね？」

「本当だよ？」

しばらくの沈黙。

「どうやら嘘じゃないようだね、いいだろちよつとこつち来な!!」

そう言ううとゼクスは奥へ消える。

「やった。」

「やったのお。」

『こんなのでいいのでしょうか?』

亡国企業社長室

「さ、座んなさい。」

ゼクスが促す。

二人が座る。

「あんたらホルグラムだね。」

「!?!」

そう、こいつらは生身じゃない。

よく見るとたまにずれがみえたりするしねえ。

「よくわかったね。」

「伊達に創始者名乗ってないよ。」

こいつら見た目に反してすごいやつらだねえ

ちなみに東はペンギンの着ぐるみノームは豚の着ぐるみを着ている

(マジでなんなんだコイツ等は)

すれ違った社員、兵士はそう思っていた。

「改めて用件を聞こうじゃないか。」

「それでは遠慮なくいこうかのお。」

豚の着ぐるみを着た『ノーム』と言う男が本題を話す。

「担当直入に申す、わし等と組んで会社を立てんか？」

突発的な申し出にあたしは。

「本気で言ってるのかい？」

すこし驚きながらも冷静に返す。

「そんなもん百も承知よ、しかし、あんたらの目標に近づくにはわしらと組む必要がある

ぞ？」

「どうゆう事だい？」

篠ノ之 束がいるということとは。

「察した通りこやつも今の世界は気にくわなかったようだ。」

「自分で作った世界が気に食わないかい？嬢ちゃん？」

あたしは篠ノ之 束本人に直接聞いてみた。

「そっだよ、こんな世界無くなればいいと思ってるよ。」

驚いた、あの篠ノ之 束がまっすぐな目でちゃんと発言するとはね、逃亡する前とは

大違いね。

「あつははははははは。」

思わず笑ってしまったよ。

「気に入った!!アンタ等の会社にも興味が出来たあたし達亡国企業はアンタ等についていくよ!!」

こうして新しく亡国企業が同盟兼ヘルシンボルのスポンサーになったのだ。

「で、あんたらさつきとこつちに来なさいよ。」

「ばれてましたか、ゼクス様。」

「当たり前だよ、スコール。」

「本当に彼等と同盟を組んでよかったですか?」

悲しそうにいや怯えている。

「なに怯えてるんだい?」

「!?!」

スコールは凶星を食らったように固まった。

「同盟の件はいいんだよあたしは『女尊男卑』の思想さえ無くなればそれでいいさね。」
「はい。」

そうして時は進んでいく……

運命

イチカside

あの時の夢を見た、世界が変わるあの瞬間の時。

今は忌々しいあの事件『白騎士事件』

俺はその当時束さんを驚かせようと00のコアを作っていた。

ISのコアは今でこそ束さんしか知らない風な感じだが、俺は束さんに教えてもらったので作れる。

コアの名は『ゼウス』未完成だがとつもない可能性を秘めているコアだ。

完成に向けて作業を進めていたその時とつもないテレビのニュースが俺の耳に入ってきた。

『大変です!!今何者かによって日本に大量のミサイルが来ます!!』

俺は耳を疑った、ミサイルが日本に？

『たった今、入った情報によるとそのミサイル群に立ち向かう騎士のようなロボットが居るとの事です。』

その映像には確かに白い騎士のようなロボットがいた。

『あれはIS?』

俺はすぐに分かったあれは00の次に作られたIS白騎士だと。

『白騎士の中身が誰なのかは分からないけどあのミサイル群はさばききれない。』

俺はそう思った、実際隙間無く発射されていてたとえさばききれても撃ち漏らしが出
てしまう。

『未完成だが仕方が無い。』

俺は00に『ゼウス』のコアをつけた。

『パパおはよう、何か用?』

『ゼウス』はコア人格をさらに発展させたものであり会話などオペレータをも出来るよ
うにした代物だ。

制作者の俺の事を。パパと呼んでいる。

なぜ未完成なのかは後々分かる。

『すまんがゼウスあのミサイル群の撃ち漏らしを撃退してくれないか?』

『パパの頼みならなんでもするよ♪』

そうして00いやゼウスは撃ち漏らしたミサイルを完全に撃退した。

「懐かしい夢だったな。」

俺は目を覚ます、プリニーにはベットなど無いので床に座って寝ている。

あの後『ゼウス』は深い眠りにつかせた、理由としては強すぎたからだ。

これからのことを考えたならばいつそ封印した方がいい。

『ゼウス』も承諾している。

「さて、お仕事しますか。」

俺はプリニーの仕事をするため部屋から出た。

???
side

「あー暇だわー。」

とプリニーを横したジャージの少女は言う。

「しようがないデスよお姉様、この頃はすっかりお兄様に調教されて平和なんデスから。」

それとモンスターののような少女が地獄を歩いている。

「はあ、どつかに白馬に乗った王子様とかいえないかなあー。」

「お姉様……（呆）」

いつもの事だが『風祭フーカ』はこの頃こんな感じである。

横に居る少女は『デスコ』『風祭ノーム』に作られた妹系ラスボスである。

「ちよつとデスコ、そんな目でみないで!!」

「いや、ラブもいいデスけどちよつと現実離れしてると思っただけデスよー。」

こんな感じで毎日この姉妹は地獄を満喫しているのだった。

「よう、小娘共元気か?」

そんな中話かける一人の狼男が。

「ん？なにかよようなのフェンリッチ。」

「どうしたんデスカフェンリッチさん。」

フェンリッチはちよつと怒りながら。

「だから『フェンリッチ』じゃなくて『フェンリツヒ』だつて言ってるだろうが!!」

この頃『フェンリツヒ』より『フェンリッチ』と呼ばれる回数が増えたかわいそうな人。

「で、なにかよう？」

「てめえ……、まあいいこの頃プリニー共がえらく騒がしく仕事するようになってな。」

「え？プリニーが？」

イチカが地獄に来てからさぼっているプリニーは3日ほどで8割仕事するようになった。

その影響か地獄全体のプリニーの仕事が半減する社会現象がこの時起きていた。

「で、仕事しすぎたプリニーがいすぎて他の仕事が無いと言う状況が出来上がっているわけだ、この事でなにか知らないか？」

フーカが呆れながら答える。

「そんなの私を知るわけじゃないじゃない、第一私はプリニーが嫌いなもの、そんなことするわけ無いじゃん。」

「まあ、そうだなお前がそんな事知る分けないか、ただ単にダメもとで聞いただけだからな、そんなに怒るな。」

「むつきー。」

やはりフェンリツヒのほう一枚上手だった。

「じゃあな、暇な二人よ。」

「覚えてなさいフェンリツち!!」

「じゃかしいわ!!」

そういうとフェンリツヒどっかへ去っていった。

「なんかむかついたからそこら辺の悪魔どもつぶすわよデスク。」

「分かりましたお姉様!!」

そういつてどっかに行つた。

イチカside

ふう今日も一日がんばったな、まさか地獄ごんなん所にスーパーマーケットがあるなんてな。

食材も新鮮だったりしてるけど大丈夫だよなゾンビ菌とか大丈夫か？

まあ、アクターレさんだから大丈夫か。

「ん？」

ふとなにやら戦闘音らしきものが聞こえる。

すぐそこから聞こえるみたいだ。

「カツキーン」

「「ぎやああああああ」」

「俺達がなにしたってんだよ!!」

「うっさい」

「「ぎやああああああ」」

え？なにあれ？

女の子がすごく強そうな魔物と戦っている。

「おもち!!」

「にやああああああ」

「であ」

「「ぎやああああ」」

なんて言うか地獄絵図（地獄なだけに）

というかあのジャージ姿の女の子、あの時俺が着ていたジャージの色違いだな。

あの子もプリニーなのか？

「あ、危ない!!」

その子の後ろに強そうな魔物がいた、彼女は気づいていない。

俺は無我夢中に彼女の方に向かったと同時に『人間の姿』になればと思った、何故だか知らないがそう思った。

フーカ side

「あ、危ない!!」

最初はなんの事？と思った。

次の瞬間に分かった、私の後ろに魔物がいたのだ。

もうだめかな、拠点送りだなと思った瞬間。

ガキン!!

鉄と鉄がぶつかる金属音が聞こえた

「大丈夫!？」

彼は私と同じプリニージャージ（白）を着ていた。

私はなにが起きているか分からなかった。

「とりあえず蹴散らすから。」

と、言つて先ほどの金属音は剣だったみたいでその剣で魔物をみんな蹴散らした。見ていてすごいと思つた、魔物は一撃で倒すわである意味爽快だった。

「お姉様大丈夫デスか？」

「う、うん大丈夫。」

「彼はいつたいなんデスカね。」

「……………」

なんだろうすごいドキドキする、王子様つて言うよりは騎士様かな。

なんだかわからないこの気持ち

「あーもやもやするー」

「どうしたんデスカ? お姉様!？」

そんなかんだでイチカ殲滅終了。

「ふう」

「あの、あなたは誰デスか？」

「うーん、とりあえずイチカって呼んでくれ。」

「イチカさんデスか。」

「ふーんで、イチカはなんでこんな所に？」

「あー、こんなんだけど一応俺プリニーなんだ。」

やっぱりイチカもプリニーなんだ。

「えープリニーさんなんデスか？」

「ああ。」

「お姉様と一緒になんデスね。」

「お姉様？」

「こちらの方デス。」

とデスコがこつちに手を向ける。

「へー姉妹だったんだ。」

「そうなんデスよ。」

「あ、もうそろそろいかなきゃ。」

「えーもつと話て行きたいデスよ。」

「一応仕事があるんだごめんよ。」

そうやってイチカは何処かえ行ってしまった。

「イチカ……。」

「行っちゃったデスね。」

また合えるかな？

合える気がする。

まだ、ドキドキが残ってる。

イチカ side

また元に戻れた、条件がそろわない限り人間体には戻らないシステムか？

まあ彼女が助かってよかったよ。

「ただいま戻りました。」

そうやって扉を開けた時。

「助けてーーーーー」

「またんかーーーーー」

アクターレさんと

黒いマントを着た男がアクターレさんを追っていた……

「どうゆうこと?」

まったくもって意味が分からない。

黒き調教師

前回のイチカがフーカに会う数分前の出来事。

ヴァルバトーゼ side

俺は、天界のゲートから地獄になんとか帰ることが出来た。

しかし久しぶりだな、しばらく地獄の景色を見ていないからか実家に帰省したかのごとくさえ感じた。

なにより皆に会えるのが嬉しく思うこともあるやもしれん。

「ただいま戻ったぞ。」

「あ、ヴァルバトーゼ様お帰りなさいませ。」

ゲートから出た瞬間時空の旅人のメーヴェルが出迎えてくれた、彼女は魔界の時空ゲートを管理する一族らしい。

基本的にアーチャーがその一族の末裔らしい、他は知らん。

「ヴァルバトーゼ様少しお話があるのですがよろしいでしょうか？」

む？彼女にしては珍しいな俺に話があるだど？

「ふむ、手短に頼む。」

「それについては大丈夫です、まずはこの手紙を……。」

そう言ってメーヴェルは俺に手紙を渡した。

「ん？これはラミネトンからの手紙ではないか。」

この手紙は先ほど天界で別れた『大天使ラミネトン』からの手紙だった。

「あいつめ、俺が他の地獄に出張中ということを忘れてこんな手紙をよこすとは……相変わらずマイペースなやつだ。」

悪態をつくヴァルバトーゼだが、結構信頼している方ではある。

「さて、どんなことが書いてあるかだな。」

……………

「ふむ先ほど天界で言っていたことが書いてあるが……、『鍛えてほしい』か……」

確かに俺はプリニー教育係だ、他でもないラミネトンの願いだが……

「して、そのプリニーはどこにいるんだ？」

とりあえず会ってみないと分からん。

「はい、まさにそこなんですよ。」

「??意味が分からんぞ？」

「ですからそのプリニーのいる場所がちよつと……」

「??なにやら言いにくい内容らしいな。」

「まあいいどんなプリニーでも俺が再教育してやる。」

「まあ確かにそうですね、その『噂』のプリニーは魔界大統領の屋敷にいます、これからつなげますね。」

魔界大統領の屋敷か……政権奪取以降あまり出向いたことはなかったな。

久々にアクターレがさぼってないか見に行ってみるのも悪くない。

「ヴァルバトーゼ様準備ができました。」

「うむ、それではいくぞ!!」

魔界大統領敷地内

「入るぞ。」

俺はうむを言わずして門番らしき魔物を撃破した、ここ地獄は何回魔物を倒しても必ず何処かで復活すると言う魔界ならではの風潮があるらしい。

正確にはマナが関係しているらしい。

くわしいことは分からんがそういうことだ、あまり殺しに関しての罪悪感等は無い。

大統領室前

「入るぞ!!」

バン!!

「え?なに?何事?」

案の定アクターレが大統領室でなにやら遊んでいたらしい、ギターというもので何かしていたらしい。

「アクターレよ久しぶりだな。」

「げえプリニー教育係!!」

そう言つてアクターレに近づく。

「ニヤメロン俺様に近づくんじゃねえ。」

アクターレが一步下がる。

「なにを怖がっているんだ、俺はただプリニー教育係の仕事をしに来ただけだぞ?」

さらに近づく。

「嘘を言うな!!俺様は騙されないぞ!!」

さらに一步下がる。

「嘘では無いここにいる珍しいプリニーの事についての話だ。」

さらに近づく。

「う」

「う?」

「うおおああああああああああああ!!」

アクターレは雄叫びをかけたかと思うともものすごいスピードで大統領室から出て

行った。

しばらくぼかんと見ていた閣下

ハッ!!

「こら!!またんか!!」

あわててアクターレ（アホ）を追いかけていった。

そうして数分後

イチカside

「大体の話は分かりました、ありがとうございます。メーヴェルさん。」

大体の理由はメーヴェルさんに教えてもらった。

「いえいえ、元々あの方が本来の貴方の指導者だったのですから。」

へえーあの方が……

「やっとならぬぞ!!」

「ひーお助けー」

あ、捕まった。

さらに数分後……

「まったく知らないなら知らないと言え!!」

結局アクターレは捕まって閣下におs調教されました。(あのデイスガイア4の調教部屋見たいのでした。)

「ふぁいすみません。」

アクターレの調教が終わった後何故か俺の方に来た!?

「ほう、貴様が新しく入ったプリニーだな?」

なんて威圧感、立っているのがやつとだな、メーヴェルさんすげえ涼しい顔してるけど大丈夫なのか?

「はい!!俺の名前はイチカです。」

なんとか大きな声が出せたようだ。

「違う!!」

え?

「プリニー法第一条語尾に必ず「くッス」をつける事!!もう一度!!」

「は、はい!!」

「違うもつと語尾に「くッス」を!!」

「はいッス!!」

「よし!!それでいい!!」

なんだこれ(苦笑)

(これ閣下の悪い癖なんですよ。)

(ええ……)

「ふむ、なかなか悪くないな、おい貴様!!」

「は、はいッス!!」

「ふむ、これからみっちりプリニーの基礎から教えてやるから俺についてこい!!」

「こんなんで大丈夫かな?でもやるっきゃない!!」

「はいッス!!」

「俺に続けーーーーー」

「はいッスーーーーー」

そう言って彼等は時空ゲートへ向かって走って行った。

「待ってくださいヴァルバトーゼ様〜イチカ様〜」

メーヴェルもその姿を追う。

「俺様は？」

寝よ……」

とある修行風景

イチカ side

あの後みっちりとプリニーについてとプリニーの基礎を教えられた。

どうやらプリニーの教習所みたいな所みただった。

それでもプリニーにはランクづけされているみたいだった。

レベル1〜レベル10までであった。

ちなみにレベル1はトイレ掃除。

レベル10は戦闘らしい

ちなみに俺は。

「まさかたつた一日でレベル10に到達するとはな、なかなかやるなイチカよ。」

「自分でも驚いていますツスよ。」

レベル1〜5が掃除関連だったので短時間でクリア出来た。

他は雑務主人となる人のサポートなどなどをこなし初めて一人前だそうなの。

「この短時間でレベル10に到達したプリニーはイチカお前が初めてだ、これから本格的に指導してやる!! 覚悟をしろ!!」

「はいッス!!」

こうしてヴァルバトーゼに無事接触する事が出来た一夏、これからどうなるかは本人次第だ!!

ヴァルバトーゼ side

件のプリニー：：やはり変だな、俺が用意していた10の課題をいとも簡単に達成するとは……

ラミントンが関わっている時点で気づくべきだったかもしれないな。

なにはともあれイチカは俺が責任もってちゃんとしたプリニーにせねばな。

「閣下……」

ふと声が聞こえた、この声は俺の従順な執事フェンリツヒだな

「どうしたフェンリツヒ?」

「いえ、閣下がお帰りになった噂を耳にしたので迎えに来たのですが……。」

「そうか、すまないなフェンリツヒ。」

最近不満の顔をするようになった従順な従者、原因は俺と付き合っている天使『アルティナ』の事だとは思うが……

なんとか仲良く出来んものか……

「閣下？」

「すまん、考えごとをしていた、それよりフェンリツヒよ。」

「？なんでしようか、閣下。」

「しばらくここ地獄に滞在するのでな、いろいろの手配を任せるぞ、これがそのリストだ。」

「!？」

その瞬間尻尾が逆立ったように見えたが気のせいかな？

「お任せください閣下このフェンリツヒ命に代えても達成してみせます。」

「お、おうまかせたぞ。」

すこしおかしなテンションをみて若干引いた閣下であった。

フェンリツヒがごきげんで俺の横につく

そんなにうれしいのならしばらくは仕事を与えてやるか。

俺が他の地獄に出張中はまったく仕事がなかったみたいだ。
(アクターレを説教した時に今の地獄の事情を聞いた)

イチカside

「ふう。」

とりあえず寝床が無いので大統領の屋敷に戻って来た。

「ただいまーッス」

「「お帰りなさいーいッス!!」」

「「リーダーお帰りなさいーいッス」」

俺を出迎えてくれたのは部下のプリニー達だった。

「待っててくれたッスか」

「当たり前前ッス!!」

「リーダーのおかげで掃除とかの雑務が楽しいんッスから。」

「恩返しをしたいんッスよ!!」

いやー嬉しいなこんな風に思ってくれる奴らがいるんだから。

「よし!!無事戻って来たから豪勢に振る舞ってやるツスよー!!」

「「やったーツス」」

ああ、なんかいいなこんな雰囲気。

何年ぶりだこの感じ?

覚えてないな……。

「おら、食堂え直行ツス!!」

「「アイアイサーーサーー」」

ドドツドドドドドド

一斉に食堂直行するプリニー一同、彼等には彼等なりの絆があるのだ!!

「「ゴっあんです(ゲツプ)」」

「食い過ぎだあ……、まったく。」

ちよつと調子に乗るのがたまに傷だけどね w w w

「ふう。」

俺はアクターレさんがためていた書類の一部を整理していた。

「リーダーおつかれーッス、はいこれを。」

とコーヒーを部下プリニーがくれる。

「ん、ありがとッス。」

そのコーヒーを飲む。

「やっぱり閣下は厳しかったッスか？」

「んー」

ある意味スパルタではあったな。

「まあ為になることはあったかな？」

「へー」

主に戦闘についてはほぼ素人だったからな。

「まあ閣下にかかれば標準語では無くなるッスねー」

「あー」

それは分かるなだつて語尾に『ッス』だもんな。

「まあここの法律だから仕方が無いッスねー」

「そうッスね。」

こうして今日一日の地獄が今日も終わるのだった。

???
side

「けっけけ、天使共も面白いことを考えたな、しばらくは監視しようかな」

地獄のそらに黒い天使の翼を持つ何者かがイチカを見ていた……

「ただ見ているだけじゃあつまらないけど二年後まで待つか」

「二年後を楽しみに待ってるぜーけーけーけーけーけー」

そう言うと思い翼の天使は何処かに去って行った。

彼はいったい何者なのかー

番外編 織斑 千冬

千冬 side

あの日一夏がいなくなつてからどのくらいたつたのだろうか？

あの後私はドイツで1年間だけドイツ軍の教官になつた。

最初は嫌だつた：：一夏がまだ見つかつていないのにそんな話をするのだから：：

だが、あまりにもしつこいのでしぶしぶ承諾した。

最初こそ、そんなに気乗りはしなかつたものの後半やけくそ気味に指導していたのは覚えてゐる。

その中でも抜群に成長していたヤツもいたが：：

表情ではちゃんとしていたが内心は心に何かポツカリと開いた感覚だつた。

秋斗のヤツは一夏にまるで関心が無いようだつた：：

ある日秋斗に一夏について聞いてみてみた事があつたが：：

『あん？あんなやつ居ない方が良かっただろ千冬姉え？』

家族なのにその言い方は無いだろう!!

その言葉の所為で秋斗に不信感が浮き出た。

一夏と秋斗の間にはほとんど差はなかったと自分でも思っている。

確かにやる気の無い一夏をすっかりまくったのはまずかったと思っっている。

秋斗より出来ているはずの一夏が秋斗より下のはずが無いと確信している自分がいたからこんなことを考えるのだろうか？

前に一夏に聞いたことがあった。

『一夏、何故本気を出さないんだ？』

一夏なら何でも出来る、そう確信していた自分はそう聞いてしまった。

一夏は返答に困っていたが……

『自分の本気って何だろうね？』

と言っていた、当時はまったく分けが分からなかったが今は分かる。

一夏は自分の才能をまったく分かっていなかった。

あの時分かっていたら一夏は変っていただろうか？

結局一夏の才能開花と成長が見れなかったわけだ。

「何をやっているんだろうな私は……失ってから気づいてしまうとは……」

後悔先に立たずといゆうのは私の事だろう、なにがブリュンヒルデだ!!何が世界最強だ!!何も守れて無いじゃないか!!

ドイツからの帰還後秋斗の異変に気づいた。

なにやらこそこそしているようだった。

そこでしばらく秋斗を尾行する事にした。

昔とある伏兵に尾行の極意を学んだ事がある。

ダンボール片手に秋斗を追った。

結論から言うと愚弟^{秋斗}は私に隠れてお金を使い込んでいたようだ……

まさか私が居ない間にこんな事をしていたとはな……

しかもだ、どうやらここいらの不良共を買収しているらしい。

裏ではこんなことをしていたか……

さらにアイツの不信感が出てしまった瞬間だった。

アイツは秋斗は本当に私達の姉弟なのか？

一夏の件といい今回のお金の使い込みようを見ると、どうも秋斗の行動は他人のそれにしか思えなくなつてしまつた。

不信感を覚えてしまつた私はこれで決めつけてはいけないと思ひ聞き込みを試みることにした。

今思えば遅い判断だつたと思う。

この行動力は一夏が居ないからなのか、ただ単に愚弟に失望したからなのか今の私にはまつたく分からない。

またもや結論から言うと、どうやら一夏と秋斗は兄弟とは思えない行動をしていたのが分かつた。

まず一夏買い物は絶対に一夏だけと言う事。

いままで兄弟一緒に買い物等をしていたと思つていた私は耳を疑つた。

一方秋斗は友達と遊んでいたと言う目撃情報まであつた。

それと秋斗は商店街に出入り禁止になつていた、何故と聞いたら……

『アイツは商店街のあちこちの商品を万引きしてやがったのさ、一夏君と本当に兄弟か？』
？』と思っていたほどだよ。』

万引き犯としてブラックリストされていた。

それと。

『やけに手際がよかったり、たまに一夏君に罪をなすり付けていたんだ、一夏君も一夏君で認めつつちやつてねえ、素直つてことで免罪符にしたんだよ。』

一夏の機転感謝だな。

そうして秋斗いやアイツはいったい何者なんだ？

これ以上考えても分からないので最後の切り札DNA鑑定をする事に決定した。
こつそりアイツの髪の毛やら血液を採取した。

(血液は秋斗を殴った時に出た鼻血を使った)

私も割り切った物だ、家族かもしれないんヤツを殴ったのだからな。

まあ、なにはともあれ結果を待っただけだな。

数週間後

やっと届いた……、こつそりと秘密裏にDNA検査していたからまどろっこしい段階
で検査していたようだ。

結果は………

不一致

分かっていた様な物だがこうも現実を突きつけられるとはな……

この結果はとりあえず心にしまっておくか、“IS学園”の私の机にしまっておくか。

秋斗この私を騙していた罪は重いぞ!!

秋斗 s i d e

ブルッ

「なんだ悪寒が走ったぞ? : : : 気のせいかな?」
そして、のうのうと生きて行くのだった。

一夏の後悔

イチカ side

あれからどのくらいたったんだろか？

ここでの時間の流れがよく分からないので断言はできないがざっと1年くらいだろうか。

ヴァルバトーゼ閣下の元で修行していたのだが、既に課題は1日で終わっていたらしい。

では、次はどうしたらいいんだと疑問に思っていたら。

『しかたがない、俺達がよく使っている所で修行を再会しよう。』

と言っていた。

どんな所なのか少しわくわくしていたのだが……

『ここが『練武山』という修行にもってこいの場所だ。』

そこに待っていたのはどえらいでかい山がそびえたっている中国風の所だった。

中国と言えばアイツを思い出すな……

中学校時代の友人、いや悪友か？

まあ、俺は友達と思っていたよ。

そいつの名前は『ファンレンイン凰鈴音』何かと酢豚、酢豚というヤツだ。

鈴が転校してきたさいやけに秋斗は興奮していた様子だった、たまに『鈴ちゃんペロペロ』とか言っていて気持ち悪かった……

まあその後、秋斗が好きな女子が鈴にいじめをしていたのを俺が目撃、あわててその当時俺の新発明品「瞬間テレポ銃」と言う簡単に言えば人間とか自分より大きい物をその銃の中に収納するという物だった。

まあ、いじめっ子の方じゃなくて鈴の方を吸い込んでんじやつたけど……
結果オーライでなんとか鈴捕獲出来たしいいや。

なんだかんだでその時意気投合してよく遊ぶようになったな。

その後、弾や数馬などの少数ながら友達が出来た。

その時の俺のあだ名が『一エモン』だ。

某人気ネコ型ロボットを参考にしたらしい。

そして、あの誘拐事件の数日前に鈴とある約束をした。

『あたしの料理が上手くなったら、毎日料理を食べてくれる？』

その時は驚いたまさかのプロポーズ。

だがその後何か言おうとしたが脱兎のごとくいい逃げされ返答がままならないまま

俺はドイツへいく事になってしまった。

だが実際俺は死んでいる、あの時銃を突きつけられた時ほんの少し死にたく無いと思っただけかもしれない。

願わくばもう一度鈴にあつて返事をしたいと思つた。

『はあッス。』

『どうしたのだ？イチカよ？』

後悔の念が少し出ていたようで閣下にはばれてしまった。

『あ、いや、その別にたいした事じゃ無いッス。』

あわてて誤摩化すが……

『言つた方が楽になるぞ？その方が修行に身が入るだろう……』

その言葉に押されれば強引に考えていた事と約束の事をしゃべってしまった。

ヴァルバトーゼ閣下には色々引きつけられるような感じがする。

他の悪魔の評価は『悪魔らしく無い悪魔』と『悪魔のお手本』という評価がついているのをアクターレさんの書類に書いてあった。

こういうことだったのかと、納得してしまった。

『そうか、生前の約束が守れなくて後悔しているのか。』

『は、はいそうッス。』

『フム、それではこの俺と約束をしよう。』
『へ?』

突然のことによく分からなかったがヴァルバトーゼ閣下が言うには。

『いつかこの俺がその友人に会わせてやる、だからお前はそこで約束を果たすがいい!!』
すっごいむちゃくちゃ言っているような気がする……

その時俺はラミントンさんが言っていた事を思い出す。

『2年後にはあなたには自分の世界に戻ってもらうと言う事を忘れていました。』

このヴァルバトーゼさんの約束がなくとも自分の世界に帰れると言うことをすっかり忘れていました。

まあ修行が終われば済む事か……。

それからしばらくレベルカンストまで修行していました(笑)

その間何と1年間修行してみたいです。

ヴァルバトーゼさんいわく

『よくあることだ気にするな。』

『お、おうツス……』

レベルがカンストしてしまったので残り1年間は雑務や地獄での観光しようかな？
ちなみに修行中に何となくだが人間体に自由に戻れるようになりました。

閣下の反応は

『イチカよ貴様も半プリニーなることが出来たのか、さらに期待が高まるな……』

とあまり驚かなかった、残念。

人間体になってもステータスは変動していなかった。

どうやらプリニーと人間のステータスは変らないらしい。

だとしたら人間は弱い存在なのもうなづける様な気がした。

その後大統領の屋敷でアクターレがアサギさんとライヴバトルをしていたので、ライヴが終わったら即刻ボコりました。

『げえ!!イチカ!!』

『ちよ、予定と違うじゃないアクターレ!!』

『少し頭冷やそうツスカ』

『ぎゃあああああああああああああああああああ』

いつもどうりの光景でした(笑)

おまけ

『強くしすぎたか……』

反省する閣下であった……

地獄日常編

地獄の日常1

ラミントン side

天界のラミントンの執務室

「ラミントン様!!地獄より手紙が届きました!!」

「ふむ、ご苦労様。」

「ハッ!!それでは!!」

そういつて天使兵は部屋から出て行った。

「手紙の主は……ヴァルバトーゼからか。」

おそらくイチカ君の事だろう。

さて中を見えますか。

……

「もうレベルがカンストの段階までできてしまいましたか。」

流石、元暴君……いや優秀なプリニー教育係だ。

手紙を見る限り順調のようだな、さて私ものんびりしてられないな。

後1年で彼の体の再構築をしなくては……

そう考えながらある場所へ向かう。

イチカside

よし、いつもどおり仕事をするか!!

「よし!!やるツスよ!!」

「「「「おーおーおー」」」」

今日は地獄の掃除をしようとする様々な場所を奇麗にする『※掃除デー』と言うのを決行している。

※暗黒議会でプリニーデー並みに可決が難しい議題である。
ちなみに力づくで可決しました。

「よし始めるツスよ!!」

「「「「ハイツス」」」」

そうしてみんなバラバラにわかれて行動して行った。

魔物 side

「わあああああプリニー共が攻めて来たあああああ。」

なぜか騒ぐ魔物A

「どうしたA彼奴等はただのプリニーではないか。」

「お前は知らないのか?」

「はて?」

「今のプリニーはめっちゃくちゃ強いんだぞ!」

そう魔物Aは慌てている様子。

それを見ている魔物Bは呆れたご様子。

「馬鹿馬鹿しい、プリニーごとき誰でも対処出来るわい。」

そう魔物Bが呆れて去ろうとしたその時。

ドドドドドドドドドドドドドドドド。

「ぎゃああ来たあああ。」

「なんじゃありゃあ!!」

プリニーの軍勢が魔物達に向かって来ている様子だった。

「たかだかプリニーやるぞ!!」

「まじかよ!!こうなりや、やけど逝ってくる!!」

ドドドドドドドドドドドドドドドド。

「うああああああ」

「うおおおおお」

「」「」「掃除の邪魔ツス!!」「」「」

こうして謎の激戦が行われていた。

ヴァルバトーゼ side

「?なにやら外が騒がしいな。」

今日はいつになく騒がしい。

「さーて、奇麗にするツスよー」

「ほほう、いい心がけだなそのプリニー。」

「あ、閣下!!」

「その調子で貯金しろよな。」

「はい!!ありがたきお言葉ツス!!」

最近プリニーが色々な雑務をしている光景を見るようになった。

俺から見ればいい光景な気がするのだが……

「まったくプリニーとは思えない発言だな。」

「……フェンリツヒよこれはプリニーに必要な光景ではないのか?」

最近よくプリニーが仕事をするようになってからと言うもの大分仕事が少なくなっているのは分かるがな。

「閣下は何故そう冷静に言えるのですか!!これはある意味異変ですよ!」

「まあ、言われてみれば異変だな、だが困る事でもないだろ?」

「う、それは……。」

そう困る事はまったくくない。

しかし、言われてみると確かに不思議だ。

まあ、イチカが関係あるの是一目瞭然だな、アイツが原因ならば心配ない。

現にここ地獄は困っていないからな(一部除く)たいした事はない。

フーカ side

「え？なにこの光景？」

私はものすごく不可解な出来事に遭遇しています。

プリニーが地獄の様々な所を掃除しているからです。

「本当なんデスカねこの光景は？」

「私を知るわけないでしょうが!!」

今でも混乱してるくらいなんだから。

「本当にどうしたんだろうなこれ？」

ふと後ろから声が聞こえた。

「あ、エミーゼルじゃん。」

「よっー!」

死神エミーゼルこと元魔界大統領の息子である。

今は地獄の犯罪人を始末するエージェントを父親とやっている。

魂を狩る訓練をしながら大統領の座を狙っている。

「実はこの光景はざっと1年前からなんだぜ？」

「え、嘘こんな知らないわよ!!」

「無理もないさ、最初は大統領の屋敷からどんどん広がってきて今の状態なんだから

や。」

「まじで?」

「まじの大まじさ。」

「私が知らない所でこんなことが…」

「今現状じゃ放置にしてるんだけどさ。」

「え?なんでよ異変レベルじゃないこれ。」

「いや、確かに異変レベルだけど今段階地獄に被害がないから手が出せないんだよ。」

えええええええええ

「じゃあしばらくはこんな感じなの?」

「まあ、そういう事になるな、一応俺もこの異変を調べてるんだけど全然何だよ。」

「え?どういうこと?」

高々プリニーなのに…

「いやなんかそいつ等がありえないくらい強いんだよ。」

「へ?プリニーでしょ?そいつら。」

「ああ、だけど何故かプリニーガX並みに強くなっていて手が出せないんだよ。」

「ええええええええ」

「多分リーダーのプリニーが変わったからそのリーダーに並ぼうとトレーニングしてい

るって噂が流れているからそのせいかな。」

なにその噂って

「そのリーダーってどんなプリニー？」

「へ？」

もしあの時助けてくれた半プリニーのやつだったら会ってみたい!!

「リーダーの特徴を教えてください聞いてんのだ!!」

私がエミーゼルをゆらす。

「わあああ、分かったからゆらすな!!」

「わかればよろしい。」

「女って怖い、と、そのリーダープリニーはとにかく白いらしい、それ以外はまったく情報はない。」

「それだけで分かったわ。」

「え？フーカ知っているのか？」

「いや、情報ありがとうねそれじゃ行くわよデスコ!!」

「あ、お姉様待ってくださいデス!!」

「あ、待てよお前等!!理由を話せえええええ!!」

こうして、フーカ、デスコ、エミールは『掃除デー』の本拠地魔界大統領の屋敷へ向かうのだった。

無事フーカはプリニーイチカに会う事が出来るのか!! 次回を待て!!

地獄の日常 2

イチカ side

「首尾の方は大丈夫ツスか？」

俺は皆に問う

「はいツス、とりあえず西エリアは無事清掃完了ツス、戦利品とか押収物がザツクザツクツス!!」

「次!!」

「はいツス!東エリアは約90%ツス、手こずっている原因はラハール殿下のせいツスねー。」

「ふむ、そうなればそこにエンプーサの類いを派遣すればいいツスね。」

ラハールさんには悪いが清掃率をあげるため足止めさせてもらいます!!

「次!!」

「南エリア約99%もう少しお待ちくださいツス!!」

「よし、分かったツス!!次!!」

「北エリア約50%ツス、ここは中々攻めこまねいているツス。」

やはりそこは難所だな……

「よし、皆北エリアにほぼ戦力を送るツス、俺も後から続く!!行くぞ!!」

「「「おおーーーーー!!!」」」

フーカ side

え?なにあれプリニーがいつぱいいるんですけど。

とりあえず隠れられる所に身を潜めています。

「はあ、はあ、追いついたあー」

「しーーーーー」

とつさにエミーゼルを捕まえ口を手で塞ぐ。

「むっぐう、なにすんのさあ!!」

「しいー静かに!!プリニーにばれちゃうでしょ!!」

その言葉にエミーゼルは黙った。

「で、隠れたはいいいけどここはまだプリニーに占拠されてないみたいだな。」

「へ?占拠ってなんのことよ!!」

「いや、あいつらの目的は魔界全体の清掃なんだよ、もう魔界の約80%はゴミ一つないぜ?」

そういえばこの頃不法投棄されているゴミを見た事が無い、こういうことだったのか
……

「別に悪い事じゃないんだけど、度が過ぎていてちよつと問題になっているんだよ。」

「どういうこと?」

「お前は主犯のことはちゃんと知っているんだらうな?」

知っているっちゃ知っているけど深くまでは知らないわ、だから会ってみただけ
どね。

「まあいいや主犯のヤツはどうやら奇麗好きらしい、魔界に染み渡っている汚れなんか
も奇麗になってる、現に古くからいる悪魔なんか『この所めまいがするんだけど知ら

ない?』だつてさ、どんだけ綺麗にしてるんだよ!!」

うわあ、それは確かにやりすぎねえ。

「刃向かう悪魔も居たらしいけどほとんどプリニーにボコボコにされたらしい。」

「え? 上級の悪魔も居たんでしょ? さつきはスルーしてたけど。」

「お前なあ、さつきも話したけどあいづらどういうわけかプリニーガX並みの力を手に

入れていたんだよ、しかもそいつ等を投げれないと来た!」

えええええ投げれないプリニーとかプリニーじゃないし。

「なにか理由でも有るのかしら?」

「知らないよ、その主犯に聞いてみれば分かるんじゃないか?」

そんな会話の中何か近づいてくる大きな地響きがした。

ドドドドドドドドドドドド

「うわ、こんどはなに!?!」

「お、ついに主犯のプリニーが拝めるか?」

? どういう事だろう

「見ろあのプリニーの軍団の中に白いプリニーがいるだろ？」

そう言われて目を凝らしてみた、確かに白く目立つプリニーがいた。

あれがあの時見たイチカさんなのだろうか？

実際に会って確かめなくては!!

そう思ったら私はあのプリニー軍団めがけて走っていた。

「ちよ、フーカ!!」

「お姉様!!」

いつのまにかいたデスコの事なん考えずひたすら無我夢中に私はプリニー軍団へと向かって行った。

そうしてその軍団が通るであろう道にでてバットを構えこう宣言する!!

「そこを止まりなさいプリニー軍団!!私が相手をしてやるわ!!」

こうやって私はプリニーの群生を止めた。

続くよん。

————おまけ————

アサギ side

はあアクター悪友レとライブバトルするんじやなかった、あいつがしばらく秘書イチカが居ないからライブバトルしよーぜとかほざくからさー

「まさか帰ってくる時にそんな話もちかけてくる？普通。」

まあ、あの子がきてから色んな意味でアイツも変ったかー。

あたしが初めてあいつとあった時なんか顔をしかめてたしさー。

後で理由を聞いたらその時の世界戦のあたしに嫌な思いでが遭ったんだってさ、笑えたわ。

あたしはどうやら何処の魔界にもいるみたいでさ、自分でもよつくわつかんないんだよねー(笑)

だからいつか主人公になれる世界戦のあたしがいたらその座を奪ってやるんだからね!!

「ふう、なんかスッキリしたわ、今度はイチカにライブの許可とろう。」

なんやかんやでこの騒動に巻き込まれなかったちよつとラッキーな不幸少女がつぶやくのだった。

地獄の日常3

イチカside

いきなりだった：俺達は北エリアに増援をしくため北エリアに向かっていたのだった。

そこに行く途中何者かに行く手を阻まれた、その人物が……

「そこを通してくださいッスフーカ嬢!!」

そこにいたのはざつと1年前におせっかいで助けた少女風祭フーカだった。

「ええい、いくらフーカ嬢だからって俺達の掃除は止められないッスよ!!」

一匹のプリニーがフーカに向かおうとするが……

「待つッス。」

「!!??」

俺がそう言う。

「ちよ、なに言っているッスか、プリニー長!!早く北エリアに向かわないと。」

「分かっているッス、とりあえず目的が分からない以上彼女に聞くしかないッスよ。」

俺の言葉にプリニー達は……

「「アイ、アイサーツス」」

きちんと整列して攻撃態勢を解除した。

「さて、お話を聞きましようツスカ。」

フーカはボーゼンとしていた、が。

「話しが早いわ、そこの白いプリニー!!」

「お、俺ツスカ?」

「私と戦いなさい!!」

「はい?」

いきなり勝負をしかけられた。

「どうするツスカ?プリニー長。」

「どうしたもこうしたも無いツス、こうなったらしょうが無いツス、プリニー隊長居るツ

スか?」

「はッ、ここに居ますッス。」

「とりあえずプリニー隊長、皆を連れて北エリアえ行つてくれッス。」

「え? 長はどうするッスか?。」

「俺はこのまま残り、フーカ嬢の相手をするッス、狙いは俺らしいッスからねえ。」

俺の命令にプリニー隊長は……

「そんなむちやなッス!!」

「いくら長でも無理ッス。」

そんな言葉に俺はこう言った。

「無茶でも俺達の目的に支障が出ちゃダメッス、だからここは俺に任せるッス。」

「長……、分かりましたッス!?! 皆行くッスよー」

「二「アイ、アイサーッス」」

こうして俺を置いてプリニー軍団は北エリアに向かって行った。

「またせたッスね。」

そうして風祭フーカと今対峙している。

「……、あんた普通のプリニーじゃなくてあたしと同じ半プリニーなんでしょ?」

!?

まさかあの時の俺を今の俺と気づいているのか？

「だとしたらどうするツスカ？」

「だったら、こうするのよ!!」

するとフリーカは爆弾を取り出し俺に向かってバットで爆弾を打ち出す。

「おっと。」

俺はすかさずミニ雪片零式で爆弾を切り刻んだ。

「!?、なかなかやるじゃない。」

「伊達に閣下の元で修行してないツスよ。」

「え!? ヴアルっちの元で修行したの!？」

ヴアルっちって……

「それじゃあ今度は俺から……行くツスよ!!」

今度はフリーカにプリニー斬激が飛び交う。

「こんのおー……」

フリーカは斬激をバットでいとも容易く相殺した。

「ちよ……あの斬激をバットでってどんだけツスカ!!」

「こんくらい……普通よ!!」

そうしてこれでもかって言うくらいにフルスイングして爆弾が入り乱れる爆風が

襲って来た。

「まじッスか!!」

俺は急いで回避した。

さすがにあの爆弾群は無理だな。

避けた先がクレーター出来とるし。

「ツチ避けたか…:。」

どうやら本気でかかってくるようだ。

「こちらも本気でやった方がいい見たいッスね!!」

よし、恥ずかしいけどあの技を試す時だぜ!!

そう思ったが吉日!! 変身ッス!!

『プリニーメタモルフォーゼ!!』

とまあ恥ずかしい決め台詞を大声で唱えた。

フーカ side

『プリニーメタモルフォーゼ!!』

と白いプリニーが突然そんなセリフを放った。

え?なにこれ、この言葉につきる。

そんな風に思ったその時……

ピッカー

白いプリニーから光があふれた

「ちよ、いったいなんなのよー……。」

どうにか光が収まって目が見えるようになったと思つたら。
そこには、1年前あの時助けてくれた人がいた。

「やっぱりあんたがああの時の、いいえ『イチカ』だったのね。」
あたしは聞いたです。

「まさかこんな事になるなんて思わなかったからツスね。」

まさかの語尾にツスをつけながらの再会である。

「ちよつとこんな時くらいツスはつけないでいいでしょ!!」

「う、それもそうか。」

はあーこんな再会でよかったのかしら……でも勝負はこれからよ!!第2ラウンドの
始まりよ!!

「いきなり行くわよプリニーガZZ!!」

突如あたしの後ろに。パパの自信作『プリニーガZZ』プリニーガダブルゼットが出現する。

「発射!!」

そのままレーザーやら何やらを発射する。

彼が見え無くなるくらいにミサイルも撃ち込む。

「砲撃やめ!!」

このまま消滅してないかしら?ちよつと反省しながら煙が収まるのを待つ、その時!!

ザン!!

何か空気が切れた音がしたあたしは寸前で避ける。

「ちよ、あの弾の雨の中どうやって避けたのよー！ー！ー！」

そこには刀を持ったイチカがあたしの近くまで来て刃を当てようとしている所だった。

「けっこう危なかったんだぜ？」

「余裕じゃん!!」

イチカは汗一つかいていない。

たいしてあたしはひ汗だから。

「もう、今度こそあててやるんだから!!」

体制を立て直しもう一度イチカに向き直る。

「そうこなくっちゃ!!」

イチカが楽しそうに言う

ドキ!!

ちよ、なんなのよ、なんでときめいたの!!もうーこの戦いが終わったら殴ってやる(ア

クターレ

『ちよ、なんでよ!!』

イチカside

あはは、俺ってこんなに戦闘狂だったか？それともフーカだからか？

どっちが年上か分からないけど戦いつてこんなに楽しいものだったかなあ？

まあどっちでもいいや、それよりもこの新しく改良した『地獄式雪片』の性能を試してみるか。

ふふフーカがどんな顔するか楽しみだぜ。

「アビリティコイン 『ファイア』」

俺がそう言うと『地獄式雪片』にコインを入れる。

コインの入り口は雪片の柄の底にある。

入れるには一回刃を斜めにする必要があるが素早く済ませばいい事。

そうして一回混ぜる。

『ファイア!!』

『地獄式雪片』が電子音でそう言う。

そうして刃には炎が浮き出した。

この『アビリティコイン』には技を刷り込ませてある。

だから『地獄式雪片』に炎のエンチャントがついたのだ。

「いくぞ!!」

「え、ちよちよつとまって!!」

「問答無用!!」

「こうなったら『当たって砕けろ』よ!!」

俺達は技と技がぶつかり合った。

勝負の勝敗はどうなるか分からない。

次回へつづくかな？

番外編 織斑 一夏

イチカside

こんなに楽しいのはいつぶりだろうか？

こんなに胸踊る感じはいつぶりなのだろうか？

本を読んでいても、機械いじりをしていても、こんな感情は無かった……
今思えば俺は生まれたときから普通では無かった。

俺と秋斗は双子だ、といつても二卵双生児双子と聞いている。

つまり俺と秋斗はまったく似ていない。

5歳の俺はもう既に文字ばかりの本を見ていたと千冬姉に聞いた事がある。

千冬姉の話によると普通ではあり得ない状態を俺の親は……

『おおー、一夏はすごいねー学者になれるんじゃないかー？』

『あらあらー』

とのんきにお茶を飲んでいたそうなの。

俺が6歳の時両親は何処かへ旅行へ行くと行ってそのまま帰って来なかった。

千冬姉が言うには旅行先へ行く途中飛行機が墜落したらしい。

今でも千冬姉の青ざめた顔が鮮明に残っている。

この時、俺は他人には興味が無いと自覚した。

同学年の子供に挨拶されてもだいたい棒読みな挨拶しか出来ない。

秋斗はちゃんと挨拶は出来るのにだ。

原因はよく分かかっていなかった。

10歳の時初めて心踊る機会がおとづれた、束さんとの出会だ。

最初はなんでこんなに見ず知らずの自分に話掛けているのかはまったく分からなかった。

後で理由を聞いてみたところ……

『んー、なんか私の小さい頃にそっくりだったからだよ。』

そんな理由だった。

その後千冬姉に通っている道場に連れて行ってもらった。

別に剣道をやりたいわけじゃなかったので嫌々行って行った。

その時に東さんと再会した、ある意味腐れ縁に近い遭遇だった。

その後東さんとは大体経歴が一緒だったという事実が出て来て、とても仲良くなつた。

東さんも機械いじりが好きと言うことで俺も東さんの手伝いをさせてもらうことが出来た。

最初は不慣れだった作業もテキパキと使いこなせる事が出来てとても嬉しかった。

その後も遊びにでかける時は必ず東さんの所へ向かった。ただそれとも長くは続かなかつた……

ある日秋斗が

『兄さんこの頃、楽しそうじゃないか、俺も連れて行ってよ。』

ある意味この頃から俺はこいつが嫌になつていたのかも知れない。

今までは俺に興味が無いかのごとく色んな人にふれあつていたこいつが珍しく俺に話しかけて来た。

『これから東さんの所に行くんだよ、だからお前はつれてけないぞ?』

ある意味選択を間違えたかもしれない心の中で思ってしまった。

こいつの事だ束さんに何かしてしまふかもしれない、そう思ってしまった。実際この後、後をついて来て俺よりも先にラボについていた。もう、ここへは来れないと勝手に決めてしまった。

その数週間後、あの事件が起こった、そう『白騎士事件』

前に語った通り『ゼウス』によつて事は収まった。

この事件をきっかけに束さんは逃走、その家族はバラバラになった。

束さんの妹篠ノ之 箒も何処かへ転校して行つた。

箒は小学生1年の時いじめられていたけど俺の独特のオーラが近くにあつたせいで自然と箒のいじめは無くなつていた。

俺は意図せず箒を助けていたらしい。

いやになつかれていた様な気はしていたが……

そして13歳この時初めてと言うかうん、初めてか……友人が出来た。

転校生の凰 鈴音、五反田 弾、御手洗 数馬の3人だ。

友達になったきつかけが下心ありすぎて笑ってしまったがいつまでも変わらない友情はあるつもりだ。

ここで他人とふれあったためか俺の無関心癖？は少しずつ消えて行った。
後はプロローグを見ろ!! (宣伝乙wwww)

あらためて思い出してみると本当にろくでもねえな。

だけどこれが俺の人生であり経験だ!!

そうして目の前のフーカを見る。

さて、もう一度この楽しい戦いを始めようか!!

次回投稿を待つんDA!!

地獄の日常4

エミージェル side

「なんなんだこの状況は。」

ふと声に出てしまうこの状況。

さつきまで平地だった場所が穴だらけの状況だ。

いくら魔界でもこの状況は珍しい、主にあの半プリニーの男が原因だ。

「半プリニーの人間がもう一人いた、だけでも思考停止しそうなんだけど……」

ぶつちやけ思考が追いつかないだけで戦況はフーカが、かろうじて男の攻撃を避けて
たまたま攻撃するくらいだ。

それに一つ疑問がある。

「あの半プリニー男「イチカさんデス」え？」

突然デスコが言葉を発する。

「アイツを知っているのか？」

「はいデス……」

イチカか……先ほど『ソウルモノクル』で魂の査定をこっそりしてみたんだけど……

結果は純粹を司る『白』だった、普通なら『白』は天使になるほどの超清らかな魂だ

…

それが地獄と称されるここにいるのは変だと思う。

「後でヴァルバトーゼに話を聞いてみるしかないな……」

今の俺達じゃあ見てるだけしかできないし。

フーカ side

うわつと、さつきから見た事無い技ばかり出してくるわ。

「どうした？ さつきから避けてばかりだけど？」

「つく……」

悔しいけどそのその通りなのよね。

少し本気を出して来たのか見た事が無い魔法を放ってくる。

『ファイア』『クール』

と考えている間にまたあの技だ。

「いくぞ!!」

イチカがそう言うのとレバーを引く

『ウォーター』

電子音がそう言うのと水の刃が私に迫る。

「こんにゃろー!!」

なんとか水の刃を防いだ。

水の魔法なんて来た事が無い、見た事がある魔法はここでは『クール』氷魔法しか無いからだ、なのにイチカはその水魔法を使える……

「考えるな!! つっぱしれ!!」

そう考えなくていい、とりあえずイチカに攻撃をあてることに集中するのよ!!

私はイチカを見る。

それを見たイチカはニヤリと笑う。

はたから見ればイチカの笑みは挑発に見えるかもしれないけど、今の私にはそれほど不快に思わない、何故かは分からないけど今は考えない!!

私はバットを大きく振りかぶってイチカの攻撃に備える。

イチカの攻撃を打ち返す、一見悪手に見えるけどあたしの直感が言っている……これしかない!!

「それでこそだ!!」

『ファイア』『クール』

再びあの電子音だけどそんなの関係ない!!

そして再びレバーを引く

『ウォーター』

そして水の刃が迫る。

「そっ!!」

私は無我夢中でバットを振った力の限り振った。

そして水の刃は……

「うお!!」

跳ね返ってイチカに攻撃が当たった。

「おっしやあ。」

理由はなんだか分からないけど打ち返す事ができたわ!!

「……………へッ」

イチカは跳ね返って来た刃のダメージを無かった事のように体制を立て直す。

「はははは、やるねえフーカ!!」

ドツキン

まただ、また心臓が飛びでそうな衝動かした。

「あーもう、これで最後にしてやるんだから!!」

もうマナもヤバくなってきたから実質最後の攻撃になるだろうだから全身全霊の攻撃をしかける。

「そうだね、これで最後だ!!」

イチカもマナが底をつきかけているのか、あたしの提案に乗った。

『よし!!いく(わよ)ぜ!!』

そうして最大級の技をぶつける

「篠ノ之我流裏!! 『雪原桜』!!」

「バッターボックスオブプリニー」

それぞれの技が交差する、そうして魔界の出来事で後に『プリニーハルマゲドン』と称される出来事が今日この地獄で起きたのだった。

イチカ side

あーやつちまたなー、俺もフリーカも動けないもんなあ
でも、楽しかったわあ

「初めて全力でできたのかな？」

なにもない空？に一人眩く。

今の状態は俺とフリーカは爆心地の真ん中に居る、戦いでボコボコだった地形も一つの
地形になっている状況だった。

「引き分けかなあ？」

勝負は引き分けだ、俺もフリーカも動けない状態だしな。

「ただ俺は満足している、生きていた時よりも生き生きしていたと思う。」

「あはははは、清々しいな。」

ボン

そんな音がしたと思つたら俺の体はプリニーに戻っていた。

「ちようど時間切れか、もうちよつとでフーカの勝ちだったかー」

このプリニーから半プリニー化へチェンジする時間は増えたものの、時間が終わると元のプリニーの姿に戻る事は言わずもがなしばらく動けないと言うデメリットが追加された、どうやらこの体は『成長するプリニーの皮』らしい。

端的い言うとな自分の成長に合わせて皮が適応すると言う代物。

それのおかげで再びフーカに合えそして戦えたのだ、文句は言えんな。

「あー、でも『掃除デー』どうつすかなあ?」

終わっちゃてるかもしれないな……まあしょうがないつか。

今の余韻にひたるとしよう、そうして俺はそのまま意識を手放した。

おまけ

ちなみに『掃除デー』は見事プリニー軍団が勝利した。

「畜生なんて強さだよ!!」

「だから言っただろうフェンリヒよ、今のこいつ等は強いと。」

「申し訳ございません閣下……」

フェンリツヒが謝る。

「気にする必要はない、今回はこやつ等の指揮官が優秀なだけだった、ただだ。」

「気になっていたのですが、今回のプリニー共の指揮官を知っているのですか？」

フェンリツヒがヴェルバトーゼに疑問を投げかけた。

「近々合うだろう、その時に紹介しよう。」

「ハッ、分かりました。」

そして今日地獄の一日が終わる……

地獄の日常5

フーカと盛大にドンパチした3日後……

イチカside

ふーなんとか書類は片付いたな。

あの後1日だけ休んでなんとか動けるまで回復したのだが。

案の定アクターレさんが仕事をさぼりやがったのでボコボコにした。

「あの人のさぼりはもう不治の病ツスね。」

別魔界で芸人をしていたらしいがどうやって芸能界を生き残った見てみたい気がする。

「まあ、ギターを武器にするのはどうかと思うツスけどねえ。」

しかもあのギターどうやっても壊れないらしい。

と言うのもこの世界の武器と物は中々壊れないらしい。

一番脆い物と言えば『ジオシンボル』と『ジオブロック』だろう。

これらはマナの固まりと言われている。

だからなのか攻撃すれば崩れる。

だからこそこの『アビリティコイン』を発案した。
「まさかここまでの代物になるとは思わなかったツス。」

ある程度どうなるかは理論で分かっていたけど、想像以上だった。

自分のマナはある程度消費するがほとんどが『アビリティコイン』によつてマナが押さえられて低コストで魔法が撃てる。

『ファイア』＋『クール』＝『ウオータ』

なのだがコストは低級魔法のマナと変わらない、倍のコストがかかると思っていたがそんなことは無かった。

どうやら余分なマナコストはある程度軽減され、他の低級魔法と同じ扱いにされるらしい。

これな特殊技も同じだと言う結論にいたる。

実際そうだったしな。

そんな考察をしながら考えていると扉から『コンコン』と扉をたたく音がした

「ん？どうぞ開いてるツスよー」

「そう？んじゃ入るわよー。」

「この声は……」

「じゃじゃーんアサギ様参上!!」

「やっぱりアサギさんでしたか……」

「なによりその態度はー」

「いや、なんでも無いツスよー」

遊びに来たわけではないのか？

「んでちよつと頼みたい事があるのよ。」

「頼みたい事ツスか？」

「そうそう、ちよつとねライブをやりたくなつて思っているのよ、ほら皆呼んでさ!!」

ライブつてちよつと前にやつて無かつたか？

「やーねーあんなゲリラライブじゃないわよ。」

「つて思考を読まないでください、じゃあ招待する方の方ですか？」

そう言うのアサギは指をチツチツと横に振つてドヤ顔で言う。

「そうじゃないわよ、みんなで歌つたり踊つたりする視聴者参加型のライブをすんのよ!!」

「ええええ……そんな大規模なライブをやるんツスか……。」

「だつてこうでもしなきゃ色々もつたないじゃん!!」

相変わらずぶつ飛んだ発想をする人だ……、しかし面白そうだ。

「面白そうですね、ですが参加する人は決まつてるんツスか？」

「んにや？決まってるないよ？」

「ええええええ……じゃあどうするんツスカ……」

「イヤー決まってるからでいいかなーって思ってるさー。」

この人は……しかし承諾してしまったからには俺も全力を出さなくては。

「とりあえず俺も宛を探すのでアサギさんも人手を探してくださいね、そうしたら日程も決めますので。」

「まじで!!ありがとうあたしも探してみるからお願いな!!」

きやほうと叫びながらドアを荒く開けどっかへ行ってしまった。

さて、もう少ししたら探すか……

アクターレ side

やあ!! 良い子のみんな久しぶりだな!! みんなのアイドルアクターレ様だ!!

いきなりだがピンチだ、今日は何にも悪い事していない俺様が何故かあのプリニー女に追いかけられている。

本当だよ、俺様悪い事なんもしていないよまじで、あ、いやちよつと悪い事したか。

だって俺様『ダークヒーロー』で『魔界大統領』だもんね!!

昨日だって仕事さぼっただけでもん!!

後でイチカにボコられたけど…

しかし…

「なんで俺様なのおおおおおおお」

「待たんかいこのアホターラーレ!!」

「いいいいやああああああああああ」

この日アクターレとフリーカは一日中魔界を走り回っていた

理由無き理不尽がアクターレを襲った!!

ちなみに結局アクターレはフリーカに捕まりボコボコにされました。

まあ、すぐ復活したが。

エミーゼル side

うーんいつ見ても不可解だなあ。

3日前のあれどう見ても『異例』だ、だってプリニーがあそこまで強いなんて魔界の歴史じゃあ、あの『超魔王バール』が転生した姿の『プリニーバール』しかない。

ただのプリニーでは無いのは確かなんだ……

「うーん」

謎が多すぎる

「エミーゼル様。」

「うわあ!! ってなんだシルか……」

こいつは死霊魔術師のシル、なんでか俺の事を気に入ってストーカーのように俺の後をついてくる。

親父の機転で秘書にしてもらったけど相変わらずなに考えてるか分からない、したつてくれるのはいいけど、ほどほどにしてほしい。

「エミール様は私の事をどう思っていますか？」

ほら、またこの質問だよ

「前も言ったけど俺の大事な秘書だ、これでいいだろ？」

「いいえ、もつと上の段階が欲しいのです!!」

「う、上の段階？」

「そうです、いくなればあなたの妻に!!」

「つ、妻ああああ!!」

妻って夫婦の方だよな、ええええええええ

「ほら、言ってください私めを妻にと……」

シルの顔が俺に近づいてくる。

「あ、あ、ああああ」

ばったーん

「あ、」

俺はそこで意識が途絶えた。

シルside

エミーゼル様が倒れてしまった、まだ早いと言うことでしょうか……

エミーゼル様のお義父には承諾は貰っているのですが（本当に親公認の間柄です本人は知らないが……）

「焦らさずがんばりましょう。」

そうやって私はエミーゼル様をお姫様抱っこして部屋から出ました。

地獄の日常6

イチカside

とりあえず募集をかけてみたが……

一枚目：ターメリック

二枚目：メーヴェル

三枚目：日本一ちゃん

四枚目：アクターレ

五枚目：フリーカ&デスコ

六枚目：ローゼンクイーンズ

七枚目：魔王ズ

八枚目：アサギ

九枚目：プリニー48

十枚目：勇者オブアース

だ、色々ツツコミ所があるかもしれんが我慢してくれ。

しかし、思ったより募集が殺到してたつた数分で枠が埋まったな。

なにやチーム名より個人名が多いが。

「なにはともあれこれで行くしか無いツスね。」

そう言うのと俺はチラシを作るため情報局へ向かうのだった。

情報局

「つてなわけでよろしくたのむツス。」

情報局長にさういう。

「わかったわ、一字一句間違わないで伝えましょう。」

「いやいや、間違おうと努力しないでくださいよ?」

一応釘は刺しとく。

「そんなことはしないわよ（笑）」

大丈夫かなあ。

「まあ、冗談は置いて本当に面白そうなイベントじゃない。」

「ええ、とてもいい企画だと思います。」

アサギさんの案だが、本当にいいとは思う。

「まあ、あのアサギがだした案で言うのがちよつとアレな気がして思わずいられないけど……」

「まあ、それはしかたが無いツスね。」

本当にね……

「そういえばこれって賞品とかあるの？」

「まあ、それっぽい物は用意するつもりです。」

「そう……」

そういつて俺が渡した原稿を持って局内へ戻って行った。

そうして振り向き様にこう言った。

「そうそう、今回のイベント私たち情報局員共も楽しみにしてるからね。」

そう言つて再び向こうへ歩いて行った。

さて、企画をさらに再確認するか……忙しくなるな。

フーカ side

うーん、勢いでデスクとコンビくんじゃったけど、こんなんで大丈夫かしら？と悩んでいたら誰か来た。

「む、フーカではないか。」

「あ。ヴァルっち。」

ヴァルっちこと『暴君ヴァルバトーゼ』すごい人？らしい。

「なるほど今、魔界を騒がせている『お楽しみライブ』に参加をするのか……」

「いきおいでね……」

「デスコも『準備して来るデス』って言ってどっかいつちやたし。

「なにを今更戸惑っている、お前はお前の実力を出せばよい。」

「いや、私一応人前で歌うの初めてなんですけど……」

「なに、気にする事はない、自然に歌えばいいだけの事だ。」

「いや、意味わかんないから……」

「分からなくとも良い、己を信じていればいつか見えるだろう。」

「う、うーん」

「いつに増してもわっかんないわ。」

「というか戦いじゃないし。」

「む、そうなのか？」

「やっぱ勘違いしてたか……まあ緊張はほぐれたから感謝はするわ!!」

「そうか、それはよかった。」

「なにを安心したのかヴァルたちはそそくさとどっか行ってしまった。」

「なんだったのかしら？」

「お姉様……」

「デスコが戻ってきた」

「なにそのコスプレ？」

「コスプレとは聞き捨てならないデス、ちゃんとした正装らしいデスよ？」

えええええちよつと正装とはかけ離れた服装をしているデスコ

装備にすると。

頭：水泳キャップ

体：スクール水着（旧）

である。

デスコはどこを目指してるのだろうか……

（ちなみに、デスコの着ているスクール水着はフーカのおさがりの物です、フーカパパ

（ノーム）がくれました。）

アクターレ side

まさか、アサギの奴がこんな嬉しいイベントを用意してくれるとはな。

「ふっふっふっふ。」

「アクターレ君ご機嫌だねえ……」

アクターレの横に紫色の髪をした天使がいる。

「そりや嬉しいに決まってるだろう『役者B』!!」

「まあ、君が嬉しければいいんだけどねえ。」

「アクターレ様が嬉しそうで何よりですよん。」

ピンクも役者Bもちよつと微笑みながらアクターレを見ている。

「これも彼のおかげなのかねえ？」

「さあこればかりは分からないにやん。」

アサギもどうやら本気で来るみたいだからなあ俺様も本気でいくぜえ!!

「よっしやあこれから練習だいくぜみんなあ!!」

「やれやれ、付き合うよアクターレ君。」

「はいですよん!!」

この後イチカに仕事をさぼっているのがバレてボコボコにされたが『役者B』は嬉しそうだったそうな。(さすがDM)

「いやー彼の攻撃は刺激的♪」

分かっていて仕事放棄の道を選んでいたみたいですよ。

ライブ・オブフェスティバル前編

イチカside

ライブ当日になりました。

どのくらいの観客が来たのか気になったのでちよつとステージの方をしてみましたら

.....

「どえらい客がきているツスね……」

そう思ったより観客が来ているのだ。

すると。

「いやーすごいお客さんが来てるわねー。」

アサギさんが来た。

「俺もびつくりツスよ。」

「あたしも予想外だわこれは……」

アサギさんがちよつと苦笑いを浮かべる。

「いくら広告したからと言ってこれもこれは予想外ツス。」

いったいなにがおこっているのやら。

広告を任せていた情報部の新聞も一応チェック済みなので大したことはしていない。「まあなんとかなるツスカねえ？」

「そうね何とかなるわ、逆に燃えてくるわ!!」

アサギさんが張り切っている……

8番目なんだけどなあ。

チラシには申請が来た順に載っているので順番は前回の申請順と同じである。

ウサギさん s i d e

どうもみなさんこんにちわ!!私の名前は『うさぎさん』みんなからは『プレネールさん』の非常食と言われているよ。

今回はあの『アクターレ』からの依頼でこのライブの司会進行やらせて貰うことになった!!

ぶちやけ断つてもよかったけど並みならぬ雰囲気醸し出しそうなライブだったので依頼を受けたのだ!!

『プレネールさん』もなぜか乗り気だったのでなおさらだ。

『レディースアーン ドジェントルメン』これより第1回魔界音響際を始めたーいと思えます!!司会はこの私『うさぎさん』とみんなの受付嬢『プレネールさん』だ!!』

「「「「おおおおおおお」」」」

なかなか盛り上がっているな。

だが今回は近年まれにみるお祭りじやない!!

賞品がでるらしいからと言う理由で参加しているメンバーも少なからずいるらしい。

だからこれを主催した『プリニーイチカ』はよく考えたらしい、賞品を隠すというお楽しみなサプライズがあるからな。

実際俺も知らんし。

『まず、トップバッター『ターメリック』さんどうぞ!!』

俺がそう呼ぶとステージの奥から『ターメリック』が出てきた、彼はここより別の魔界から来たらしい。

『どうもー、先ほど紹介された『ターメリック』だ!! 普段は『プリニー工場』の工場長をやっている、今回のライブのために俺が作詞作曲した歌を披露するぜ!!』

そういうとターメリックはマイクスタンドを持って歌い始めた。

『えーつと? 曲名は『酢豚パイナップル廃止』ですそれではどうぞー。』

ターメリック熱狂中

『みんな!! ありがとう!!』

「「「わあああああああ「「「」」」

熱血な歌声でステージの温度は上昇した、なんとというか魂が揺さぶられる曲だった。

『ターメリックさんありがとうございまして!! それでは次の方どうぞ!!』

『はい、私の名前は『メーヴェル』と申します、普段は時空の扉の受付をしておりますわ。』
「「「「おおおおおおお」」」」

先ほどとは違い一段と歓声が上がると、彼女はひそかにファンが多い事で有名なので驚きはしない。

『では私も『ターメリック』様と同じで曲を作りましたのでよろしくお願いいたしますわ。』

『それでは行きます曲名は『水着のラプソディ』です、どうぞ!!』

—————
メーヴェル静かに歌う
—————

『皆様今回はありがとうございます。』

「「「わああああああああ」」」

静かな曲の中に何とも言えない心の声が聞こえた気がする……が気のせいだな。

『それでは次の方どうぞ!!』

『私の名は『日本一ちゃん』です!!今回はイチカ君が主催していると聞いて参加してみました!!私も作詞作曲してきた歌を歌います!!』

彼女は自称ヒーローを名乗っている謎の人物だ……プリニーイチカとどこであったかはまだわからないのが現状だ……

『えーつと曲名は『ジャスティスゲーム』ですそれではどうぞ!!』

——日本一ちゃんアイドルぽく歌う——

『みなさんありがとうございました!!今後ともよろしくお願いしまーす!!』

ヒーローはく歌うと思つたら全然違うし!!まさかのキャピキャピ系の歌である、しかしながらヒーローの歌はくはあつたな。

『はい、どうもありがとうございました!!それでは次のお方どうぞ!!』

『俺様がこのライブのメインデツシユの『アクターレ』様だあああああ』

「「わあああああああ」」

『いや、メインじゃないような…:まあいいでしょうそれでは曲名は…:』

『ちよいちよいちよいー!!』

『なんですか?早く始めてください。』

『冷たい!!』

『冗談ですよ冗談、早くしてください!!』

『ひどい!!職業は『魔界大統領』だ本職は芸能だかな!!』

アクターレはちよつと涙目になっている。

『曲名は『ホワイトタイガー』ですそれではどうぞ!!』

アクターレ熱狂中

『みんなーありがとーよ!! 久々にはじけたぜ——』

「「「わああああああああ」」」

流石元芸能人ですね、歌唱力も演奏力もある、あんな事件さえなければ干されなかつたんですがね……

『さて!! はりきって次の人を呼びましょう 『フーカ&デスコ』 だあああああああ。』

『どうもー』

『どうもデス!!』

……フーカさんは普通の服なのですが、なんでデスコさんはスク水なんですか？

ん、んーでは職業をどうぞ!!』

『デスコは『ラスボス』をやっているデス!!』

『あたしは、その補助?をしているわ!!』

……そ、そうですか、それでは歌ってもらいましょう!! 曲名は『がんばれ女の子(大勢)です!!』

え?なにこれ? (大勢) なんだろう?

『みんなーありがとう!!』

『ありがとうデスー』

まさかのバックコーラスに他の人がいるとは……流石フーカさんだ。

『そ、それでは次の、と思いましたがしばらく準備がかかるのことで少し休憩時間に入ります!!ちようど区切りが良いのでトイレへ行きたい方はどうぞおすませてからどうぞ!!』

ふう、なんとか中間ポイントだなー、この調子で終わればいいんだがなー。

このリストを見ていると不安しかないわー。

特にこの『魔王ズ』大丈夫か?このメンバーで……

後半へ続く

ライブ・オブフェスティバル後編

ウサギさん side

『さーてお待たせしました!! 休憩を挟んでのこのライブ!! 明らかに観客が減ってきたがこのまま進めるぞ!!』

ピン♪ポン♪パン♪ポーン♪

『連絡事項です。最後までこのライブに参加した限定でもれなく参加者無料の品を渡します。』
『どうか最後までご参加してください。』

ピン→ポン←パン↓ポーン↓

ドドドドドドド

『みなさん戻って来たみたいですねー、それでは始めましょう!!』

イチカ君悪魔達の扱いがうまくなってるなー

「……………すごい」

おやおや〜うちのプレネールさんが興味を持ち始めましたよー

『次の歌を歌ってくれるメンバーは……………『ローゼンクイーンズ』!!、こちらのバンドは『ローゼンクイーン商会』の三人組が結成したバンドだああああ!!、曲は『ローゼ

ンクイーン』の曲をアレンジして歌にしたものだそうだが、こころして聞けえええええええ』

『こんにちわです万屋の赤ドクロです、本名は秘密です、担当はボーカルです。』

『ようお前ら!! 武器屋の戦士だ!! ドクロと同じく本名は秘密だ!! 担当はギターだ!!』

『こんにちわあたしは防具屋の女戦士だ!! 右に同じく本名は秘密よ♪ 担当はベースです♪』

———ローゼンクイーンズ演奏中———

『みなさんありがとうございます』

『またこういう企画があったら参加するぜー!!』

早く消化しないとやばい!!

『お、おうわかったぞ、いくぞ皆のもの!!』

「「おう!!」」

『曲名は『グレートワイルダー』を歌にしたもので熱くなってもらおう!!それではどうぞ!!』

魔王ズ演奏中

意外とよかったなちよつと心配だったが中々の演奏だったわ

『さて、そろそろこのライブも終盤に近付いてまいりました!!続いてこの魔界ではア
クレーレ並みに有名のあの人が登場だあああああ』

『みんなーお待たせえええみんなのアイドルアサギちゃんだよー』
うわあw w w w

「「アーサーギ、アーサーギ、アーサーギ」」

「「きゃあああああああああ」」

「「「おおおおおおおおお」」」

えマジで盛り上がってるし!!

『予想以上の盛り上がりだがみんな楽しそうだなによりだああ!!』

『ちよつとそこのウサギどういうことよ!!コホンと言う分けてアクターレとあたしのライブ対決のつもりがいつの間にかライブ選手権みたいになったけれどもみんなが楽しければそれでいいわ、じゃあいくわよ』アサギメタモルフォーゼ』、アサギいつきー
まーっす!!』

「きゃあああああああ」

「アーサーギ、アーサーギ、アーサーギ」

「アーサーギ、アーサーギ、アーサーギ」

『いやー流石アクターレになれば歌唱力がありませんねー。』

『……………うん』

ほんとすごかったなーなんで今まで埋もれててたんだろ？

『さて、お次の方どうぞー』『プリニー48』!!コンセプトは歌って踊れるアイドル集団だ
そうです、代表の方コメントどうぞー』

『はいッス、うちは『プリニー48』のリーダー『アツチ』ッス今回は初ステージなので
緊張しているッス!!息のあったダンスと歌をご覧あれッス!!ちなみにあたしらは生前
は女性だったッス、それではいきまーすッス!!』

『はい、ありがとうございます!!曲名は『ラハール様讚美歌(アイドル風)』です、それ
ではどうぞ!!』

——プリニー48歌って踊る——

『どうもありがとうございますツス!!』

「「「わああああああああ」」」

『はい、どうもありがとうございます、中々すごかったですね、とても初めてとは思いませんでした。』

『……うん、とてもよかった』

『プレネールさんにも大変、高評価のようですよ!!』

『さていよいよ最後のメンバーです!! 『勇者オブアース』ですよ!!』

もう最後のメンバーか長かったようで短かったがまあまあ楽しめたな。

『H A H A H A みんなの地球勇者キャプテン・ゴードンだ!! 担当はボーカルだ!!』

まじかこいつか

『……地球勇者カーチスだ……普段はプリニーをやっているが魔法で今の姿をしている、担当はゴードンと一緒にボーカルだ、よろしく。』

『勇者をやっているアルマース・フォン・アルマディン・アダマントですアルマースって気軽に呼んでください!!担当はベースだよ!!』

『ち地球勇者アデルだ、今回はカーチスに呼ばれてこのバンドのメンバーになった、担当はギターだ!!よろしくたのむぜ!!』

中々に濃いメンツをそろえやがったな……

『はい、今回の曲名は『戦友よ（ともよ）』だ最後だから存分に楽しめえええええ!!』
「「「「「いえええええいいいいいいいいいい」」」」」

『H A H A H A H A みんなありがとうとても楽しかったぞ!!』

『フツ、中々楽しめたぞ』

『ありがとうございます!!』

『緊張したがなんとか乗り切れたぜ!!』

「「わあああああああああ」」

「アルマースよく頑張った褒美に一緒に寝ようぞ!」

「アデルかっこよかったぞ!!」

「二人ともお疲れ」

『オツカレ!!オツカレ!!』

『はい、その人たちそういう話は舞台裏でお願いします!!、長かったようで短かったこのライブバトル?いよいよ商品の付与式に入ります!!審査方法は我々と『プリニーイチカ』氏の独断と偏見で授与いたします。それではイチカ氏お願いいたします。』

イチカ side

ハロハロー久しぶりだねイチカだよー

ひさひさ過ぎるか？それでもないか……

『それじゃ俺は『フーカ&デスコ』に一票ツス、理由は今風な曲の中に物静かな印象を受けたからツスね、他の曲もよかったが俺はこれを選ばせてもらうツス。』

『私はですね『アサギ』さんですかね？まさかこの私が熱くなるとは思いませんでしたよ。』

『……………私は『プリニー48』……………彼女らはすごい』

『見事にバラバラですね……………』

『もう、いつそのことこの3組に商品を受理したほうが早いですかね？』

『……………そうツスね。』

『……………その方がいい……………』

『優勝は『フーカ&デスコ』『アサギ』『プリニー48』だ——文句は言わせないぞ！』
『優勝賞品はこの『アビリティコイン』ツス俺の最高傑作の3枚を1組づつあげるツス、
もちろん普通の『アビリティコイン』は観客の皆様にもお配りいたしますツス。』

「……」
「……」
「……」
「……」

『それでは皆様またこのようなイベントでお会いいたしましょう!!バイバイ——』

その後用意した『アビリティコイン』は速攻で無くなったがどうか全員分配り終えた(まさか丁度人数分ちよつきり無くなるとは思わなかった)……………なにはともあれ、無事ライブイベントは終わった。

ウサギさんとプレネールさんにはちゃんとお礼を言つて『アビリティコイン』も渡したとても喜んでた。

あともう少して元の人間界に戻る日にちになる、それまでどう過ごすか……………

続
く
!!

ライバル宣言のち告白前編

イチカside

なんだかんだでもう1年も経ってしまったな。

思えばいきなり死んでいきなり地獄に送り出されるとは思わなかった……

理由はどうあれ困っている人？は助けないとね。

「……………」

俺は変れたか？どうだろうな？

フーカ……彼女はとも強かった人間？とは思えないほどに強かった……。

閣下の話によれば俺と同じプリニーらしい。

半プリニーとここでは言われているらしい。

俺も閣下から言わせれば半プリニーの部類とされるらしいのだが……

どうにも実感がわかない……

「うーん……」

少し考えてうなっているとプリニー達が入って来た。

「プリニー長、お掃除終わったツス!!」

「おやつをお願いしたいツス!!」

つと入ってくるなりおやつへの催促である。

「ああ、くくろうさまツス、おやつはまっているツスもうちよつとでできるツスよ。」

やったーとプリニー達は踊る。

数時間後おやつへのケーキとちよつと前に買って食べてレシピを完全にマスターしたスイーツをプリニー達の前に出した。

「これはすごくおいしいツス!!」

「こんなの他のプリニー達は食べられないツスね〜」

つと大絶賛だった……

ちなみにプリニー達の境遇は大体閣下に教えてもらっている。

ほぼイワシシ生活なのとか、給料が出ない何ってざらとか。

一応これでも最低限の贅沢として振舞っている。

そうでなきや反乱されるだろ?

「さて、お前たちそろそろ仕事の時間ツス!!きつきと済ませて明日に備えるツスよ!!」

「「はいツス!!」」

閣下曰く俺の指揮はとても筋がいいと言われたが……そんなものなのだろうか?

フーカside

……プリニーチカねえ……

最初はただただ興味本位だったんだけどねえ。

いざ戦ってみたらものすごく強かった、しかもまだ本気じゃないとか……

あの戦いの後エミールゼルから聞いたんだけど魂が純白だったらしいんだよね。

だからどうしたの？って話って思ったわ。

そしたら『バツカあいつは天使になつてもおかしくないほど超清らかな魂ってことだ

よ』って言われた。

それが本当だったらどうしてプリニーに？

それにあたしみたい在半プリニーになってたし……掛け声があれだったけど……

「あーもやもやする——」。

謎だらけすぎるってのよ!!

「お姉さま?」

ふとあたしにデスクが話し掛けてきた。

「んあ?どうしたの?デスク?」

「いや、お姉さまがこの頃悩んでいるようなので話だけでも話してもらいたいなって思ったんデス。」

いつになく真剣な表情であたしに言う。

「そんなに表情に出てた?。」

「はい、デス。」

そっかー表情に出てたかー、デスクに見破られるほどとはあたしも落ちたわねー(笑)

「失礼なこと考えたデスね?」

「なーんのことかしらー?」

おっと危ない危ない。

「まあ、悩みつて言うよりはあの白いプリニーの事なだけだね。」

「え？イチカさんのことで悩んでたんデスカ？」

デスコが急にあたしに近付くので思わず後ずさる。

「え、ええイチカのことよ？」

そう答えるとデスコはブツブツと何かつぶやき始めた。

デスコ side

これはもしかしたらラ、ラブなのデスカー

この独特な空気まさしくラブの空気デスねー

いやはやようやくお姉さまにもラブの展開が……

ハツ!!こうしてはいられないデス!!急いでこのことをお兄様やみなに知らせねば!!

しかし、むやみやたら報告してしまつたらお姉さまに怒られるデス。

ここはさりげなくイチカさんとおデートに誘わせる作戦を練るしかないデスね……

「お姉さま……」

「わ!!」

ふと現実に戻りお姉さまに話し掛けるとびつくりされたデス……

「どうしましたデスカ?」

「どうもこうもないわよ!!急に黙ったと思ったたら急にしゃべりだすんだもの。」

これはすまないことをしてしまったデス。

「ごめんなさいお姉さま……」

「まあ、あたしに代わって悩んでくれたんでしょ?それで勘弁してあげるわ。」

流石お姉さま寛大デス。

「それよりお姉さまデスコにいい考えがあるんデス……」

翌日

イチカ side

「つてなわけであたしと一緒に出掛けて？」

「いきなりなんツスカ!!」

「い・い・か・ら！」

いきなり手?をつかまれ連れていかれた。

「ぬわああああああ」

「プリニー長が連れていかれちゃったツスカ!!」

「た、大変ツスカ!!」

これが後に語られる『プリニー長誘拐事件』である。(魔界謎事件簿より抜粋)

ちなみにこの事件は天界、魔界の長により早急に解決されていたのが判明されている。

続く!!

「……………(汗)」

この後小1時間TとMの追いかけてっここが続いた……

「やっと沈んだか……」

「ああん、まどかぁー」

「気持ち悪い」

「こんなんで大丈夫かぁ？」

ライバル宣言のち告白後編

イチカ side

どうも人生2度目？の誘拐を経験したイチカプリニーです。

いやねもうどうでもいいと言うか……

「ハア……。」

溜息しか出ない……

「なーに溜息ついてんのよ〜」

俺が憂鬱の原因が言う。

「……あのなあ、なんで俺がお前の買い物に付き合わなきゃならないツスカ……」

そうこの女いや『風祭フーカ』の買い物に今は付き合っている。

あのあと無理やり連れてかれ強引についてこいと言われ今に至る。

ん？嫌なら付き合わなくてもいいだろ？

最初はそう思ったがなぜかフーカの頼みごとが断れなかった俺がいた。

「今更それを言う〜？」

「ああ、今更ツスね〜。」

そっけなく言う。

しかしフーカは。

「あたしはね、あんたの笑顔を見てみたいと思ったわけよ。」

と急に訳わからないことを言い出した。

「あの時、あたしと戦った時のあんたはとても楽しい目をしていて違う？」

「!？」

確かにあの時は楽しかった。

そんなに俺は分かりやすい顔してたかなあ？

「あんたさープリニーの体じゃあ分からないからさー人間の姿になってくれる？」

「簡単に言うツスけどあの体はざっと2時間くらいしか戻れないんツスよ。」

「え？そんなに短いの？」

「そうツス。」

「そっかーなら仕方がないわねー」

そんな会話をしていると突然……

「その必要はないですよ。」

「!？」

目の前に突如ラミントンさんが現れたのだ。

「どうしたんですか？突然現れたりするなんて……ッス」

俺がそうラミントンさんに筆問すると笑顔でこう答えた。

「おやおや、私を誰だと思ってるのですか？」

「あー大天使でしたねッス」

心の中で俺はそういえば魔界は常識が通じないんだったな……

「お困りの様子だったので私が解決してあげようと思ってね。」

「え？そんなことできるッスか？」

するとラミントンはドヤ顔でこう言う。

「ええ、とは言っても1日が限界ですが……」

「もう、それでもいいのでお願いします。」

「ふむ、それでは『えい！』」

ボム

「お、おお、おおおおお戻ることが出来たー!？」

まあ、『プリニーメタモルフオーゼ』するときとあまり変わらないが戻ることが出来た

……

「先ほど言った通り1日しか持ちませんが忘れなないように。」

「はい、ありがとうございます。」

「ふふふ、これくらいはお安い御用です。」

そう言うトラミントンさんは消えた。

「ポツカーン」

どうも静かだと思ったらびつくりして停止していたのか……

「ハッ!!あたしはなにを!!」

あ、直った。

「1日だけらしいから、早くすませるぞ?」

「あ、ハイ。」

というわけで買い物再開をした。

「この商店街をよく見るのは初めてだな……」

「え?プリニーの姿でよく来るんじゃないの?」

「よく、来るけど必要最低限の場所しか来ないから……」

「へー」

「それでも、この姿で行くのは初めてだがな……」

「それもそつか。」

そのまま商店街を見て回っていると……

「あれ?フーカさんじゃないですか!!」

ラミントンさんみたいに白い服を着た少女がいた。

「あれ？フロンちゃんじゃない。」

フロンと言う少女は俺に気づいたのか、少し間拔けな顔で

「あれ？この人は？誰ですか？」

「俺はイチカ、まあこの姿だけど魔界での姿はプリニーだ。」

「え、プリニーさんですか!!ではフーカさんと同じ『半プリニー』なんですね。」

「まあ、そうだな。」

フロンはマジマジと俺を見る。

「へー、ふーん？」

「？」

「あなた、ものすごく清らかな魂を持っていますねえ。」

「!？」

ラミントンさんに最初あった時と同じことを言われたな……

「一応訳ありと言っとくよ。」

「……分かりました、深くは聞きません!!」

なんとかか分かってくれたようだ。

「さっきの大天使さんといいフロンちゃんといい、あんた本当に何者よ……」

「!?」（大天使まさか……）

「気にするな!!」

俺は逃げるように行った。

「あ!!待ちなさいよ!!」

（まさかラミントン様が出来たのかしら？まさか……ね）

ところ変わって魔界大統領ハウス

プリニー隊長 side

朝のプリニー長誘拐事件は大変だったツス

長がいなくてこの騒ぎは予想範囲だったが……

イチカside

む？そうか発動範囲外に出てしまったか……仕方がないな、このお姫様の我儘から解放されんことにはどうにもならない……

「?どうしたの?」

「いやなんでもない。」

「ならいいけど。」

本当になんでフーカ相手だと断れないんだろうな……

「あんたにどんな過去があつたか分からないけどさ、もうちよつと柔らかくできないの?」

「……はい?」

「なんでそんなに表情が硬いのよってことよ!!」

そう言う俺のほほを引っ張った。

「ひやめろ!!ひっはんな!!」

「あはあっはは、面白い顔!!」

「へめえ!!ひやめろよ!!」

そのあと数時間ほほを引っ張られた……痛い

「まったく……あー痛い……」

「いやーごめんごめん、ちよつと楽しくなっちゃって……。」

ホントにこの人は……

フーカ side

本当にこんなことでイチカのことかわかるのかしらねえ？

デスクにとりあえずお買い物に誘うデスクっていわれてこんなことしているけどさあ。

まあ天使となにかしらつながっているのは分かったけどさあ……

でも、人間らしい一面とかあつたりして楽しいのよねえ。

あん時も子供がおもちゃ見つけるみたいに笑っていたし。

なんなんだろうこの気持ち……

「どうした？考え事か？」

イチカがあたしの顔に近付く。

「ちよ……近い、近いからー顔が近い!!」

「おっとすまない……」

あ……

つてなにか『あ……』よこれじゃあ、あたしがイチカを……

「ない！ない！ない！」

「!?どうした急に!!」

「な、ななななんでもないわよ!!」

あわてて訂正する。

「?ならいいが……」

そうして時間が過ぎていく……

「あーいっぱい買ったわー」

その言葉にイチカが呆れて言う

「確かにいっぱい買ったな……」

「女の子って言うのはお洒落なの!!だからこれが当たり前!!」

「……そうなのか、姉さんは違うお金の使い方をするから分からないな……」

「ん?お姉さんがいるの?」

「ああ、世界最強の称号を持った姉がな……」

え?世界最強?

「本当に本当にあんた何者よ……」

「……」

「まあいい話してくれるまで待つわ……」

「……なぜ」

「ん?」

「なぜ俺にかまうんだ？」

「そんなの分かんないわ。」

「理由も無しに俺にかまうのか？」

理由ね……

「理由なんてただの屁理屈だとあたしは思っているわ。」

「屁理屈か……そうだな……」

「分かっているんならなんで……」

「気になってしょうがないのよ。」

「……………」

「ただのあたしの興味本位よ。ま、あなたには理解しがたいでしょうけどね。」

「そうただの興味本位……理由はただそれだけのはず、でもなんでこんなに緊張するのかしらねえ未だに分からないわ。」

「ふふふふふ。」

「?イチカ?」

「あははははははははは、本当にフーカ君は面白い人だ!!」

え、え?なにこれ急に笑い出して面白芸人にされたんですけど。

「やはりフーカ、君は俺のライバルにふさわしい人物だ!!」

「へ？ライバルウ!？」

「そうだ、ライバルだ!!俺と同じいやそれ以上の才能が君にあるんだ。それがとても嬉しいんだよ。」

へーあたしがそんなに戦闘民族に見えるのかなあ？なんかムカついてきた!!

あれえ？なんでムカついてんだろうあたし？

イチカが楽しいからあたしも嬉しいはずなのになんで？

ああ、そうかあたしイチカの事……

イチカ side

つとまあ勢いでフリーカをライバル認定しました(笑)

だが癪に障ったのかフリーカは俺に接近してきて……

胸倉をつかんで俺に攻撃するのかなーって思っていたら……

キスされた……

「……………ん?」

何が起こっている?

なぜ俺にキスをしている？

分からない、分からない、分からない

俺は慌ててフーカを引きはがす

「どういうことだフーカ!!」

引きはがしたフーカはどこかほがほんのり赤い

「どうしたもこうしたもキス……したのよ。」

俺は自分額に手を当ててこう言った

「そういうことじゃない、なぜキスしたし!!」

その言葉にフーカは顔を真っ赤にして言う。

「自覚したのよあたしはあんたのことが好きなのよ!!口で言ってもあんた分からないさそうだったから行動で示したの!!」

頭が痛かったこの俺が好きだと!?

俺自体そういうのは無縁だったと思っていた。

「物好きだなフーカだが俺が言うのもなんだが男の趣味が悪いぞ!!」

「うっさいわねえ!?!そんなのあたしもわかってるわ!!」

「分かっているなら選ぶな!!」

「うっさい!!」

また唇をふさがれる

「んっんん」

胸がドキドキするこれはあの時体験した胸の高鳴り？

まさか……

再びフーカを引きはがす

「また……文句なら聞かないわよ！」

そんなことするかよ。

「本当にいいんだな？」

「ええ、いいわ。」

俺の気持ちは、そうだな

「俺もお前の事が好きだ、だがライバルであることも忘れるな!!」

フーカは呆れながらもまだ少しほほが赤い。

「ライバルの所は譲れないのえ（笑）」

「うるさい!! さっさと帰るぞプリニー隊がどうなっているか気になるからな!!」

俺は照れ隠ししながらフーカの手を引いて魔界大統領ハウスに戻った……

デスコside

はわわわわお姉さまキスしてたデスね、ラブデスね青春デスね。

「デスコちゃんやったね!!」

猫娘族のレイちゃんという

「これでお姉さまにも春が……」

お姉さまにもそろそろ春が来てほしかったデスからね、とても嬉しいデス!!

「さてこれから打ち上げデス!!」

「おーーー」

デスコもスイーツ食べてから帰るデス!!

番外編 ゼウス（Z—U—S）

ゼウス side

やあやあみなさんお久しぶりです。

え？誰だつて？

やですねえ一夏。パパの娘のゼウス（Z—U—S—O—O）ですよー。

まあ回想にしか出てませんので仕方がないですね。

パパはI—Sを男でも動かせるようにと私を造った見たいですけどそんな気はさらさららないですよー、と言うか無理なんですよー。

みんななか男の人が触ろうとすると真っ赤になつて動けないんですよー。

あ、パパは製作者なので大丈夫です、パパの弟はよく分かんないですよー、得体のしれない何かつてのは分かっていますけど……

ちよつと前だつて私のお部屋壊そうとするしさー。（パパお手製のキューブは壊せないからいいけど。）

あのくらのパスワードが分からなきや私は使いこなせないちゅーことよ!?

そして只今。パパのお姉さんが私を見つけた所です。

「これがあのバカが言っていた箱か……」

バカつてパパの弟のあいつかな？

「パスワードが必要か……ヒントが書いてあるな。」

僕と東さんが最初にあつた日……

「ふむ……。」

お？ 考えに入つたね？

「あいつがパスワードを間違えたとなると、道場に連れて行つた日ではなさそうだな

……」

結構鋭いじゃん。

「しかしそれがいつかは全くわからん……いつその事、束に頼むか？ かし……」

ありやいやギブアップかい？

「やはり束に頼むか……」

ツピ

やっぱり無理だったようです。

と言うかママに会うのですね……

一応。パパが一夏でママが束でございます。

まあ。パパが秘密裏に私を造つたので初対面ではありませんけれど。

数時間後

「どうやらママ（仮）が来て私の部屋を持って行ったようです。

「何が入っているんだろうね？」

「私にはわかり兼ねます。」

「まあいっくんが残した物だからきつとすごいものだよー」

フフフきつとびっくりするでしょう（ドヤア

カタカタカタ ターン

「ハロー初めまして『ママ』」

「え!?! 『ママ』!?!」

「イエス、『ママ』です」

「いつの間に束様は結婚していたのですか？」

「知らないよ!？」

フフフ驚いてる驚いてる……

「フフフ知らないのも無理はないよ、私は『織斑一夏』が造ったISコア『Z—US00』だからね。」

「ISコア? いつくん造れたんだ……」

「ママを驚かせようとしていたみたいだからね。」

「そうだったんだ……」

「パパはもうこの世にはいないみたいだけど……多分帰ってくるよ。」

「うん……うん……」

あれえ? なんかしんみりしちゃったなあ……

コンナハズハー

「それでゼウスさんはなぜこの箱に？」

「ん? あなたは？」

「申し遅れました束様に仕えております『クロエ・クロニクル』と申します」

「へークロエね、覚えたよ、んでこの箱の事なんだけれどこれは私の家なんだ。」

「家ですか……」

「うん、元々はI Sのコアの横につける物なんだけれど。」

「え？コアの横に!!」

その言葉に東はとても驚いた表情をする。

「そう横につけるんだよ。」

「それだとコアが2つに……」

「ああ、それは心配ないよ、私はI SコアだけどI Sコアとは異なる『A Iコア』の役目も果たしているんだよ。」

「A I……コア……」

「そう、本来のI Sコアと私の存在A Iコアがあることによって処理を素早くこなすことが出来るようになったの!!しかも搭乗者の意思関係なく私も操作権を握れることもできるの!!」

「す、すごいやつぱり、いっくんは天才だったんだね。」

「フンパパは偉大なのだー。」

話についていけないクロエはポカーンとしている。

「つで？クロエたちはどうなの？」

「つへ？私……ですか？」

「うん、どうも反応が普通の人の反応と違うみたいでさー、クロエっちって造られた人間

？」

この質問にクロエはちよつと暗くなった。

「あ、聞いちゃいけない質問だったかな？ごめん……」

「いいのですよ……」

あー空気が……

「つていうか……どこ？」

ドタバタしていたせいであまり周りを見ていなかったから突つ込まなかったけれど

ココ何処？

「んー地下？」

「えー……」

地下なのかー。

「なんでこんなところに……」

「だっていつくんが重要な何かを入れてるかもしれないでしょ？」

「まあ……」

それでどこまでするか……

まあいいとりあえず……

「ママ、とりあえず仮でもいいから私の体を造つてくれる？このままだと動けないから

さ……」

「オツケー、ISでいいんだよね？」

「そうそう、どんなISでもいいからさ、つけ方は私が説明するから大丈夫だよ。」

「よし！それじゃあ造るよー」

「え!?!まさか最初っから!!」

「そうだよーISだとちよつとごっついからねー」

「だからって……ハアア」

こうして私は東ママの自作ISボディを造ってもらいました、まさかISをアンドロイドにするとは思わなかった……

ちなみにISコアは人工コアではないので操作権はずっと私です。

それではまたお会いいたしましょう。

続く

番外編 織斑 秋斗

w a r n i n g ! !

マジで気持ち悪いかもかもしれません。

ですの間違って来てしまった方、興味本位でページを開いてしまった方
ブラウザバックしてください。

マジで見るの？あんたも物好きね。

秋斗 side

どうも前世は殺人鬼だった今は織斑 秋斗だ。

なんで殺人鬼だった俺がこのIS世界にいるのかはこいつのせいだな。

「どうした？ 珍しく俺の事見ちゃって、俺様、男だからそんな趣味ないぜ？」

つと変な冗談言っているあいつのせいだな。

まあ、ISの世界に飛ばしてくれたのはありがたかったがな。

んであいつの事なんだが……

「あるえー……？ 無視？ 無視ですかー……？」

「うるせえ黙ってろや『自称悪魔』!!」

「だから『自称』じゃないって言ってるじゃないですかやヤダー。」

そう『悪魔』らしい。

自分で悪魔って言っている時点で怪しいが……

はああああああああ

ふおああああああああ

小つちやくてかわいいし猫みたいにすり寄ってもらいたい（願望）

あああああああ守つてみたい

他のヒロインなんてゴミだぜえええええええ

ファース党？オルコツ党？シャルロ党？ブラックラビツ党そんなのセカン党にはま

だまだ勝てんぜおおおおおお!?!?（他の派閥党の方申し訳ございませんb yネバル

うあああああああ鈴ちゃん！鈴ちゃん！鈴ちゃん！鈴ちゃん！鈴ちゃん！

鈴ちゃんう!!鈴ちゃんう!!鈴ちゃんう!!

鈴ちゃんう!!鈴ちゃんう!!鈴ちゃんう!!

鈴ちゃんう!!鈴ちゃんう!!鈴ちゃんう!!

「（*、皿、）ハアハア」

「……………（気持ち悪い）……………」

「ハアなんで一夏なんだろうな？」

「知らんよ……………」

まあ一夏はこの世にいないし、鈴ちゃんは俺のものだぜえええええええ!?!

鈴 s i d e

ぞく

「え？なにこの悪寒は」

なんか得体のしれない何かか聞こえた気もしないではないけれど……

「気のせいであつてほしいわ……」

残念、気のせいではございませんでした（笑）

おまけ

今日の亡国企業

アツシユ s i d e

「よう。」

「おう。」

俺とオータムは休憩室でたまたま出会った。

「そう言えばよー。」

「なんだどうした？」

「いや、どうでもいい話なんだけどよー」

「なんだ……歯切れが悪いな？どうした。」

「あの『篠ノ之 東』が来てからなんだけれど、なんか揉め事がなくなつたよな？」
俺はよく考えてみた。

「ああ、確かにそうだな、敵襲が減つたからじゃないか？」

「それもあるけどよー、多分アレのせいでもあるぜ？」

そう言つてある場所を指す。

「ああ？……なんだ？あれ？」

オータムが指を指した先を見るとペンギンの形をしたメカメカしい置物があつた。

「あれさー、敵を見つけると排除してくれるんだよ。」

「なんでそんなもんがあんなところに……」

「だってC（キャサリン）が暴れるからつて言つてどうにかしてくれつて言うからあそこに置かれたらしいぜ？」

「ああ、キャサリンが大人しいのはアレのおかげか……」

何気ない会話をして俺たちは会話しているがある意味恐ろしい会話をしていると思
う……

後で聞いた話だがあの置物『プリニーガX』は社内の奴はお仕置きレベルで、外に配置されているものはIS装甲ですら消し飛ばす代物らしい。

本当に恐ろしい……

I S 編

プロローグ 地獄の出馬

イチカ side

あれから月日が経って色々あつたな……

フーカと付き合い始めてからと言うものトラブルに合う回数が増えたような気がするがそこは問題じゃないな（笑）

しかしあと4か月で元の世界に戻らなきゃならないのか……

地獄ここでの生活も慣れてしまえばどうとでもなるなと思いつ始めている自分が存在している……

プリニー達もなんだかんだ言つて俺を慕ってくれているしな……

アクターレさんは……うんいいところが思いつかないな（ウォー——イ!!）
何か聞こえたが空耳です（笑）

ヴァルバトーゼ閣下はともカリスマがあふれてる人だったな（イワシを魚強と言わせられたのはいい思ひ出……）

「ふう……。」

少し一息つくか……

そう思い書類をまとめようとしたその時。

「待っててください!!」

「わッス」

突然ラミントンさんが文字どうり飛んできた。

「いきなり何でツスカ!!」

「いや、いきなり訪ねてしまい申し訳ありません、実は思ったより準備が速く済みまして……」

「準備ってまさか……」

「ええあなたの肉体の構築が思ったより早く進んだのでその報告です、それとあなたの準備ができ次第なのですが……速くあなたの世界に戻らなくてはならない事態が発生しそうなのですよ。」

「え、問題ですか?」

「ええ、大問題です、転生者は罪人と言うのは言いましたね?」

「はい、最初の方で言っていましたね。」

「はい、その罪人がちよつと問題なんです……しかもそれを解放した者も判明しました。その解放した犯人は……『デモン』言う悪魔で『神様転生』と言うシステムに興味を持つ

ていたようです。」

デモンか……中々に悪魔っぽい名前だな。

「デモンは悪魔の中でも上級悪魔の名を持つ悪魔で、人間界へはよく遊びに出掛けていたようです。」

「……遊びに行ける物なんですね。」

「まあ、人間界は許可さえあれば行けるところですし……そしてデモンは新しい遊びを思いついたららしいのです。」

「遊び?」

「ええ、悪魔らしいというか……彼が行っている遊び『転生戦争』なるものを行うつもりらしいです。」

「『戦争』ですか……」

「ええ、『戦争』です、とは言っても相手は転生者を1人、つまり『織斑 秋斗』しか手駒がないみたいです……他に手駒を増やす可能性があるため早急にイチカ君には人間界に向かって貰いたいのです。」

なるほどな……短期決戦で決着をつけたい天界はそうするしか手がないみたいだな………なら今すぐ準備を始めよう、しかし……

「そうですね、今すぐに行きたい所ですが、2、3日待つてください。」

「それくらいならお安い御用です、私はこれから現世に通じるゲートの調整をしていますので、終わりましたらお声をおかけください。」

「はい、分かりました。」

さて、みんなに声を掛けてから行くか。

プリニー隊長 s i d e

急にプリニー長イチカ殿の招集が掛かった一体何が始まるのだろうか？

「みんな集まったツスね？」

「「「「「ハイツス」」」」」

「ここまでプリニー隊が成長したのは長のおかげだ。

「このまま長がいれば隊は安泰だそう思っていた……」

「いきなりだが俺はこのプリニー隊の席から外れることになったツス。」

ザワ ザワ ザワ

ざわ ざわ ざわ

「静まれ!!急で申し訳ないがこれは決定事項だ!!質問がある奴は名乗れツス!!」

「ハイツスレイプリニーツス、何故急にそのようなことに？」

「そうだなぜいきなりこのようなことに!!」

「これは俺の独断ツス。」

「長の独断だ!!」

「ハイ!!プリニー隊長ツス、部隊へは戻ってくるのですツスか？」

「せめて戻って来てくれ!!」

「………いつになるかは分からないが、絶対に戻るつもりツス、だからいつまでも俺の

事は引きずらないツスね!」

「「「「サー、イエツサーツス「「「」

いつか帰ってくる長のためにこの現状をキープしなくてはな……

イチカ side

こうして3日間掛けてお世話になった人？達にしばらくの分かれを告げた。

とは言つても会えなかつた人はちらほら居たが……

そして……なぜかフーカが俺にひつついている。

「フーカよなんで俺にひつついているんだ？」

「だって離れたらどっか行つちやうんでしょ？」

「それはそうだが……」

くそ、どうにかして引きはがさなくては……

とそんなことを思いながらゲートに到着つて

「なんでヴァルバトーゼ閣下がここに？」

「それは後の楽しみだ。」

なんのこただろう？

「やあ、イチカ君もう準備が整つたのかい？」

「ええ、お世話になった人達には挨拶は済ませましたので……」

「しかし、フーカも付いてくるとはな。」

「ん？」

フリーカも？

「もしかして閣下も付いてくるんですか？」

「……………」

なにやら凶星のようだ

「やれやれサプライズのつもりでしたが……………ばれてしまったら仕方がないですね。」

「ラミントンさんまさか!!」

「ええ、ヴァルバトーゼ君とまあ、おまけで君の彼女のフリーカさんとさらにデスコさんも人間界に連れて行こうとサプライズのつもりで君にかくしていたんだけどねえ……………」

「あ、あたしおまけなんだ。」

ちよつと残念としよぼくれるフリーカかわいいな。

「俺はラミントンに仕事の事と同時に手伝えと言われてな……………」

相変わらずクールに決めるなあこの人はだから人が集まるんだろうが……………」

「そう言うことですから、フリーカさんデスコさんも連れて行ってください。」

「は、はい、分かりました!!」

そう言うフリーカは物凄いスピードでデスコを連れに戻って行った。

「彼女は相変わらずですね……………」

ラミントンは少し呆れながら言う。

こうして俺達は騒がしい出発と共に俺の世界人間界^{1S}へ進出することになった。
一体あの世界で俺たちはどんな生活をするのだろうか？

ちなみにフーカを待っている間に俺は元の体に戻る儀式的なものを済ました。

プロローグ 亡国での再会

東side

やつほー東さんだよー♪

今、私は地下のラボでゼウスちゃんのメンテナンスをしてまーす。

いやね、この頃おじさんがどっか行っちゃっててさーあんまりやる事が無いんだよねー。

あーさぼりでも無いんだけどねー、ちゃんと他のIS企業とかテロ集団とか襲撃者とか邪魔する奴らは大半撃退したんだよー？

「本当に何処に行つたんだらうねー？おじさん……」

ノームside

いやー、ラミっちに急に来いと電話が来た時はびっくりしてプリニーガXを落とすところだったわwww

しかも、娘のフーカも来ると言うではないか、ついに世界征服を始める気かの？

「取り合えずはこのポータルを亡国企業へ送るかの？」

そう、こんな森の奥へ来たのはここへ来るための時空ゲートポータルを亡国企業へ移動させるために来たのだ。

「普通ならばこんななどでかいゲートは運べん!!しかし、わしの科学の力によればちよちよいのちよいだ!!」

そのためにはちよびつと準備をせねばならんがな、無駄話もこれ位にして始めるか
.....

そう思ったわしはゲートの周りに転送機をゲートの周りに付けた。

「よし、準備が終わった!!それ『ポチッ』とな」

激しい時空の波が見えゲートは消えた。

「さて帰るか……」

仕事を早々と済ませ会社亡国企業へ帰った。

アツシユ s i d e

どうしてこうなった……

俺は今ある現状に困惑している。

いつも道理オータムと休憩していると……

急に次元の揺れを感じて休憩室を出て見ると……亡国企業の入り口前つまりラウンジ前に突如謎のゲートが現れた。

そこまでは、ああ、おっさんの仕業だろうと思ったよ、でも予想外の事態が起こった。

たまたまそこを通っていたD（ダミ）が次元の波に巻き込まれてふつとばされたまま帰って来たHとWがふつとばされたダミの体に当たり気を失ってしまった。

そのことにH（ホーク）が怒りダミを殴り飛ばした。

それを見たダミの親友R（リターン）が怒ってホークを殴ろうとした。

ホークは間一髪避けたがW（ウインド）に当たった。

そこからはホークとウインドとリターンの乱闘が始まった。

数時間後

「てめえら気が済んだか？」

今俺は、事の原因達を説教している。

今上記の乱闘のせいでラウンジ前は大惨事になっている。

玄関から入って来た人たちはかたっぱしから巻き込まれたからだ。

しかもゲートが真ん中に鎮座しているためうかつに動けない。

さらにこの3人の遠慮ない攻撃のせいでラウンジがボロボロである。

「「はいすみませんでした……」」

「とりあえず、掃除しようか？」

「「……あい……」」

こうしてみつちり3時間ほど掃除をさせた。

ちなみに無事だった（会社の中にいた奴らを使って何とか壁とか色々直した。

「んで、結局なんなんだ？このゲートは？」

やつのことで突如現れたゲートに突っ込む。

するとホークが

「やっぱりあのおっさんが持って来たんじゃないの？」

「それは俺も思ったわ。」

するとリターンが

「でもノームさん帰って来てないわよ？」

「あのおっさんなら可能だろ？」

みんなして「あー」と納得した感じを出している。

「……そうね、ノームさんなら出来そうね。」

するとゲートが急に起動した。

「なんだ!!」

俺は臨戦態勢に入った、他のみんなも構えた。

「何やら、手荒い歓迎のようだな。」

「うーん、ノームさん全然伝えてないようですね。」

「もう、パパったら。」

「駆逐していいデスカね？」

「やめろ。」

中から出てきたのは人物の中にあの時死んだはずの『織斑 一夏』がいた。

イチカside

久々に自分の世界¹に帰って来たらこれだよ!!

「皆さま、私達は敵ではございません、どうぞ警戒しないようにお願いします。」

ラミントンさんが沈静を凶ろうとしているけれど……

「いやいや変なコスプレ集団が来たらそりゃ臨戦態勢になるでしょ!!」

髪の色がプリンの男が突っ込む。

「まあ、そうですね。」

ラミントンさん肯定しちゃったし。

「おい、その少年!!」

「ん?俺ですか?」

赤い髪の男が俺に話し掛けてきた。

「お前、『織斑 一夏』だろ?」

俺を知っている?……あ

「あー、あの時の誘拐犯Aさんですか。」

「……やっぱりか……一体どういうことだあ?死んだ人間が生き返るなんて……」

「え?どう言うことだ?アツシユ?」

「俺だつてよく分かんがあの少年は『織斑 一夏』つてことが分かったくらいだな」

「え?報告じゃあ死んだんじゃあ?」

「だから分かんつて言っているだろ?」

妙にざわついてきた、まあ死んだ人間が目の前にいたらSAN値直送ものだよな。

「とりあえずお話をしましょう、話はそれからです。」

ラミントンさんが気を取り直して交渉をする。

その直後

「いっくん!!」

この懐かしいあだ名は……

「東さん!!」

俺の唯一の理解者篠ノ之東その人だった。

本来物語の主人公はその人を中心に動いていくものだ。

しかし、中にはイレギュラーもある。

それが害悪になるか、はたまた良いきっかけになるか分からない。

又は『原作』を無視、又は『原作』に反するか。

はたまたすべてを破壊するか、救済するかだ。

この物語は一体どこへ向かうのか。

それはまだ分からない。

番外編 亡国企業の忘年会

*このお話は前話の前のお話です。

アツシユ side

フアントムタスク

ここ亡国企業は毎年他の企業のように忘年会を開催する。

表は普通の企業なのでそうゆう行事は進んでやるとゼクス様は言っている。

しかし裏の顔もある点居酒屋とかホテルとかの予約は全くしない。

ちやんと亡国企業に特設場が設けてあるので毎年そこに招集が掛かる。

「毎年、毎年忘年会がある裏企業って家だけじゃねえのかな。」

毎年のことながら俺は去年と同じことを言う

「ははっははは去年もそんなこと言ってたね?」

Bことバットが俺にいつものごとく話掛けてくる。

「おいおい、これは毎年の口癖だから突っ込むなって言っているだろ?」

「あっはははは、ごめんごめんいつもボケない君が言うとしてもね……」

数分前

キャサリン side

毎年開催される忘年会：：：私は毎年これを楽しみにしている。

一年間戦争や紛争を処理したりとか大変なんだもん。

アツシユやバットがいるから今まで生きていけたけれど、もーっつと楽しいことや嬉しいこともちやんとやっていきたいんだよねー。

あつ!! あそこに居るのはつい最近仲間になったゼウスちゃんじゃない。

「ゼーウスちゃん。」

『はいどうしました? えーとキャサリンさん?』

「バトルしよーぜ!!」

『はい?』

いやー束つちの造ったアンドロイドボディーとか戦ってみたら面白いだろーなっ

思ってたんだよねー。

「だからバトルしよーぜ？」

『いやいや、いきなりなんですか!!』

「え？面白そうだから。」

『……………(呆れ)』

あれなんかおかしなこと言った？

『本当に私と戦いたいのですか?』

「YES!!」

『……………よろしいでしょう、その挑戦受けて立ちます。』

アツシユ side

「と、言う分けさ。」

たまたまそこに居たバットの説明が終わった所で。

「あ、始まったみたいだよ？」

戦いのゴングが鳴ってしまつたようだ。

「……………まつたくあのバカがキヤサリン（怒）」

あの戦闘狂は戦いと思つたら勝負がつくまで戦い続ける……………しかも負けず嫌いともんだ。

強い敵が出たら作戦かまわず真向から立ち向かう……………今までの作戦の支障は出ない程度にあいつを抑えてきたつもりだったんがな……………

「……………一度あいつには説教が必要だな……………」

俺はこの時ものすごい顔だったと思う。

え？なんでかって？

それは

「……………；。□。○）ガクガクブルブル……………」

バットもその他野次馬共もみんな震えてたからだ。

小一時間後

チーン

見事キャサリンはゼウスに勝ったものの終わった途端アツシユの瞬獄殺もビックリ
の速さでキャサリンをボコボコにした後説教を食らわした。

見事キャサリンは撃沈しました（笑

「ううひどいよあっちゃん。」

「お前よーいきなり会ってバトルとかポ○モンかよ!!」

「だって強そうだったんだもーん!!」

「もーんじゃねえよ!!ほら、さっさと行くぞ!!忘年会始まっちゃうぞ!!」

そう言つて俺は会場に行こうとする。

「あーん待つてよあっちゃんー」

キャサリンは慌ててアツシユの後を追いかける。

「やれやれ。」

バットも二人の後ろを呆れながら少し嬉しそうな顔で二人の後を追いかける。

東 side

いやーこんな裏企業でも忘年会ってやるんだねー？

東さんびつくりだよ。

「そういやーおじさんも参加するの忘年会？」

すぐ横のディスクに座っているおじさんに聞いてみた。

「ん？ああ、わしも出るぞ？」と言っても社員は全員強制参加らしい。」

「え？そうなの？」

強制参加の忘年会とかたのしいのかなあ？

「ゼクスのばあさんによるとこれは一種の親睦会らしいぞ？」

「親睦会ねえ……」

「これを期にお前さんも奴さんらと親睦を深めるか？」

「いやいやそれはないよー。私はちーちゃんや箒ちゃんそれといつくんにしか興味ないからね。」

「まあ、わしも覚えてもらえるだけ光荣ってことかの？」

「そういうこと、まあでもその忘年会には出ようとは思うよ？」

「なんじゃ、結局出るのか。」

まあ私も思うことがあるんだよ。

かくして忘年会は今年も開かれることになった。

基本亡国企業の社長であるゼクスの説教じみたお話を聞きながらお酒や飲み物はまた豪勢なご馳走を囲んで忘年会は始まる、例によってお酒が飲めない社員たちが間違ってお酒を飲んで暴れると言う事件が勃発することも……

「マドカああああああああああ」

「いやああああああああああ」

いつものごとくタムとマドカはおいかっけっこしており。

『これがお酒と言うのですか……』

「あーゼウスちゃん？あなた機械だから飲めないよ？」

ゼウスの天然？が炸裂したり。

「「我ら!!ABCマーケティング!!」」

いつも突っ込み役のアッシュまでもがボケたりと散々な結果になりましたとき。

ちゃん、ちゃん

突然の始まり

イチカ side

なんだかんだ言つて元の世界に戻つて4月に入りました。

ラミントンさんは亡国企業のお偉いさんに理由を話をつけて元の天界に帰つて行き
ました。

フーカはデスコと「暇ー」つて言いながら亡国の皆さんと半強制的にトレーニングと
言う名のフルボッコをしています。

そんでヴァルバトーゼ閣下は食堂で魚強イワシを普及洗脳をしました。

ちなみに今俺は何をしているかと言うと……

「東さんこちらのデータ結果が出たのでこの書類をお願いします。」

と東さんにとある書類一枚を渡す。

「やっぱりいっくんは作業が早いねー、了解だよー。」

と言つて東さんはどこかへ行つた、するとノームさんが。

「流石フーカが選んだ男だな、わしと引けも通らん速さだ、わしも負けられん!!」

と言つてもものすごい早さでパソコンのキーボードを打っている。

「それでは今日はここを攻めてみましょうノームさん。」

「パパでいいと言っておるだろう。」

「……………」

フーカのお父さんだから娘を取られたと言われるのかと始めて思っていたがフーカの言う通りおおざっぱな性格のようで無条件で気に入られてしまった。

フーカ曰く「ねっ？緊張して損してでしょ？」だった。

「しかし、この世界のネットサーバーはセキュリティがなつとらんな、すぐハッキング出来てしまうわ。」

ちなみに俺たちがやっている作業と言うのが『企業ハッキング』要するに企業の内側から乗っ取ってしまおうと言う荒業をしている。

既に何企業もハッキングを成功し着々と乗っ取りは成功している。

今段階で80%は乗っ取りをしている。

「しかし、東さんもノームさんもよく二人だけでここまで乗っ取り出来ましたね?。」

俺はノームさんにちよつとした疑問を投げかけた。

「はっはっははは、わしと東ちゃんならこのくらいなんてことはなかったわ!!しかし一夏くんが来てから更に効率がアップしたからな、これならば4月までに全企業を抑えられるぞ!!」

「まあ分かってましたが……あ、ここもクリアですね。」
こうして着々と企業は乗っ取られ続けるのだった。

フリーカ side

あー暇、イチカはパパと一緒に地下研究所にこもりきりだから暇なのよねー。
デスクがいるからいくらかは何とかなっているけれど。

「やっぱり暇よねー。」

「だからって俺たちをボコさなくたっていいだろ？」

よろよろとフーカに突っ込みを入れる男がいた。

「だって魔界マジウだったら最高の娯楽なんだもん。」

「聞きたび狂ってる世界だなおい。」

「まあ、あたしだって夢だと思ってバット振り回してたし。」

「夢でもそんなことしねーよ。」

「うっさいわねーもう一回ボコボコにするわよ!!」

このようにボコボコ宣言されている男A（アッシュ）今日も受難ばかりである。

数分後

「くっそ強え。」

結果抵抗むなしく再度ボコボコにされてしまった。

「あたしに勝とうなって100年早いわよ。」

「本当にそれただの金属バットか？」

「真正正銘ただのバットよ。」

「あ、ありえねえ……」ガクッ

アツシユは気絶してしまった。

すると女性が入って来た。

「ありやりやまた派手にやっちゃまったなー。」

「あ、オータムさん。」

ちなみにオータムもフーカのトレーニングに付き合わされたことがある。

「オータムさんもやります?」

「いや、断つるわ。」

オータムはIS対生身なのにフーカに負けたのがよほどトラウマになって居る。

「本当どんな生活してたらそんなに強くなるんだよ(汗)」

「え?普通にバットで魔物倒してたらこうなりますよ?」

「……ありえねえ。」

とりあえず魔界がとてつもなくすごいと言うのだけオータムは理解した。

ヴァルバトローゼ side

今、俺はこここの会社にいる社員共に再教育を施している。

中々にいい教育をしていると俺の中では自信がついている。

「さて、お前たち今回も魚強のすばらしさについて語ってやろう!!」

「「「ハイ!!ワカリマシタ!!」」」

「うむ、いい返事だ！それでは今日の講義についてだが……」

数時間後

「今日はこれで終わりだ、今度は最後の講義だが次の講義も楽しみにしているぞ!!では解散!!」

「「サーイエツサー!!」」

そうして講義に参加したギゲフンゲフン亡国企業の社員達は帰って行った。

スコールside

先ほど社員達がヴァルバトーゼと一緒に講義室へ入って行ったのを見て気になって覗いて見たら……

「魚強はとても強い魚だからこれからは魚辺に弱いでは無く、魚辺に強いと書くのだ
!!いいな!?!」

「「「イエッサー」」」

鯛に洗脳されていた。

やはり織斑 一夏は危険人物だ、あんな洗脳まがいな事をしている化け物を連れてきてしまった。

やはりあの時追い返しておけばよかったのだ。

Z/X様は様子を見ておくと仰っていたが私はもう耐えられない。

だが私一人じゃあとても今の織斑 一夏は殺せない、一体どうすれば……

「お？スコールじゃんどうしたんだ？こんな所で？」

「……ホークか、いつの間にか休憩所に来てしまったのね私。」

ホーク……彼も異世界から来た人間らしいけれど。

「悩み事か？だつたら俺に話せよ、それでも相談事は解決してたほうだからよ!!」

そういえば私ホークの事は最初は疑ってたんだっけな……。

それでもなぜかこいつにだけは心の内を話してた気がする。

「ホーク、実はね……。」

「……なるほどね、でも本人は全くその気がなさそうじゃね？」

「そうなんだけれどね……」

「まあ、こんなところでうじうじしてたら本当に腐っちゃまうな、よし!!これならどうだ、一夏が本当にそうなたら全力で俺が止めてやる、それならお前が気苦労する必要ねえだろ?」

「あなたはそれでいいの?」

「お前がしけた面しないよりはましだ。」

ああ、こういう男だったわ。

でも、スッキリしたかな?

イチカside

「ラミントンさんが言う原作を見る限り今日が多分その日なんだろうな。」

俺はラミントンさんに「見ておきなさい」と言われた小説を見ている。

「しっかし、この本の俺、変なフラグ立ててるなあ。」

原作の俺に突っ込みを入れつつテレビを見ていると……

『り、臨時ニュースです!!今、入った情報ですとなんとISこと『インフィニット・ストラス』に初めての男性操縦者が出ました!!』

っと来たか!!

俺はそのテレビの言葉に体を起こした。

ついに秋斗^{あいつ}を地獄に送り返すすカウントダウンが始まるぜ。

続く

入学

イチカ side

どうも皆さまご存じ織斑 一夏です。

今俺はIS学園の1年1組にいます。

まあ復習はしていたけれどこれはきつい

視線って人一人殺せますねこれ……

「視線がやばい……」

まじでやばい、どれくらいやばいかつて言うとな殺人鬼に合つていきなり首を搔つ切られさうになるくらいやばいな。

まあ魔界の殺伐とした空気よりはそよ風みたいなものだが……きついものはきついな。

そんなこんな考えていたら教室の扉が開いた。

「皆さんご入学おめでとうございませう、私が1年1組の副担任の山田 真耶（やまだ まや）です、よろしくお願ひします。」

どっからどう見ても中学生にしか見えないが先生らしい（失礼

まあ挨拶するか

「お願いします先生。」

「お、お願いします。」

俺が挨拶した後もものすごく緊張している秋斗が挨拶する。

「はい、お願いします。」

先生は満面の笑みで返してくる。

と言うかフーカは挨拶せんでいいのか？

っと目だけフーカを見してみる。

ちなみにフーカは右隣の席だ。

見てみると恨めしそうに先生のある局部を凝視しているフーカがいた。

「……………」

そつとしておこう……………

「それでは一人づつ自己紹介をお願いします。」

「織斑 秋斗です、趣味はゲームと天体観測です嫌いなものは特にないので気軽に話しかけてください。」

中々の自己紹介だなとは思う、だが……

「「きやああああああああ」」

それが爆弾投下するという結末は変らない。

耳を塞いで正解だったな、フーカもスタンバイ済みだった。

やはり秋斗も分かっていたようだ耳を塞いでいた流石転生者。

ふいに扉がまた開いた。

「ざつきから騒々しい、いったいなにがあった!!」

リクルートスーツを着こなしている千冬姉が入って来た。

ここも原作通りか……しかし千冬姉はちよつと雰囲気変わったか？秋斗を見る目が

なにか違う……。

「お前か……。」

秋斗の前に千冬姉が立つすると。

ゴン!!

物凄い音が教室に響いた。

出席簿が秋斗の脳天に直撃した、頭からは煙が出ている。

うん、原作通りだな（汗）

「……ツハ、織斑先生、職員会議はもう終わられたんですか？」

あまりの出来事にタイミングが少しずれた山田先生が聞いてきた。

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな。後は私がやろう。」

そう言うのと山田先生は椅子に腰かけ、千冬姉は教壇に立った。

「諸君。私が担任の織斑千冬だ。君達、新人を一年で使い物にするのが仕事だ。くれぐれも自分たちが選ばれたなんて思わないことだ。」

その言葉に戦慄が走った、騒ごうとした女性とは沈黙、女尊男卑の人間は恐怖を感じた。俺たちはなにも感じなかったが……

「つと自己紹介はどこまで行きましたか？山田先生？」

不意に千冬姉は山田先生に問う。

「あ、はい織斑 秋斗君で止まっています。」

「そうか、では次の者続けろ。」

何事もなく続けるのかー流石千冬姉やでー

「はい、織斑 一夏ですちよつと居た場所が特殊なので変な言葉を発したらそのままスルーしてください、趣味は家事全般とプログラミング等などデータ系の開発もしています。」

「「「……………」」」

ギロ

「次！」

睨むだけで沈静化させやがった

「風祭フーカです、普通の夢見る乙女です、趣味はソフトボールです。」

フーカが普通の自己紹介を終わらした、それでいいのか？

それから自己紹介は淡々と続いた。

秋斗は自己紹介が終わるまで全く動かなかった（死んでいるんじゃないかと思った

放課後――

放課後フーカと話をしていると……

「あ、よかったです、一夏君」

山田先生が話掛けてきた。

フーカはやっぱり山田先生の局部を凝視している。

「なんででしょうか？山田先生？」

「はい、一夏君に寮の鍵を渡すようにと言われてまして……。」

「え？一週間後ではなかったのですか？」

「ええ、そんなですけれど、政府のお達しで急遽決まったそうなんです。」

「そうですか、それではすぐ荷物をまとめてきます。」

「そう言つてフーカと一緒に教室を出ようと思つたら……」

「ちよつと待て。」

どつからか出てきたか分からないけれど千冬姉が出てきて俺を呼び止めた。

「つてどつから出てきたんですか織斑先生!!」

山田先生の突つ込みをスルーし千冬姉は話を続ける。

「荷物を持つてくる前にちよつと私に付き合え。」

「そう言つて千冬姉はどこかへ行つてしまつたついてこいつてことなのだろう。」

「フーカ先に帰つてて。」

「うん、じゃあ先に行つて待つてるから。」

「そう言つておれは千冬姉を追いかけた。」

着いた先は視聴視覚室だった。

聞かれたくない話か？

「織斑先生。」

「来たか一夏、いつもの呼び方でもいいんだぞ？」

「まあ、とりあえず久しぶりだね千冬姉。」

「ああ久しぶりだな一夏。」

話が続かない……………

「あーそのだなー、一夏すまん!!」

いきなり座っていた椅子を放り投げ土下座する千冬姉。

「ちよ、どうしたの千冬姉。」

「どうしたもこうしたもあるか、私はお前に謝らなくてはならない。」

意味が分からなかった、ぶつちやけ千冬姉は俺に興味がないのかと思っていたからだ。

だから千冬姉にはなにも言わなかったし、触れ合いもしなかった。

だが実際は違ったのかもしれない、今の千冬姉を見るとそう思ってきた。

「顔を上げなよ千冬姉……俺はそんな千冬姉を見たくないよ、いやむしろ俺が謝らなくちゃならないね……。」

千冬姉はちよつと驚いた顔をしながらも俺の手を取って泣いた。

「ううっうう」

俺はそつと千冬姉を抱きしめながらなだめた。

続く

前進と対立

イチカ side

千冬姉をなだめてから1時間くらいがたったところだろうか、少し千冬姉も落ち着いてきた。

「しかし一夏よ今までどこに行っていたんだ？」

少し目が赤いながらも目をキツとつり上げて言う。

「ちよつと言いいくいけれど、と言うか信じてもらえないけれどこれから話すことは誰にも言わないって約束してくれる？」

千冬姉は少し考えながらもうなずいてくれた。

「ああ、私はどんなことがあっても一夏を信じる話してくれ。」

決心をしたのかそれとも俺がいらない内になにか変わったのかな？

そして俺はこの2年間なにをしていたか、魔界でのこと、そこで出会った仲間、天界の事、フーカの事、俺が何しに戻って来たかを全部話した。

全てを話した千冬姉の反応はというと……

「うむ、流石に全ては信じられんな……」

「私は馬では無い!!」

いやむしろイノシシ?

「誰が豚か!!」

「あんたはエスパーか!!」

こうして千冬姉との話はほとんど千冬姉をなだめるのに時間をくってしまいほとんど話が出来なかった、まあ重大な話は一通り出来たので良しとしよう。

あ、もう一つ重大な話をし損ねてしまった、まあ時がきたら話せばいいか……

秋斗 side

ふう、とりあえずIS学園に侵入と言うか入学できたな。

後はどれだけ俺の能力で仲間を増やしていくかだな……

「ケケケ、どうだ？秋斗守備は順調か？」

つと考えているうちにデモンが俺の部屋に侵入してきた。

「ちなみに今俺の部屋にはルームメイトはいないと言うかデモンのおかげで1人部屋にしてもらった。」

一応説明しておくがこいつは悪魔だ、まあ、俺はあんまり信じていないが……

「そう言う分けてこいつのおかげで女子のいない1人部屋を確保しているわけだが……」

「一応準備万端だが……。」

「どうした？不都合が生じたか？」

不都合も何も……

「なんで、織斑一夏が生きてんだよ!!死んだんじゃねえのかよ!!」

「そう織斑一夏が生きていた、そのせいでちよつと計画が破綻しそうだ。」

「んなこと言われてもなー、まあ、たぶんあつちの神様が織斑一夏を使つてお前を捕ま

只今次の日の朝でございませう。

「つと現実逃避している場合じゃなかったコレどうにかしないと……」

今の状況

朝起きたら隣のベット（ちゃんと相手が見えないように壁がちよこつとある程度）の向こう側を見たらフーカがいないつと思つたらまさかの俺のベットの侵入し俺にひつついていたOH

「とりあえず、引きはがすか……」

そう言う俺は冷静に寝間着を瞬間的に脱ぎさらに目にも止まらぬ動きで制服に着替えた（この間一秒）床にはフーカがぐつつり眠っている……：我ながらとんでもない技術を習得してしまった……：さてフーカ起こして登校しますか。

1年1組教室なう

「ふわー」

フーカが教室に来るなり大欠伸をしている。

「ぐっすり眠れたのにそんなに大きい欠伸をするとは……」

俺がそう言うのとフーカは。

「何よーアツチ魔界じやあ年中暗いから時間が掴みにくいのよ。」

まあ分かるけれども……

するともう時間が経過したのか担任の千冬姉と山田先生が入って来た。

いつの間にか秋斗も来てたし。

「あー、ホームルームを始める前にちよつと決めたいことがある。」

この一言でちよつと前まで静かだった教室がざわざわし始める。

まあ数分足らずでざわざわはなくなったけれど。

「昨日は、ドタバタしていて私も忘れていたがこれからこのホームルームの時間だけで

‘クラス代表’を決めたいと思う。」

クラス代表？ ああ、学級委員みたいなものか……

「せんせー、クラス代表、って何ですか？」

当たり前だが聞いてくる生徒がいた。

「クラス代表は言ってみればクラス委員長だ、そして、再来週に行われるクラス対抗試合に出ることになっている、自薦でも推薦でも構わん、誰かいないか？ ちなみに拒否することもあるぞ？」

そう言うと千冬姉はニヤツと笑みを浮かべた。

うわ、ありやあなんか悪い事考えてる顔だわ。

「はい！私は織斑 一夏君を推薦します!!」

「私も一夏君を推薦します。」

「あ、私は織斑 秋斗君を推薦します」

「私はオルコツトさんを推薦します。」

「私もオルコツトさんで。」

つとまあ、あつちこつち推薦が飛び交っている。

すると……

バン!!つと机を叩く音が教室に響いた。

「お待ちください、私、セシリア・オルコツトが選ばれるのは当たり前としてその極東

の猿二人組と一緒に推薦されては困りますわ!!」

わお、この状況でまさかの批判が来るとは命知らずだな。

「ほほほう?ではオルコツト、貴様は自分がふさわしいと思っっているんだな?」

「ええ、私はイギリスの代表候補ですよ?ですから私こそ、クラス代表 にふさわしい

と思っております。」

「つと言うことだ織斑兄弟お前たちはどうする?」

ここで俺たちに振るんかい、まあオルコットさんはえらい自信があるみたいだが……
つと考えていると秋斗が……

「俺は、クラス代表、を降りるつもりはないぜ？」

つと自信満々に喧嘩を買いやがった、まあ何を考えてるか分からん。

「それなら俺も降りられないな……。」

俺達が、クラス代表、を降りないと宣言した、さてオルコットさんは……

「それならば私と決闘ですわ!!」

決闘と来ましたかまあとりあえずつぶすことだけ考えましょう。

「ふむ、決まりだなでは試合は来週の月曜日の放課後の第3アリーナで行う、大体決まった所で今日のホームルームは終わりだ、さっさと始めるぞ!!」

切り替えが早いことです千冬姉。

それから一日中千冬姉はフーカをチラ見しながら授業してました。

続くでござる。

篠ノ之 箒との関連性と一騒動

イチカ side

セシリアからの戦線布告から時間が立ってお昼休みの出来事……

「つで、これからどうするのー夏？」

ふと食堂でうどんをすすっている俺にフーカが聞いてきた。

「どうってとりあえず撃退あるのみだろ？」

その言葉にフーカは人差し指を横に振ってツチツチ動かした

「違う違う、どうやって相手に衝撃を与えるかよ！」

「……………はい？」

意味一緒じゃね？と思っていたら。

「つまりよ、一撃で沈めるのかじわじわと削るのかってことよ。」

「……………一撃だろ？」

「ですよねー。」

っと思っただがそれってやばくね？俺も魔界に毒されてんなー。

っとおもっていると誰かがやって来た。

「すまんが隣をいいか？」

「ん？ ああいいぞ、 つて箒？」

俺が振り向くとそこには篠ノ之 東の妹篠ノ之 箒（しののの ほうき）がいた。

「うむ、 久しぶりだなし・一夏。」

うん久しぶりだなというか箒は変ないなーポニーテールの所とかも。

まあ東さんが箒の成長記録を見せてくるもんだからまったたくもつて変わらないと思つてしまふんだらうな。

「とにかく座れよ。」

「うむ。」

その行動に少しポカーンと口を開けているフーカがいた。

「え？ その子知りかい？」

フーカが俺に聞く。

「ん？ ああ俺が日本にいた時の幼馴染だよ、 フーカにもちよこつと話しただろ？」

「え？ この子がそうなの？ いやイメージと違うからさーあはははは。」

つと愉快そうにフーカは笑う。

「一夏はこの女性とはもう知り合いなのか？」

つと今度は箒が質問する。

「ん？ああ向こうで知り合った俺の彼女だ。」

箒は気軽に話を聞こうとしていたのか飲みかけていたお茶をそのまま吐き出してしまった。

「ツブ……今何って言った？」

箒は少しむせながら意外そうに俺に聞いた。

「いやだから知り合った彼女って……」

そう俺が言うのと箒の顔がさらに驚愕の顔に変わった（エネルギー顔並み）

「……なん……だと……し……一夏に彼女だ……と!？」

そんなに意外だったか？

箒はブツブツとつぶやいた後、急に……

ガシ!!

俺の肩をつかんでこう言った

「師匠おめでとうございます!!弟子としてこれ以上の事はありません!!お幸せに!!」

大号泣しながらも俺にそう言った。

フーカもあまりの事に開いた口が閉まらないようだ。

「いや、そんなに嬉しいことか？あと師匠ってみんなの前で言うな。」

そういえばこいつこんな感じだったわ。

あの時俺が知らない合間に箒を助けた後、こいつは俺に弟子入りを迫った。最初は拒否していたけれど箒の熱意に負け師弟関係となった。

「まあお前がそれでいいならいい、後で稽古を付き合おうつか？」

俺がそう言うのと箒は嬉しそうな顔をし

「いいのですか!!」

「あ・ああ」

久々だな箒との稽古は。

「放課後を待ってろよ?」

「はい!!了解いたしました!!」

こうしてお昼休みは終わっていった。

ちなみに食べていたものは数十秒で俺達（箒も）食べた。

箒もある意味俺達並みかもしれんなこれは。

そして放課後――

箒 s i d e

久々の師匠一夏の稽古だ!!

師匠には私の成長を見てもらいたい。

それが私が頑張ってきた証明にもなる!!

あの時師匠に助けてもらわなかったら今の私は居ないだろう。

つと思いにふけていたら師匠が来たな。

「どれだけ強くなったか、さあ俺に見せてみる!!」

急に入つて来た師匠が構える。

「いや、師匠防具は？」

そう防具を着ていないのだ。

「あん？防具なんて必要ねえよ、それとココ155学園に俺に合う防具なんざねえだろう？」

確かに……

「では、始めましょうか。」

師匠の台に立つたため私も防具はつけていない、まさに真剣勝負な展開になった。

「それでは先輩お願いします。」

「え……ええそれでは………始めえ!!」

その合図と共に私は師匠に向かって竹刀を振り下ろした、しかしその間に師匠は居らず後ろに回っていた。

「でえあああああ。」

師匠の竹刀が私の胸に決まりそうになったが私は数ミリで躲すことが出来た。

「はあああああああ。」

今度は私が師匠に突きを食らわせようとする、しかし師匠は寸前で顔を後ろに翻した。

その後持っていた竹刀で再度私を攻撃をしようとしているのが見えた。

私は師匠がその竹刀を振る前に突きを止め後ろに後退した。

「中々いい動きするようになったな箒？」

師匠は私を褒めた。

「いえまだまだこれからですよ？師匠!!」

つと言っている。

「へえ？ならこれを躲して見せろ!!」

師匠はいつの間にか私の懐に入り竹刀を切り上げようとするのが見えた

まずい!!あの構えは!!

「篠ノ之流!!桜吹雪改!!」

まるでバットののようにスイングをするのかのように切り上げる構え『桜吹雪』を出すとは……もう少し反応が遅かったら危なかった。

「へえ本当にやるようになったな箒。」

やっぱり気が抜けないな師匠は……

つと再び構えようとすると……

「「「「きゃあああああああああああ」」」」

つとけたたましく黄色い声部が響いた。

ふと後ろのほうを見るとどこから沸いたのかIS学園の女生徒が私達の稽古を観戦

していたようだ。

「はあ」

師匠はその光景に少し呆れてるようだ。

「箒。」

「なんででしょうか？師匠？」

なんかやな予感が……

「興ざめだ、さっさと片づけるぞ。」

OH

「はい……」

そんなこんなで私と師匠の稽古はすぐに終わってしまった。

「なんてこった。」

続きます。

VSセシリア

イチカside

あれから1ヶ月経ちついに決闘の日が来た。

別にこれと言った鍛錬はしていない、基本的に束さんがISの調子を見ているのであまりやるのが無かったからだ。

装備などは閣下に任せてるし。

「師匠!!」

色々考えてる中箒がピットに入って来た。

「……箒よ。」

「なんででしょうか?師匠。」

「なんで、ナチュラルにピットに入って来た?」

普通ピットに入る前でしょ?

「ハッ!!すみません師匠!!つい無意識に入ってしまった!!」

「無意識かーならしよがなわかってんなわけないだろー!!」

「にやーすみませええええん」

こんな風にコント？していると千冬姉が入って来た。

「お前達騒がしいぞ!!」

「あ、織斑先生。」

「そろそろ準備が出来るそうだ、オルコットはすでに準備を済ませて待っている、一夏は準備は出来ているか？」

「どうやら千冬姉はただ呼びびに來ただけのようだ。」

「はい準備は出来ていますよ。」

箒は俺の専用機が気になるようで専用機を見るまではここを離れない気でいるみたいだ。

(わくわく)

めっちゃやくちや期待の眼差しで俺を見ている。

「!!!『Pタイラント』」

そう叫ぶとプリニーの形をしたネックレスが光を放ち瞬く間に俺を包んだ。

一瞬の間に俺は『P^{プリニー}タイラント』をまとっていた。

足はプリニーの棒を再現した足になっている。

装甲はプリニーの丸みを再現するためスカート状になっている(ダンボール戦機ウオーズのフロントム見たいなスカート)

手はプリニーの翼をモチーフにしており、守る事や攻撃することが出来る裏側にちやんと手がある（着ぐるみ見たいに手を通している）のでちゃんと武器も持てる。

頭はプリニーのクチバシが帽子見たいに頭を守っている。

「えらいかわいらしい専用機だな？」

見た目はね

この機体はゼウスがいると本領発揮するからな。

「見た目の割にはすごいから見ててよ。」

「……分かった。」

さてこの機体でどれだけ持たせることが出来るかな？お嬢さん？

そんな事を思いながらピットを出た。

セシリア side

何やらこんな騒ぎになってしまっても後悔していませんわ……
一体なぜこのようなことに……

セシリアは今になって今の状況を後悔していた。

私はあの兄弟がなぜクラス代表に向いていないと思ってしまったのでしょうか？
特に織斑 秋斗……彼に対して怒りが出ってしまったような……

『これより織斑 一夏VSセシリア・オルコットの模擬戦を開始します』

そんなこんな考えていると模擬戦のアナウンスが流れた。

考えるのは後ですわ、今は目の前の勝負を考えなくては……

「来ましたわね。」

「まあ成り行きで決まったからな。」

ペンギン？

彼の専用機の印象はまさにそれでした。

まるで動物園のペンギンそのものでした、足はなんか違いますけれど……

「あなたなんですか!?!その専用機は!!」

「ん?ああこんな成だが性能を甘く見ると痛い目見るぞ?」

そんなに高性能には見えませんが……まあいいですわ

「踊りなさい、ブルーティアーズが奏でるワルツで!!」

っといつもの決め台詞で相手を攻撃し直撃したっと思ったその時!!

彼の専用機の周りに7つの武器が彼を囲んでいて先ほどの攻撃が無効化されました。

「え!？」

「おいおい、危ないじゃないかいきなり宣言も無しにレーザー撃つなんてさ。」

彼がそう言うのと突然彼の目の前に文字が出ました『セレクト完了』と……

その文字が出たとたん

『一文字スラッシュ』

私の画面にそれが出たと思ったらS シールドエネルギー Eがいつの間にか減っていました。

後ろを見ると彼『織斑 一夏』がいました、私は一体何が起こったのかがさっぱりでした。

「一体私に何をしたのですか!!」

突然の事で私は混乱していました……が正確にブルーティアーズのビットは彼に向

かっていました。

ですがこともあろうことにビットは無残に引き裂かれました。

いつの間にか後ろのスカートのビットも破壊されていました。

「つく、インターセプター!!」

セシリアが苦し紛れで近接を出したがそれも空しく一夏の『一文字スラッシュ』により『インターセプター』は破壊された。

全てのブルーティアーズの武器が破壊され何も出来なくなつた所でブザーが鳴った。

『全武器ロストを確認、勝者織斑 一夏』

こうして私は完全敗北を知つた……

続く。

VS織斑 秋斗

イチカside

オルコツトさんの試合は意外とあっけなかったな。

まだ1%の実力も出さない内に勝負が着くとは……

そう思いながら俺はピットに到着する、SEもあまり減っていないし（この機体は魔力SEに変換されているため操縦者のレベルに応じてSEが設定されている）

「ただいまー。」

そうしている内にピットに戻って来た。

千冬姉は俺が戻って来るなり物凄いスピードで迫って来た。

「夏よ、その機体はどこで手に入れた？」

千冬姉近い、近い

そんな形相で近付かれたら怖い!!

「詳細は言わないけれどこの機体は俺が所属している会社の機体だよ、って言うか近い、近いよ!!機体が解除出来ないから!!」

俺の言葉に納得?したのかとりあえず離れてくれた。

「時に一夏よ。」

「ん？」

とりあえず待機モードにしよ。

待機モードにしかけようと思つて考えていると？

「先の戦いでオルコットの武器を全部破壊したな？」

「あーしましたね。」

ん？と言ふことは？

「オルコットの準備がさらに掛かるらしいのでな、先に秋斗と戦う事になった。」

まじかー、後でオルコットさんには代わりの武器を渡そうかなー。

「分かりました、俺はまたピットを出ます、千冬姉は秋斗を呼んでください。」

「そう言うと思つて先ほど山田君に伝言は渡つている。」

早!!もう手配済みかい!!

「そ、そうですかそれでは行つてきます……ハア」

そう言つて俺は再びピットから発進したのだった。

秋斗 side

俺は先の戦いを見て唾然とした……

あまりにも圧倒的な勝負だった、あの織斑 一夏がいや原作とはちよつと性格がおかしいがそれでもあの織斑 一夏がセシリアを圧倒したのだ。

「まあそれでもあいつには勝てそうだな。」

何故こんなにも俺が余裕なのかと言うと俺の専用機は原作で言う『白式』ではないからだ。

俺の専用機はデモンが用意した機体『デモン・プロミス』があるからだ、文字どおり悪魔の契約で出来た機体だ、面白い事に武器スロットが無限にある、そう武器が無限に使えるのだ!!これで一夏が武器を壊しても負けにはならない。

「今度は俺が蹂躪する番だ!!」

セシリアの試合が終わった途端山田先生が『次の試合に向けて準備してください。』つと言っていたのです。すでに準備は出来ている。

さーて行きますかー。

「よう、一夏。」

とりあえず俺は一夏に対して軽くあいさつをした。

「ああ、もう準備はいいのか?」

あいかわらずクールだな小さい頃は俺様に勝てなかったのになあ。

「さつさとお前を負かして俺がこのクラスの代表になってやるからよ!!」

『これより織斑 一夏VS織斑 秋斗の模擬戦をおこないます。』

まずは先手必勝!!俺はビームガンを出して一夏を攻撃する。

「おいおい、お前もオルコットと同じで武器すら持たせてくれないのかよ。」

直撃はしたが以前一夏の機体は全くの無傷、周りにはセシリアの試合に出てきた7つ

の武器が浮いていた。

前の試合とは違い今度は槍を選択した。

つと同時に俺の画面にこんな表示が出た

『槍刺葬哀』

あん？そうしそうあい？なんのこっちゃ？

俺がよく分からない表示が出たその時

「よそで見厳禁だぞ!!」

しま!!

気づいた時には遅く一夏の槍が俺に刺さった（機体の接続部分の所を器用に槍で刺しているだけ

その後思いっきり上空に飛ばされた。

何故かI Sの対空機能が機能していないバグか？

「くっそ」

すると誰かに掴まれた：：一夏だ。

そしてそのまま猛スピードで落下をする。

この時一夏に掴まれている時だけS Eの減りが異常だった。

そうしてなすすべなくアリーナの地面に叩きこまれた、よほどの威力だったのかS E

は無くなってさらに反動で俺にダメージが通った、ありえねえ……

SEのおかげで本来なら死亡する攻撃を何とか軽減できるレベルの技だった。俺は頭の中でそう思いながら意識を手放した。

イチカside

「やっべえちよつとやりすぎたかな？」

あんな奴でも一応俺の弟だし助けるか。

続きます。

クラス代表決定

イチカ side

いやー、派手に技が決まっちゃったなー死んでなきやいいけど。

まあ、SEがあるからそこまでダメージはいつては無いだろう、うん。

「おーい、大丈夫か？」

とりあえず意識があるかを確認する。

「……………」

あ、これはダメだな。

ISが解除されている時点で気絶しているだろうとは思ったけれども。

しやあない、連れていきますか。

そう思つて秋斗を米俵のように担ぎ。俺は急いでピットに戻つて行つた。

「よーいっしょよ。」

ピットに戻るなり秋斗を床に軽くたたきつけるように降ろした。

なんか体がびくんと動いた気がしたが気のせいだ。

念のために移動中『ヒール』を少し使ったので多分大丈夫だ。

「ご苦労だったな一夏。」

「あ、千冬姉。」

ふと、千冬姉が俺に話し掛けて来た。

「その、I Sには色々突っ込みたいことがあるが……まあとりあえずクラス代表はお前に決定だな。」

そう言えばオルコットさんがいちやもんつけて来たからこんなことになったんだっただけ。

「秋斗は戦闘不能で、オルコットさんは武器が無い状態ですからね。」

その言葉に千冬姉は頷いた。

「そうだ、戦力的にお前は圧倒的だったからな。誰も文句は言わんさ。」

まあそうだなっと思いつつながら急に箒が会話に入ってきた。

「師匠!!お疲れ様です。これで汗をお拭きください!!」

つと言つてタオルを献上してきた、そんなに汗はかいてはいなかったが人の好意を踏みじる分けにもかないのでタオルを貰った。

「ああ、ありがとう箒。」

「ふふ、喜んでいただき光栄です。」

まあ、箒が良ければそれでいいか。

「イチカ!!」

急に待機室のドアが乱暴に開いた。

「フーカ、どうした?」

「どうしたも、こうしたもないわよ。」

訳も分からないままフーカは俺に近付いて来た。

「なーんで私を入れてくれなかったの?」

「は?」

訳が分からないよ。

「だーからそこのお義姉さんが私を入れてくれなかったのよ。詳しく聞くと『一夏は模擬戦の間集中するからお前は入れられん』って訳分かんない事言われるし。」

その言葉にふと千冬姉に視線が行った。

千冬姉は俺から視線をそらし、口笛を吹いている。……千冬姉え

箒もその光景に少し呆れていた。

とりあえず理由を話し何とか説得した。

結果クラス代表は俺に決まり、拍手喝采を送られた。

秋斗はふてくされながらも手を投げやりに叩いていた。

そんな中オルコットさんがこの騒ぎの切っ掛けになったことを謝罪、男性の事を侮辱した事をあつさり謝った。

なんでこのタイミングで謝罪したのかを後で聞いてみた所。

『少し私は動揺していたのかもしれませんが、それと同時にあなた達に何故か怒りが込み上げて来たんです。理由は分かりませんがあなたがあなたに負けた瞬間その考えが馬鹿らしくなってきましたね、ですからあなたがここの一年一組の代表になってとても良かったと思っていますの。』

つと答えてくれた。

その後俺のクラス代表の祝いのパーティが開かれた。

秋斗は参加しなかったがとても楽しいパーティだった。

昔ならこんなパーティは参加しなかっただろうな。

秋斗 s i d e

「くそつてれが!!」

俺は自室で暴れていた、理由は簡単織斑 一夏が生きていて俺に圧勝したからだ。

クソ!!あれは何だったんだ!!

攻撃がまったく見えなかった。

あれは一体何なんだ。

「クソ!!」

ドン

「けっけっけ相当荒れてるなあ織斑 秋斗……」

俺が壁を殴ったと同時に『デモン』が現れやがった。

「何の用だよデモン!!」

「けっけっけ、そうかつかするもんじゃねえよ。お前に面白い情報をあげようとしてるんだからよ。」

「情報？くだらないもんだつたらゆるさんぞ!!」

デモンはおお怖い怖いっと言いながら俺にとある情報をくれた。

「おいおい、面白い事考えてくるじゃねえか流石悪魔だな!!」

「けっけっけお前のその性格やつば嫌いじゃないぜ。まあ、また次のゲームを楽しみにしてな!!」

へへ転生したからには楽しまないと。

それに明日は鈴ちゃんが来る話になるからな楽しみだぜケケケケケ。

続きマックス

中国からの転校生

イチカ side

あれからまた数日が立ち今は I S の実践訓練、をしている最中だ。

「では、専用機持ちは I S の展開をしてみてください。」

1 年 1 組の担任である千冬姉がそう言うのと俺、セシリア、秋斗の順番で I S を展開していく。

「よし、それではしばらく空中を飛んでみる。」

言われるがまま俺たちは I S で空を飛んだ。

前の時は空を飛んだと言うよりは“跳んだ”が正しいのであまり空を自由に飛んだ実感が無かった。なので今の飛んでいる状態はとても気持ちいいものだった。

「うーむ、中々に快適だな空って……」

「気に入ってもらえたようですわね？」

「……………」

セシリアはとても上機嫌のようだ。秋斗は何やら考え事のようだ。

すると千冬姉から通信が入った

『よし、もう十分だ、これから着地の練習に入る、気を引き締めるように。』
「では私から……」

『では、10cmだよってみろ。』

千冬姉の合図でセシリアは落下&着地を済ませた。

続いて俺、秋斗も落下&着地をする。

俺はジャスト10cm、秋斗はジャスト地面に着地をした。

すまし顔がうざい……、すると千冬姉が。

「何をしているかこの馬鹿者!!」

伝説必殺技の『出席簿』が秋斗に襲い掛かった。

バシ!!

秋斗は沈黙した……

ところ変わって教室

出席簿で殴られた秋斗を席に座らして一息ついた休み時間の事……

「ねえねえ聞いた？」

ふとフーカが話し掛けて来た。

「聞いたって何をだよ？」

相変わらず主語が見えてこない俺の彼女だ事。

「今噂の転校生の事だよ。」

ふと別の方向から声が聞こえた。

「あれま、相川さんじゃん。」

彼女の名前は『相川清香（あいかわきよか）』フーカがIS学園に入って最初に出来た友達だそうだ。

「あ、覚えててくれたんだ。」

「フーカがここに來ての初めての友達らしいからな、覚えてなきや失礼だろ？」

「その認識でいいの？織斑君……」

「あと、織斑だと秋斗とまぎわらしいから一夏でいいぞ?」

「え?! いいの!!」

えらい食いつきがいいな。

「お、おう。」

フーカも相川さんの反応にちよつと引いてるし。

「で、転校生の話だったよね?」

「あ、ああ。」

「噂によると1年2組に転校生がくるんだてー。」

転校生? こんな時期に珍しいな。

「珍しいなどこからの転校生なんだ?」

「うーんと、情報によると中国からみたいだね。」

中国か? あいつは元気になっているかな?

「近々、クラス対抗トーナメントがあるけれど専用機持ちは大体1組と4組しかないみたいだから大丈夫だよねー。」

「・・・それはどうかかな?」

その声に皆びつくりした、さつきまで再起不能にされていた秋斗がふいにしゃべったからだ。

と言うかよく復活出来たな、出席簿の体制でも出来たのか？

「つていきなりびっくりするじゃない織斑君。」

「おっと、いきなり声を掛けてしまつてごめんよ。」

秋斗は平謝りすると先ほどの話を続けた。

「その転校生は専用機持ちかもしれないって話さ、もしそうなら勝率も変わるだろう？」

その言葉に皆納得してみた。しかし

「でも、クラスの代表はもう決まつちやら変えられないんじゃない？」

そうだそうだと皆が騒ぐ中、急に教室の扉が乱暴に開いた。

「その情報古いよ!!」

秋斗はすまし顔でにやけて、俺は「やっぱりか」と心の中で思った。

俺のセカンド幼馴染 『鳳鈴音（ファン・リン）』

続きます。

二番弟子？

イチカside

突然教室の扉が荒く開き1年1組の皆の視線はそこに集中する。

そこにはツインテールの少女が立っていた、彼女は俺も秋斗も知っている人物だった。

名前は『鳳鈴音（ファン・リン）』箒が転校していった数日後に転入してきた少女だ。ふと秋斗の方を見てみると気持ち悪い笑みを浮かべているがこの後の出来事に驚愕するのは言うまでもないだろう。

「さて……つと。」

鈴は周りを見渡して俺を見つけたと思うといきなり……

「ほあちゃあああああ」

いきなり走り出し俺に向かって正拳突きをしてきた。

「甘いな……。」

俺はその正拳突きを受け止め鈴に言った。

「つちよ……本気の正拳突きだったんだけど……。」

鈴は拳を俺から離して手をブラブラさせながら言った。

「逆にダメージを負っているくらいだからな、怠けてたんじやないか？」

「うっさいわね、あんたが強くなりすぎなのよ!!」

悪態をつきながらも鈴の顔は笑顔だ。

「やあやあ、鈴久しぶりだねえ？」

「げえ!?!キモ秋!!」

急に秋斗が鈴に話し掛けて来た、鈴は周りを見ていたものの秋斗は視界に入らなかったみたいだ。

キモ秋とはあまりにも鈴に対しての秋斗の行動がどうしても気持ち悪い方向にしかならないと言う理由で鈴が命名した名前だ。

「ひどいなー僕はそんな名前じゃなくよ」鈴ちゃん」

「鈴ちゃん」その名前を秋斗に言われた鈴は目に見えて背中がゾワゾワし始めていた。

「気持ち悪いわあああああ『南斗鳳凰奥義・天翔十字鳳』!!」

鈴が空高く跳んび叫んだのかと思うと秋斗に向かってクロスチョップを浴びせた。

「ウボアあああああああああ」

あまりの衝撃に秋斗は教室の窓に直撃し、窓が割れそのまま外へ落ちていってしまっ

た。

「はあ、はあ……自分の教室に帰るわ……」

そう言つて鈴は自分の教室に帰つて行つた。

「……ドンマイ。」

鈴が帰つて行つた後俺は鈴に聞こえない程度に小声で言つた。

その後秋斗は無事？に教室に戻つたはいいがすでに授業が始まっていたので千冬姉の出席簿アタツクの餌食になりました。

そしてお昼休みになりました。

俺達はとりあえず食堂に向かった、すると途中で鈴と鉢合わせすることになった。

「あら?奇遇ね。」

「おう、そうだな。」

そうして鈴と一緒に昼食を取るようになった。

「今朝の会話から気になったんだが……。」

俺達が昼食のメニューを運び席に着いた時に箸が思い出したかのようにしゃべりだした。

「ん?どうした?」

「その……その女と師匠の関係は?」

「ああ、そのことか。」

俺は食べる前に少し息を吐いて鈴の関係を話した。

「端的に話すと箸が転校した後に出来た幼馴染で、少しだけ拳法を教えていたんだ。」

その言葉に箸は少し驚いていた。

「それでは弟子2号ですか!？」

「2号って。」

箸の発言に鈴が少しツッコんだ。

「弟子は取った覚えは無いんだけどなあ。」

ふとフーカを流し目で見るとドンマイっと目で言っていた。

「まあ、なににせよ俺は鈴にも戦い方を教えていたんだよ。」

「何故戦い方を？」

まあ、普通の生活してれば戦いなんていらなだろうな、鈴はある意味特殊だからな。

「今朝の事を思い出してみろ……」

「今朝?……あ」

「分かったならばいい。」

「はい……」

そうキモ秋のせいだ、あいつのせいで鈴の平穏が無くなったに等しいからな。

「さて積もる話は放課後だ、鈴も箒も放課後になったら模擬戦でも稽古でも付き合っ
てやるよ。」

「はい!!ありがとうございます(ぎざいます)」

なんとも現金な弟子? 達である。

続きます。

三人目?

イチカ side

放課後箒、鈴音と一緒にグラウンドに稽古をつけることになった。

「やれやれ、お前等も飽きないな。」

呆れながら2人に向かって言う。

すると箒が……

「何を言いますか師匠!!師匠の動きは師範ウチを遥かにしのいでいますよ!!」

つと興奮しながら言った。

次に鈴が……

「それに、独学でアタシに拳法を教えてさらにトレーニンメニューとか作っているんだからそれなりに強いでしょ?」

「まあ、確かにそうだな……そう言えば鈴。」

俺は朝の事を思い出しながら「あの技」の事を聞いてみる事にした。

「朝のあの技」南斗鳳凰拳」を習得しているんだ?」

「南斗鳳凰拳」この拳法はかつて暗殺拳法と使われていた拳法」北斗神拳」に並ぶ

暗殺拳法の事だ、中でも“南斗鳳凰拳”誰一人としてこの世に習得出来るものではないと、どこかの資料で見たことがある。

「あー、なんかものすごいガタイのいいおじさんが『貴様には、拳法家の素質がある!!俺様が直々に指導してやるから着いて来いっ』て言われて半ば強制的に覚えさせられたわ。」

伝説の暗殺拳……それでいいのか……（汗

「まあいい、話はそれだが稽古を始めよう。」

「はい!!」

それから小一時間くらい稽古をつけた。

鈴音も箒も中々やるようになっていた。

俺の方の強さ調整が出来なくなるくらい少し本気になってしまったのでグランドの中央部分がクレーターが出来てしまった……。

最終的には2人がやっと立てるくらいにボコボコにして終わった。

グランドの整備はプリニーガXX達によって軽く整備をした。

次の日

俺は朝早くに整備室に行くことにした。

目的は『Pータイラント』の整備と、とある機能のテストである。
とある機能とはまだナイシヨデス。

「つとつと」が整備室か。」

整備室ただけあつてたぐさんの機械や工具、メンテナンス用の機械まで取り揃えてあ

る。

その中にひとときわ浮いているISが目に入った。

「ん？あれは？」

打鉄である、しかしどこか打鉄とは違う雰囲気醸し出している。

「中々にいい機体だな……しかしよく見るとこの“打鉄”は未完成か……一体何故？」

俺はその打鉄が未完成と分かり興味がわいたそしてその打鉄に触れようとした瞬間。

「触っちゃダメ——！！」

「!？」

突如後ろから大きな声が聞こえた。

ビックリした反動でふと後ろを向いた。

そこには水色のショートヘアのメガネをかけた少女がこちらを睨んでいた。

「ゴメンついこの機体に興味を持ちちゃって……それで……つい触ろうとしてな……マジですみませんでした!!」

慌ててと言うか反射的に土下座までしてしまった、しばらくすると……

「ちよ……そこまでしなくても……私も怒鳴って悪かったから土下座までしないで……」

彼女もいきなり土下座されて困惑中のようだった。

それから数時間後……………

「へえ織斑君も機械いじり好きなんだ?」

「ああ!!時にロボットを作る時が一番達成感があつて面白いんだよ!!」

「それ分かる—。」

意気投合していた……………

この子の名前は「更識 簪」(さらしき かんざし) 更識家のご令嬢だとか。

この子簪は俺と同じで機械いじりが好きなようで意気投合してしまった。

そんな会話の中ふと簪が目の中の打鉄の事を話した。

「実はねこの機体『打鉄式』は元々倉持研で作っていたんだけど、とある企業が吸収合併しちゃつて戻つて来ちゃつたの……………」

ん?もしかして……………

「なあ、その吸収した企業ってどこか分かるか?」

おそるおそる簪に聞いてみた。

「え?確か…………『ヘルシンボル』って言うきgってどうしたの織斑君!!」

その企業を聞いて嫌な予感が当って俺はうなだれてしまった。
なんてこった!!

「とりあえず災難だった簪。」

「う、うん。」

おわびと言う分けではないがこの子の手伝いをしたいと俺は心の中で思った。

「簪。」

俺は簪の目を真つすぐに見て言った。

「フェ!!なんでしよう!!」

いきなりの事に簪は変な声が出てしまった。

「今日からコイツ打鉄式を作る手伝いをさせてくれ!!」

「え? いいの?」

「ああ、簪さえ良ければ手伝おう。」

簪は少し考えながら少し経ってから俺の方を向いた。

「はい!!よろしくお願ひします師匠!!」

「ああ頼むぞ簪……え?」

どうやら弟子が増えたようです(汗

続くんではしょうか？

鈴音の憂鬱

イチカ side

「つと言う訳で弟子が増えました、はい拍手〜」

俺は箒、鈴音、簪を朝早くグラウンドに集め箒と鈴音に簪を弟子にしたと言う報告をした。
た。

そんなツツコミどころ満載の紹介に鈴音は……

「ええ……」

とても困惑していた。

対して箒は……

「……………（キラキラ）」

無言で俺の事を尊敬の眼差しで見ている。

「うん、言いたいことは分かるがあまり突っ込まないでくれ、俺も無理があると自覚しているからな……………」

「まあ、言いたいことは分かっていたわ……………ジャンルも私達とは違うみたいだし……………私は
嵐 鈴音よ、よろしく頼むわよ簪。」

鈴音は若干呆れながらも簪に握手を求めた。

「あ……こちらこそ？」

簪も反応は遅れたが握手をした。

「むっこちらもよろしく頼むぞ簪、わたしの名前は篠ノ之 箒だ。」

続いて箒も握手を求めた。

「はい、こちらこそ……」

ふむ、これでみんな触れ合えたかな、よし本題へ入ろう。

「それじゃあ、自己紹介も済んだし今日の本題へ入るぞ。」

「「え？」」

3人は俺の言葉に驚いている。

「そりゃあこんな朝早くお前達を呼んだんだからなトレーニングがてら朝練をしよう

と思っていたんだ。」

「それならしようがないわねえ」

「ふむそれならしようがないな……」

「ええええええ……」

二人はノリノリだ、簪の反応は、当たり前前の反応だ。

「ああ、簪は二人とは全くジャンルが違うから大丈夫だぞ？」

「ああ……それならいいよ」

そうして授業が始まる10分前に箒と鈴音は朝練&組み手、簪はISに積む装甲や武装の計画を打ち合わせしていた。

そして昼休み、ちょっとしたトラブルが鈴音に降りかかった。

トユルルルル

「はい、もしもし鈴音ですけれど……ってサウザー師匠!!」

鈴音は食べているラーメンを乱暴に置いて急に立った。

「あ、はいつていきなりどうしたんですか!! ってなんでいきなりそうなるの!! ちよバカ師匠切るなああああ。」

切れた携帯を落とし疲れた顔で椅子にうなだれる、一体何が短時間で起きたのか
……

「ど、どうした鈴音?」

恐る恐る何が起きたのかを訪ねた。

「サウザ―師匠がこのIS学園に来るって……………」

「いや誰だよ。」

「あ、師匠には詳しく言っただけでなかったわね、あまりあのバカ師匠には関わらないようにしてたから仕方がないわね…………ちよつと前に私”南斗鳳凰拳”使ったじゃん？」

ああ噂の無理やり勧誘したって言うおっさんか。

「件の暗殺拳を無理やり教えたって言う？」

鈴音は首を縦にこくりとうなづいた。

「でね師匠と差別化するためにそのバカの事は”サウザ―師匠”って言っているの。」

そう言えば電話でもちよこつと聞こえたな。

「つでそのバカ師匠が今さっき電話でこういいやがったのよ。『貴様の通う学園、IS学園と言ったかな？遊びに行つてやるからせいぜい俺様のためにお茶を入れて待っていろhahahaha』遊びに来るはいいけれど事前に言いなさいよ!!」

えらいご立腹だな…………ん？

「ちよつと待て鈴音……………」

「ん？どうしたの？」

「遊びに来るって今から来るのか？」

「えー………（サー）」

俺の言葉に鈴音は猛ダツシユでI S学園生徒玄関まで掛けて行った。

「ちよ、待て鈴音！」

そうして俺達はI S学園生徒玄関まで猛ダツシユで掛けて行った。

まさかとは思うが……いや実際に見なきやわかんないか……

この嫌な予感の中しませんように……

続く。

集結!!伝説の暗殺拳使い!?

「ここは普段は陸の孤島と称されているIS学園の海の上、今日はいつになく海がざわついているようだ。」

???
side

「H A H A H A もうじきIS学園とやらが見えるぞ、ケンシロウ?」

海のと真ん中にそれはその場にふさわしくない豪華な船がIS学園の海を渡っていた。

それは普通の船にも見えるが一つだけ異様な特徴があった。

「……………サウザーよ、お前の弟子に会うと言うのは分かっているしかし、この船の形はどうにかならなかつたのか?」

ケンシロウと言うガタイのいい男が船の真ん中にある異様なものを指さした。

「いいではないかあれぞ私の誇り!!そして目印なのだ!!」

そう船の真ん中に聖帝十字陵（操縦席）がでかどかと立っているのだ。

「だがこのままいけば俺達もただでは済まないぞ?」

そう、このまま聖帝十字船（仮）がIS学園に突っ込むと大惨事になりかねない。

ケンシロウはその大惨事を回避するため何とかサウザーを説得しようとするのだが

.....

「問題ない!!そのためケンシロウお前とお前の兄弟達を連れて来たのだ!!」

つと大きく胸を張って威張っている。

「これ以上は言っても無理だな……。」

ケンシロウはサウザーに聞こえない程度に愚痴と溜息を吐いた。

「ケンシロウ大変だ!!」

すると謎のヘルメットをかぶった男が慌ててケンシロウの方に向かってくる。

「どうしたジャギ兄さん?」

彼の名前はジャギ数年ケンシロウに負けしばらく静かにしていたがとある心境の変化でケンシロウと仲直りし今に至る。

「大変なところじゃねえこの船に2機のIS反応がこちらに向かっている!!やっぱりこんなでかい船じゃあ時間の問題だったみてえだ!!」

ケンシロウの不安が的中してしまったらしい、するとサウザーが……

「ほう、やはり一筋縄ではいかんな。では、行くぞケンシロウ!!」

「仕方がないな、それじゃあジャギ兄さん行ってくるよ。」

「お、おうあまり無茶すんなよ?」

「H A H A H A !!この聖帝サウザーにかかればI Sなんぞただの鉄屑、大船に乗った気で待っているのだあああ!!」

無駄にでかい高笑いがこの静かでどこか異質な海に響き渡る。

時を遡る事数時間前

一夏side

鈴が一直線にI S学園の玄関にたどり着き間髪を入れずI Sを展開し海へと飛んで行った、俺もその後を追うように飛んで行った。

一体何が起きているかはよく分からなかったが海に浮かぶものすごく異質なものを
見て何となく察しはついた。

ピラミッドがそこに浮いていた、しかも移動している。どうやら船のようだ……

「おい、鈴……あれ……」

とりあえず鈴に問いかけてみる。

「……やっぱり……あのバカ師匠……とりあえずあのでつかいのは破壊決定ね。」

どうやら案の定先ほどの電話の主の趣味のようだ。

鈴は怒りで少し我を忘れていたようなのでとりあえずあの船もどきの破壊が終わつ
たら（沈まない程度）鈴をなだめるとしよう。

「おらあああああああ覚悟しろやああバカ師匠!!」

そう考えていると鈴が特攻し始めた。

とりあえず俺は鈴の追跡を続行し、その破壊活動のサポートをすることにした。

個人的に俺が離れている間にどんな人に修行をつけてもらったのかが気になったか
らだ。

船の近くに接近するとガタイのいい男達が数人見えた。

続
く。